

四柳白山下遺跡Ⅱ



「土万呂」記載墨書土器 径13.6cm

1991

羽咋市教育委員会

四柳白山下遺跡Ⅱ

1991

羽咋市教育委員会



(1)掘り上がったSB04・05・SD04(北から)



(2)掘り上がったSB04・SD04(東から)



墨書文字 「倉富」



墨書文字 「倉富女」



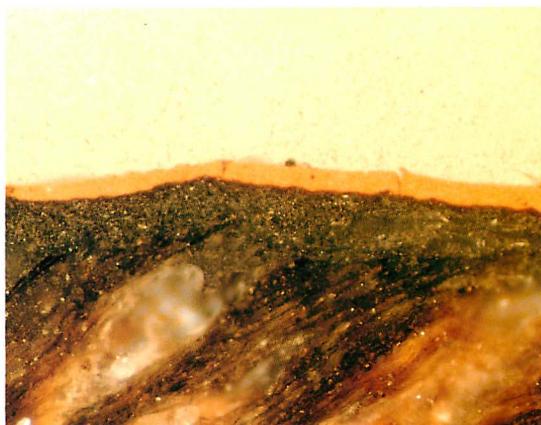
墨書文字 「土万呂」



墨書文字 「東家」



墨書文字 「忍人」



漆器の塗膜層写真 (100×)

四柳白山下遺跡発掘調査報告書Ⅱ

目 次

	頁
例 言	V
第1章 遺跡とその周辺	1
第2章 調査に至る経緯と経過	3
第1節 第2次調査に至る経緯	3
第2節 第2次調査の経過（日誌抄）	4
第3章 第2次調査の概要	6
第1節 第2次調査区の設定	6
第2節 土層の概要	7
第4章 遺構と遺物	9
第1節 遺構の概要	9
第2節 各 説	9
(1) 溝 [SD01~17]	9
(2) 建 物 [SB04~07]	14
(3) 柱 列 [SA03]	18
(4) 配石遺構 [SX02]	24
(5) 穹 状 溝 [SU14~19]	32
第5章 出土遺物	33
第1節 各 説	33
(1) 須 恵 器	33
(2) 墨書土器	40
(3) 土 師 器	42
(4) 木 製 品	45
(5) 石 製 品	46
(6) 鍛冶関係遺物	46
第6章 漆器の塗膜分析について	47
第7章 四柳白山下遺跡の大型植物化石	49
第8章 遺構と遺物の検討	53

図 版 目 次

卷頭図版 1 (1)掘り上がったSB04・05・SD04(北から) (2)掘り上がったSB04・SD04(東から)
 卷頭図版 2 遺跡出土墨書き器(上段・中段・下段左) 漆器塗膜層写真(下段右)

本文対照頁

図	版 1 (1)遺跡近景(北から) (2)調査風景(西から)	1・4・5
図	版 2 (1)SU14～19検出状況(南から) (2)掘り上がったSU14～19(南から)	32
図	版 3 (1)SX02検出状況(南から) (2)SX02内土器検出状況(南から)	24・28・30
図	版 4 (1)調査区全体遺構検出状況(西から) (2)調査区西側遺構検出状況(北から)	9
図	版 5 (1)調査区中央遺構検出状況(北から) (2)調査区東側遺構検出状況(北から)	9
図	版 6 (1)掘り上がった調査区全景(西から) (2)掘り上がった調査区全景(東から)	9
図	版 7 (1)掘り上がった調査区中央1(北から) (2)掘り上がった調査区中央2(南から)	9
図	版 8 (1)掘り上がったSB04・05・SD04(北から) (2)掘り上がったSB04・05・SD04(東から)	14・16
図	版 9 (1)掘り上がったSB06(南から) (2)掘り上がったSB07(南から)	17・18
図	版10 (1)SD14内ヒキリ板出土状況(南から) (2)SD06内土師器鍋出土状況(西から)	10・14
図	版11 須恵器 蓋	33
図	版12 須恵器 蓋	33
図	版13 須恵器 蓋・無台坏	33・34
図	版14 須恵器 無台坏・有台坏	33・34
図	版15 須恵器 有台坏	34
図	版16 須恵器 豆・壺・横瓶	34・40
図	版17 須恵器 壺	34・40
図	版18 土師器 豆・鍋・甌・壺・支脚	42・45
図	版19 土師器 木製品(第13・14図)	45・46
図	版20 柱根(第12図)	16・18
図	版21 墨書き文字1	40～42
図	版22 墨書き文字2	40～42
図	版23 四柳白山下遺跡の大型植物化石Ⅰ	49～52
図	版24 四柳白山下遺跡の大型植物化石Ⅱ	49～52

表 目 次

	頁
第1表 土層分類表	7
第2表 建物計測表	20
第3表 須恵器環蓋・口径分布	33
第4表 須恵器有台環・口径分布	33
第5表 須恵器有台環・主成分分析による2次元散布	33
第6表 須恵器無台環・口径分布	34
第7表 須恵器無台環・主成分分析による2次元散布	34
第8表 土師器甕・口径分布	42
第9表 四柳白山下遺跡の大型植物化石一覧表	51・52
第10表 四柳白山下遺跡出土土器の器種構成比	53
第11表 四柳白山下遺跡出土土器観察表1	57
第12表 四柳白山下遺跡出土土器観察表2	58
第13表 四柳白山下遺跡出土土器観察表3	59
第14表 四柳白山下遺跡出土土器観察表4	60
第15表 四柳白山下遺跡出土土器観察表5	61
第16表 四柳白山下遺跡出土土器観察表6	62

挿 図 目 次

	頁
第1図 古代の遺跡周辺図	1
第2図 第2次調査区域図	3
第3図 第2次調査区グリッド割図	6
第4図 調査区土層断面図	8
第5図 SD01～17出土須恵器実測図1	10
第6図 第2次調査区全体図	11・12
第7図 SD01～17出土須恵器実測図2	13
第8図 SB04・05・SD04実測図	15
第9図 SD01～17出土墨書き土器	17
第10図 SD01～17出土土師器実測図1	19
第11図 SD01～17出土土師器実測図2	20
第12図 SA03・SB04～07柱根実測図	21
第13図 SD01～17出土木製品実測図1	22
第14図 SD01～17出土木製品実測図2	23
第15図 SX02実測図	24
第16図 SX02出土須恵器実測図1	25
第17図 SX02出土須恵器実測図2	26
第18図 SX02出土須恵器実測図3	27
第19図 SX02出土須恵器実測図4	28
第20図 SX02出土須恵器実測図5	29
第21図 SX02出土墨書き土器実測図	30
第22図 SX02出土土師器実測図	31
第23図 SU14～19実測図	32
第24図 SX02出土土師器実測図2	32
第25図 包含層出土須恵器実測	35
第26図 包含層出土須恵器実測図2	36
第27図 包含層出土須恵器実測図3	37
第28図 包含層出土須恵器実測図4	38
第29図 包含層出土須恵器実測図5	39
第30図 包含層出土墨書き土器実測図	41
第31図 包含層出土土師器実測図	43
第32図 包含層出土土師器実測図	44
第33図 包含層出土土師器実測図3	45
第34図 砥石実測図	46
第35図 坂堀実測図	46
第36図 第1・2次調査区域図	55・56

例　　言

1. 本書は、石川県羽咋市四柳町に所在する「四柳白山下遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、給油所建設にともなうもので、羽咋市教育委員会が実施した。調査に係る費用は原因者である上田石油株式会社の負担および国庫の補助による。
3. 調査は、羽咋市教育委員会社会教育課主事谷内頑央・同主事今井淳一が担当した。また庶務は同係長小原慎哉があたった。
4. 調査期間は平成2年5月8日から7月9日まで延べ38日間を要した。
5. 出土遺物の整理にあたっては、遺物洗浄・接合・記名・実測・トレース作業を能山真登加・楠みち子・長瀬文江・高田久栄・里見節子、図版作成を今井淳一、写真撮影を谷内頑央がそれぞれ分担した。
6. 遺構・遺物の挿図に対する指示は下記のとおりである。
 - (1) 挿図の縮尺は掲載のスケールで示した。
 - (2) 方位はすべて磁北を示し、水平基準は海拔高を示している。
 - (3) 写真図版の遺物には通し番号を付し、本文中の挿図番号に一致する。
 - (4) 土器実測図の断面は、須恵器を黒塗り、その他の土器類を白ぬきで示した。
 - (5) 遺構の略号はつぎのとおりである。

柱列 [SA] ・掘立柱建物 [SB] ・溝 [SD] ・畝状溝 [SU] ・その他の遺構 [SX]
7. 調査によって得られた資料は、羽咋市教育委員会が一括して保存管理にあたっている。
8. 発掘調査から報告書作成に至るまで、多くの方々や機関からご教示・ご協力をいたただいた。以下にご芳名を記して深甚の謝意を表したい。（敬称略・順不動）
 浜岡賢太郎 四柳 嘉章 小嶋 芳孝 北野 博司 木立 雅朗 川畠 誠
 吉岡 康暢 宇野 隆夫 平川 南 南木 瞳彦 山本 直人 善端 直
 石川県教育委員会 石川県立埋蔵文化財センター 石川県埋蔵文化財保存協会
 四柳町会 大町町会 酒井町会 下曾弥町会 金丸出町会
 羽咋産業建設株式会社 上田石油株式会社 羽咋市歴史民俗資料館
9. 本報告のなかでの各種分析について、漆器の塗膜分析は四柳嘉章氏に、大型植物化石の同定は南木瞳彦氏に、坩堝に付着した金属の鑑定は田口 勇氏（国立歴史民俗博物館教授）にそれぞれお願ひした。
10. 本報告書を作成するにあたって、四柳嘉章・南木瞳彦の両先生より玉稿を受けた。
11. 本報告書の執筆分担は、つぎのとおりである。

四柳嘉章	（石川県立輪島高校）	……………	第6章
南木瞳彦	（流通科学大学）	……………	第7章
今井淳一	（羽咋市教育委員会）	……………	第1～5章・第8章
12. 本書は、今井淳一が編集した。

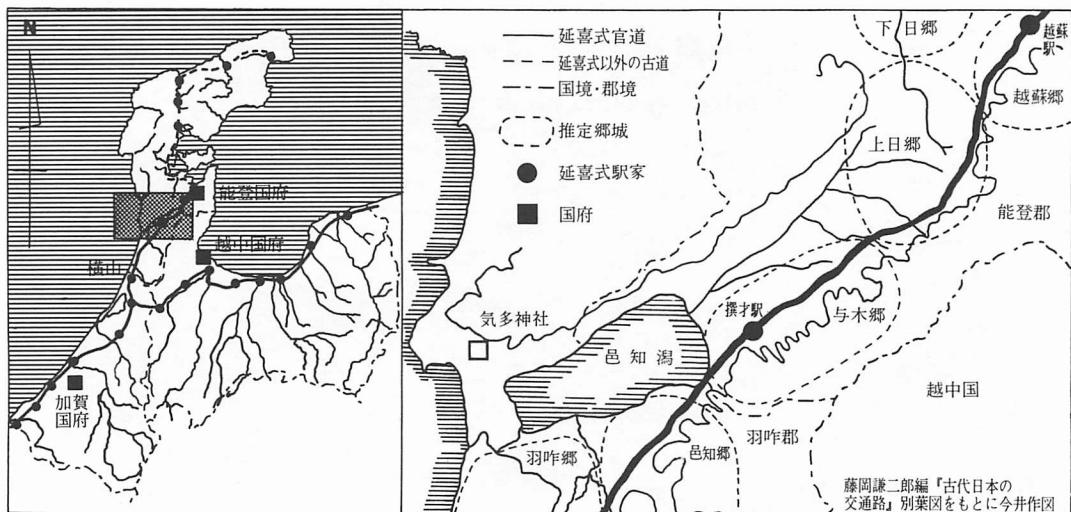
第1章 遺跡とその周辺

古代における能登国は石川県の北半部、日本海に大きく突き出た能登半島をその領域とし、養老二年（718）二月に越前国から羽咋・能登・鳳至・珠洲の四郡が分離して一国の扱いをうけている（第一次立国）。そのなかでも最大の生活舞台としてあり続けているのが邑知地溝帯と呼ばれる細長い沖積地であり、半島基部南西端の羽咋から北東端の七尾まで平均幅約5km、長さ25kmの半島横断路として、各時代の文化形成に大きな役割をはたしている。

四柳白山下遺跡はこの地溝帯の中央部南寄りに位置し、旧邑知潟（干拓前）北東岸にあたる扇状地上に展開している。また、文献史料によれば、このあたりは古代の官道（駅路）に指定されており、加賀国の深見駅で北陸道の本路から支路が分岐して、地溝帯南側の石動山系丘陵の山麓沿いを北上していく道筋にあたっている。

さらに、『延喜式』卷二十八、兵部省の「諸国駅伝馬」条は加賀国の横山駅に続いて能登国に撰才、越蘇の二駅、各五疋を記しているが、このうち、撰才駅の遺称地とされているのが、現在の羽咋市余喜地区であり、『日本地理志料』や『石川県史』では式内社の餘喜比古神社が鎮座する大町および本遺跡が所在する四柳町周辺に撰才駅を想定している。余喜地区は『和名類聚抄』記載の能登郡与木郷に比定される地域で、年代的にはこの郷名の初見といわれる「越前国能登郡翼倚里」と記された平城宮出土木簡に、和銅六年（713）と紀年銘が入っていることから、少なくとも律令体制初期の段階には、越前国に属しながらも地方行政の末端区画として編成されていたことがうかがわれる。また、能登における官道（駅路）設定の時期は明かではないが、前述した第一次立国の段階には機能はじめたようである。

一方、平成元年（1990）に行われた本遺跡の第一次発掘調査からは、当時の状況を探る上で貴重な考古資料が得られている。特に、検出された三棟の掘立柱建物は三度にわたる同一地点



第1図 古代の遺跡周辺図

での建て替えであり、主軸方位が統一されたものであった。これらの建物の柱穴掘形や包含層から出土した土器の型式は8世紀前半代を示しており、律令体制下で能登国が第一次の立国をしたのち、天平十三年（741）に越中国へと併合され、天平勝宝九年（757）に再び分立（第二次立国）するという経過のなかで、与木郷域内にも集落が成立し存続していたことの積極的な傍証となっている。羽咋郡の郡家と能登郡の郡家および能登国府を結ぶ官道（駅路）沿いで、両郡の接点にあたる本遺跡周辺は、古代の邑知地溝帯を考える上において注目される地域であり、考古資料と文献史料との一致が期待される地域といえる。

参考文献

- 『羽咋市史』 原始・古代編 1973 石川県羽咋市
『鹿島町史』 通史・民俗編 1985 石川県鹿島郡鹿島町
『七尾市史』 通史編 1974 石川県七尾市
『古代日本の交通路II・IV』 藤岡謙二郎編 1978 大明堂



掘りあがったSB01～03(第1次調査)

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 第2次調査に至る経緯

平成元年1月17日、上田石油株式会社（以下：上田石油）より羽咋市四柳町地内における個人及び給油所建築を目的とした開発計画が羽咋市教育委員会（以下：市教委）に提出された。

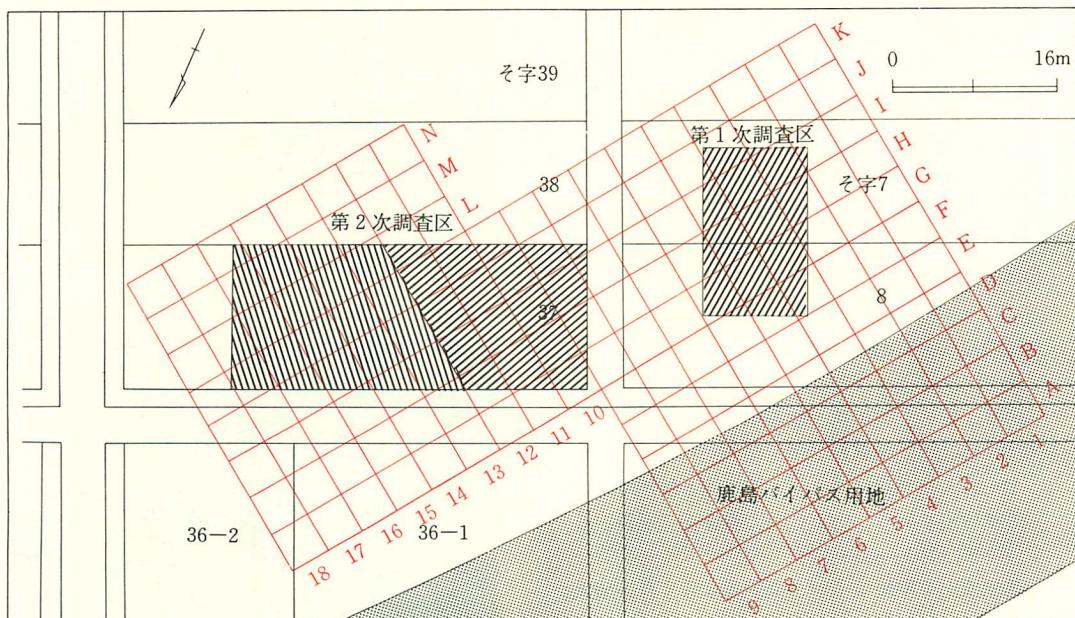
これは、上田石油の既存の住宅と給油所がいずれも国道159号鹿島バイパスの建設予定地内にかかったことから、上田石油がそれらの移転先を同バイパスのルート予定地に隣接する四柳町そ字6・7-1・8-1・36-1・36-2・37番地の現況水田耕作地に求めたことによるものであった。

開発計画を受けた市教委では1月18日と25日の2日間に分布調査を行い、開発予定地周辺に古代の遺跡（四柳白山下遺跡）が広がっていることを発見した。

ただちに上田石油をはじめ関連諸機関と発掘調査に関する協議に入った市教委は、移転契約の締結により建築計画が具体化していた宅地について緊急に第1次調査を実施することとし、給油所分に関しては上田石油と調査費用のねん出方法などの調整を行いながら、継続的に第2次調査として行っていくことを確認した。

調査ごとに記述すると、第1次調査は市教委が事業主体となり、文部省の補助金を受けて実施した。調査期間は平成元年4月10日から6月2日まで延べ33日間。調査面積は約200m²であった。続く第2次調査は、引き続き市教委が事業主体となり、原因者である上田石油の負担分及び文部省補助金を受けて実施した。調査期間は平成2年5月8日から7月9日までの38日間、調査面積は約400m²であった。

なお、調査区域・グリッド割等は第2図及び第3図のとおりである。



第2図 第2次調査区域図(1/750)

第2節 第2次調査の経過（日誌抄）

5月8日（火）小雨

本日より現地入り。バックホーによる調査区域の表土除去作業及び発掘機材の搬入を行う。

5月9日（水）晴

表土の除去とベルトコンベアの搬入を行う。

5月10日（木）・11日（金）晴

バックホーによる表土除去作業を継続する。

5月14日（月）曇りのち雨

第4層の掘り下げ作業を行う。

5月16日（水）晴

調査区域全体、第4層及び第5層の掘り下げ作業を行う。渋谷利雄氏来跡。

5月17日（木）晴

第5層の掘り下げを継続。I9区で配石状の遺構を検出。土器を多く含んでいる。

5月18日（金）曇り一時小雨

第5層の掘り下げ作業を継続する。

5月21日（月）曇りのち晴

グリッド9～10列（配石）を除く調査区域の第5層及び第6層の掘り下げ作業を行う。

5月22日（火）晴

第6層直上までの掘り下げ作業を継続。

5月23日（水）曇り時々小雨

第5層の掘り下げの結果、南北方向に走る畝状溝を数個検出。

5月24日（木）晴

配石遺構の写真撮影、畝状溝の平面図取り・掘り下げ・レベル記入・写真撮影を行う。

5月25日（金）晴

配石遺構周辺を除く、調査区域内の遺構検出作業を行う。県文化課・谷内尾氏他1名来跡。

5月28日（月）晴

グリッド杭の打ち直しを行う。

5月29日（火）雨のち晴

調査区北・西・東壁面をそれぞれ削平・整理する。また、K～L列の第5層を掘り下げる。

5月30日（水）・31日（木）晴

I～L・11～16列グリッド間の第6層掘り下げと遺構検出を行う。市文化財保護審議会来跡。

6月4日（月）・5日（火）晴

遺構検出を継続するが、面が見づらく作業難航。



5/9 調査前の供養



5/18 第5層を掘り下げる



5/30 市文化財保護審議会来跡



6/6 配石遺構を掘る

6月6日（水）晴

全体の遺構検出と配石遺構の掘り下げを行う。

6月7日（木）晴

配石遺構の平面図取りを行う。

6月8日（金）晴

調査区全体にわたる溝・ピット等の遺構を検出。

6月11日（月）・12日（火）晴

検出面での遺構の掘り下げ（半掘）作業を行う。

6月13日（水）晴

各遺構の掘り下げによって、溝に沿った形、あるいは溝内に柱筋を通す柱穴を確認。

6月14日（木）・18日（月）晴

遺構の掘り下げを続行。溝を巡らせた内で、掘立柱建物の柱穴と思われる遺構が認められる。

6月19日（火）晴

各遺構の掘り下げの他、配石より西側で第6層の掘り下げ作業を行う。

6月27日（水）曇り一時雨

配石遺構の断面削平作業及びI 11区周辺の平面図取り、遺構面全体の整理作業を行う。

6月28日（木）曇り時々晴

昨日の作業を続行の他、配石の断面図を作成。

6月29日（金）晴

配石遺構周辺の掘り下げ作業及び掘立柱建物周辺の平面図取りを行う。

7月2日（月）晴

遺構検出作業の結果、配石と平行に走る溝を確認。平面図作成作業も続行。

7月3日（火）曇り

平面図作成作業を続行。

7月4日（水）曇り時々小雨

晴れ間をぬって、レベル記入作業を行う。

7月5日（木）曇りのち晴

検出遺構の全掘。遺構内遺物の取り上げ。柱穴に残る柱根の出土状況を断面撮影で記録する。

午後より全体撮影を行う。

7月6日（金）晴

各柱根の取り上げ、調査区壁面の削平・整理を行い、続けてその断面図作成作業を行う。

7月7日（土）晴

断面図作成作業を続行。

7月9日（月）晴

発掘機材撤収。本日をもって現地調査終了。



6/14 掘立柱建物を掘る



7/5 溝を掘る



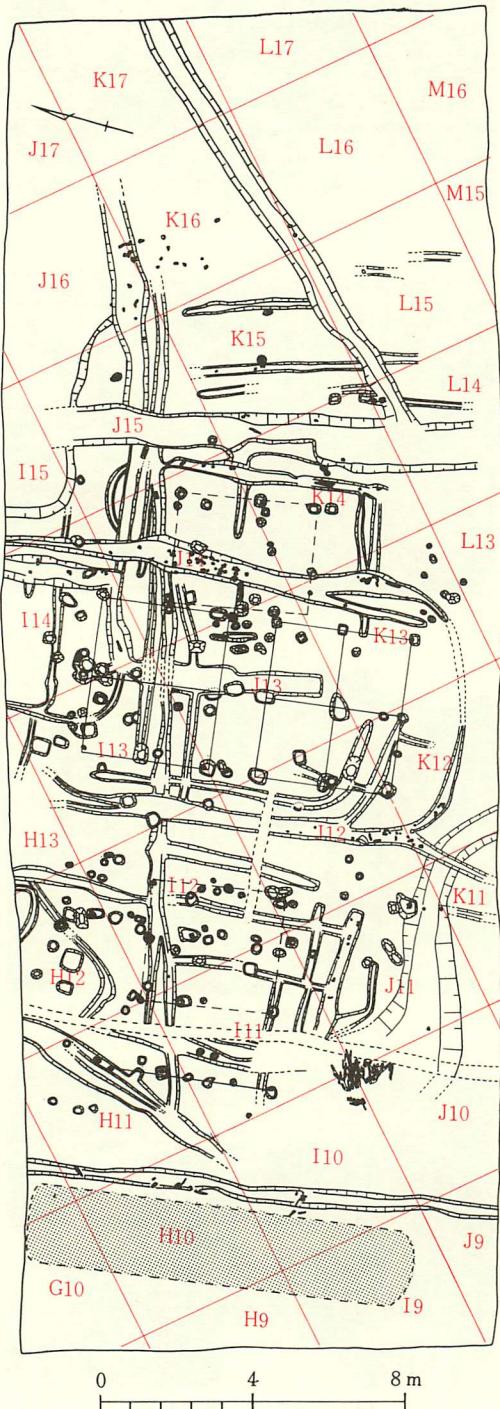
7/13 現地説明会 48名参加



8月 室内での遺物整理

第3章 第2次調査の概要

第1節 第2次調査区の設定



第3図 第2次調査区グリッド割図(1/200)

本遺跡の第2次調査は、平成元年1月18日と25日に実施した分布調査の成果をもとにして、調査区域を設定する作業からはじまった。

この分布調査の詳細については、第1次調査の報告書である『四柳白山下遺跡I』で説明しているので、ここではその結果を引用するだけにとどめておきたい。

分布調査対象区域において、第1・2・7・10・11トレンチ周辺が給油所建設予定地に該当している。このうち、対象区域の最も低地となる第1・2トレンチでは遺物包含層を確認できなかったため、対象区域の南側で良好な遺存状態を保つ包含層が認められた第7・10・11トレンチ周辺を中心として発掘調査を実施することとした。

ただし、周囲を農道と農水路で囲まれているために調査区域外となる所が多く、実質調査面積は約400m²となった。

発掘調査区の設定には、第1次調査と同じく国道159号鹿島バイパス予定地内のセンター杭(No.126・127)を基準に4m×4m方眼のグリッドを割り付けた。

第3図に示したように、南北方向にアルファベットを、東西方向にアラビア数字を付して呼称している。この座標が交差する点の名称を交点の東北側のグリッド名とした。

また、東西方向のグリッド割に対応する形で区域が二分されており、アラビア数字の9~12列間が原因者負担対象区域、同じく13~17列間が文部省補助対象区域になっている。そして、これらをまとめて第2次調査区域と呼んでいる。

第2節 土層の概要

遺跡は邑知地溝帯の中央部南端、碁石ヶ峰山地を開析して流れ出る地獄谷川などの小河川によって形成された小規模な扇状地の扇端部に立地している。そのため基盤は黄褐色系の砂質層であり、伏流水の湧き水が激しい所となっている。

この基盤砂層までの平均的な層位は、礫や鉄分を含む茶褐色土（第1a層）、礫を含む褐色土（第1b層）、淡青褐色細砂質土（第2層）、黒茶褐色粘質土（第3層）、茶褐色砂質土（第4層）、黄茶灰褐色砂質土（第5層）、そしてその下に奈良時代の整地層である黒灰色砂質粘土層（第6層）がひろがっている。

第1a層・1b層の土層中には礫石や中世から近世にかけての陶磁器類が含まれている。また、調査区全体に近代以降の暗渠排水の跡が何本も走っていたり、調査区東側の部分で自然堆積というよりも人為的に埋め込んだ堆積状態を示している箇所や削平された箇所が顕著に認められた。

第6層全体の堆積状況は、調査区の東西方位にあたるG10～J17区間北壁のセクションで、標高14.5～14.7mと平均的な厚さ20～30cmでほぼ水平に堆積している。調査区南側のセクションは湧き水により崩壊したため記録としては残せなかったが、現地調査時の平面的な様相及び次に述べる東壁・西壁の南側での標高がそれぞれ15.2mと15.4m前後であることから、北壁と同様の傾向であったと判断できよう。

また、水平状態の東西方位に対して南北方位にあたるI9～G10区間のセクションでは、平均的な厚さ20～30cmながら南側で標高15.2m、北側で14.6mと約12m間隔で60cm前後の落差をもって堆積している。M17～J17区間東壁での傾向もこれと同様であり、第1次調査の成果とあわせれば、奈良時代の整地層は厚さ20～40cmで邑知地溝帯の南東山麓側から地溝帯渦側沖積地へ、方位的には南から北へ向かって約5度の傾斜で、北に向かうにつれて徐々に薄くなりながら層向していたと想定できる。

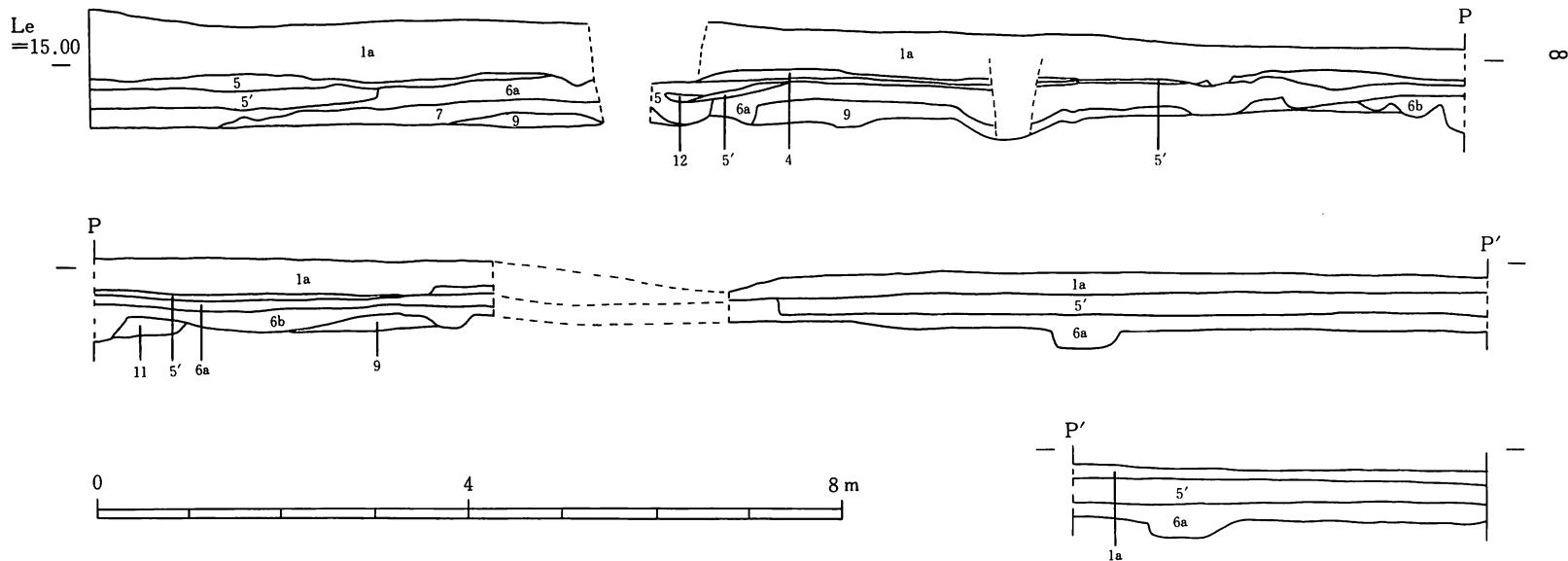
遺構の大半はこの整地層から掘り込んでいるため、第4層までをバックホーによって除去し、整地層上面である第5層以下を人力で掘り下げて遺構検出を行った。

しかし、先にも述べたように後世の搅乱層や検出面自体の複雑さなどが相まって、整地層での遺構検出は極めて判断がむずかしく、畝状溝や配石遺構などを検出した以外、大部分は基盤砂層までを掘り下げて確認した。

第1表 土層分類表

第1a層	茶褐色土（礫、鉄分含む）
第1b層	褐色土（礫含む）
第2層	淡青褐色細砂質土
第3層	黒茶褐色粘質土
第4層	茶褐色粘質土
第5層	黄茶灰褐色砂質土
第6a層	暗黒灰色粘砂質土
第6b層	明黒灰色粘砂質土
第6c層	黒茶灰褐色粘砂質土
第7層	黄褐色砂質土
第8層	暗灰褐色土（炭化物混入）
第9層	淡青灰色粘土（炭化物混入）
第10層	黒灰褐色砂質土
第11層	灰褐色砂質土
第12層	灰褐色、茶褐色混合砂質土

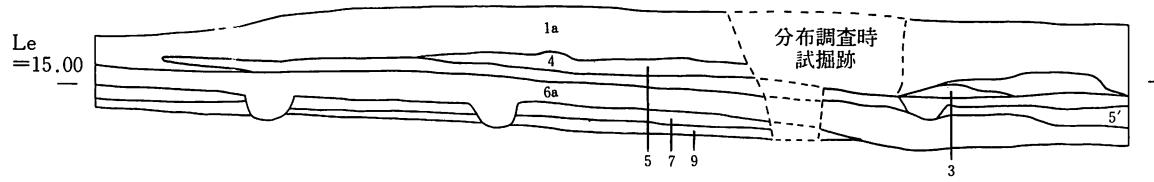
G 10～J 17区間北壁のセクション



M 17～J 17区間東壁のセクション



I 9～G 10区間西壁のセクション



第4図 調査区土層断面図(1/80)

第4章 遺構と遺物

第1節 遺構の概要

第2次調査区のほぼ全域にわたって奈良時代の遺構を検出した。発見したおもな遺構には、掘立柱建物4棟以上・素掘りの溝17条・柱列1条・配石1基・畝状溝6条などがある。

これらの遺構は、何回もの建て替えによって複雑に重なりあった状態で見つかっているが、全体的には奈良時代前半を通して営まれた集落の一部を構成している。

また、建物・柱列のすべては掘立柱構造である。したがって、以下の記述においては、単に「建物」と称することとし、特に掘立柱であることをことわらない。

遺構の全般的な分布は、調査区を南北方向に貫通する溝SD01と溝SD16の間にはさまれた区画内で、溝によって囲い込まれた建物が集中する傾向が認められる。この東西距離20m程の区域では、次に述べる建物4棟分の他に、11箇所の柱根をとどめる柱穴を検出しており、柱筋の一部として当てはまるものが多いことから、実際には未検出の建物あるいは柱列が数棟単位で存在しているものと推定される。

溝SD01以東は溝のみの検出で、密度が薄くなるようだが、調査区外の東側部分を分布調査時に試掘した際（第11トレンチ）、良好な遺存状態を保つ包含層を確認していることから、遺跡としてはさらに広がっていることが予想される。

溝SD01以西では、SD01に近接し、並行する形で配石SX02を検出している。南北方位で大量の遺物を含んでおり、さらに西側で第1次調査の際検出した東西方位のSX01との関連性が高いと考えられる。

遺構の記述にあたっては、溝・建物・柱列・配石・畝状溝の順に記述したが、有機的な関係を有し、一連の遺構と考えられる建物とその周りをめぐる溝に関してはまとめて報告した。

第2節 各 説

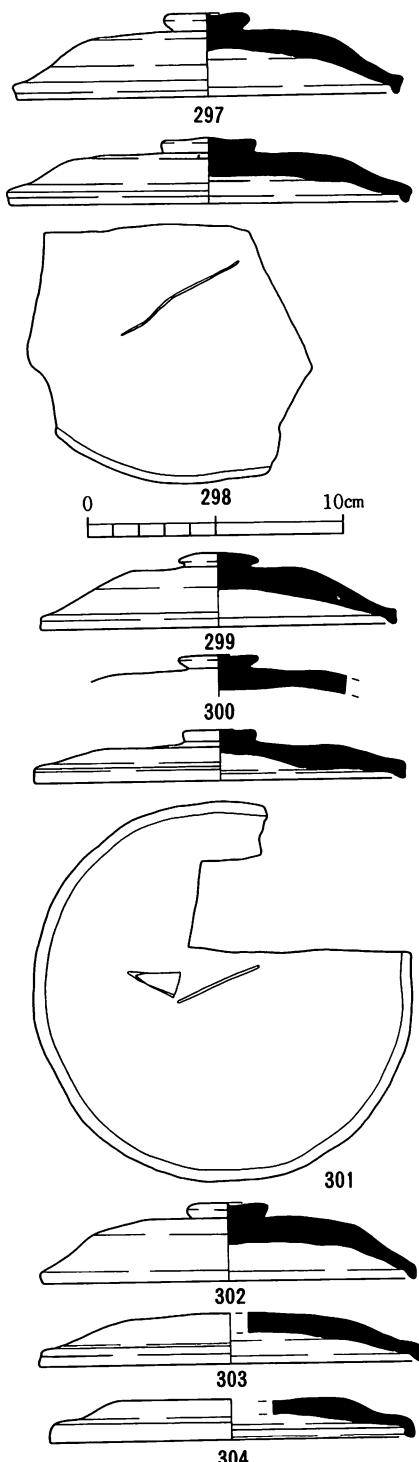
(1) 溝 [SD01~17]

SD01

調査区西側に位置する南北溝である。両端はそれぞれ区域外へと続いているが、配石遺構であるSX02に並行して流れ、近接していることから、様相の異なる第1次と第2次調査区の空間を区画する溝であった可能性も考えられる。溝幅は50cm、深さ20cm、検出総延長12m以上を測る。埋土からは曲物の底板（第13図20・21）や棒状の加工木片（第13図15・16・40・43・46・48）といった木製品及びクルミやモモの核4点など出土がしており、木製品のなかには全面が焼けているものもみられる。

SD02

H11区を中心として南西から北東に走る斜行溝。溝幅は60cm、深さは最深部で18cmを測るが、南西へ行くほど浅くなり、I10区で途切れている。



第5図 SD01~17出土土器
実測図1(1/3)

SD06

L14区で検出した南北溝。溝幅は20cm前後で、北端をSD17に切られている。以下に記述するSD07~11に関しても、浅い溝としての形状は同じであり、SD17との切り合い関係が生じている。SD06の埋土からは土師器の鍋片が1個体分（第11図353）とクルミの核が3点出土している。

SD07

K15区内で検出した南北溝。浅いため一部が途切れているが、L14区内北東端でSD06と接する。

SD08

L~K15区内で検出の南北溝。埋土より墨書き土器1点（第9図336）とクルミの核2点が出土している。

SD09

K15区内でSD17から北へ3.3mを検出した南北溝であるが、南側は未検出であった。埋土より須恵器の有台壺（第7図311）が出土している。

SD10

L15区内でSD17より南で70cmのみ検出の南北溝。埋土より須恵器の有台壺（第7図316）が出土している。

SD11

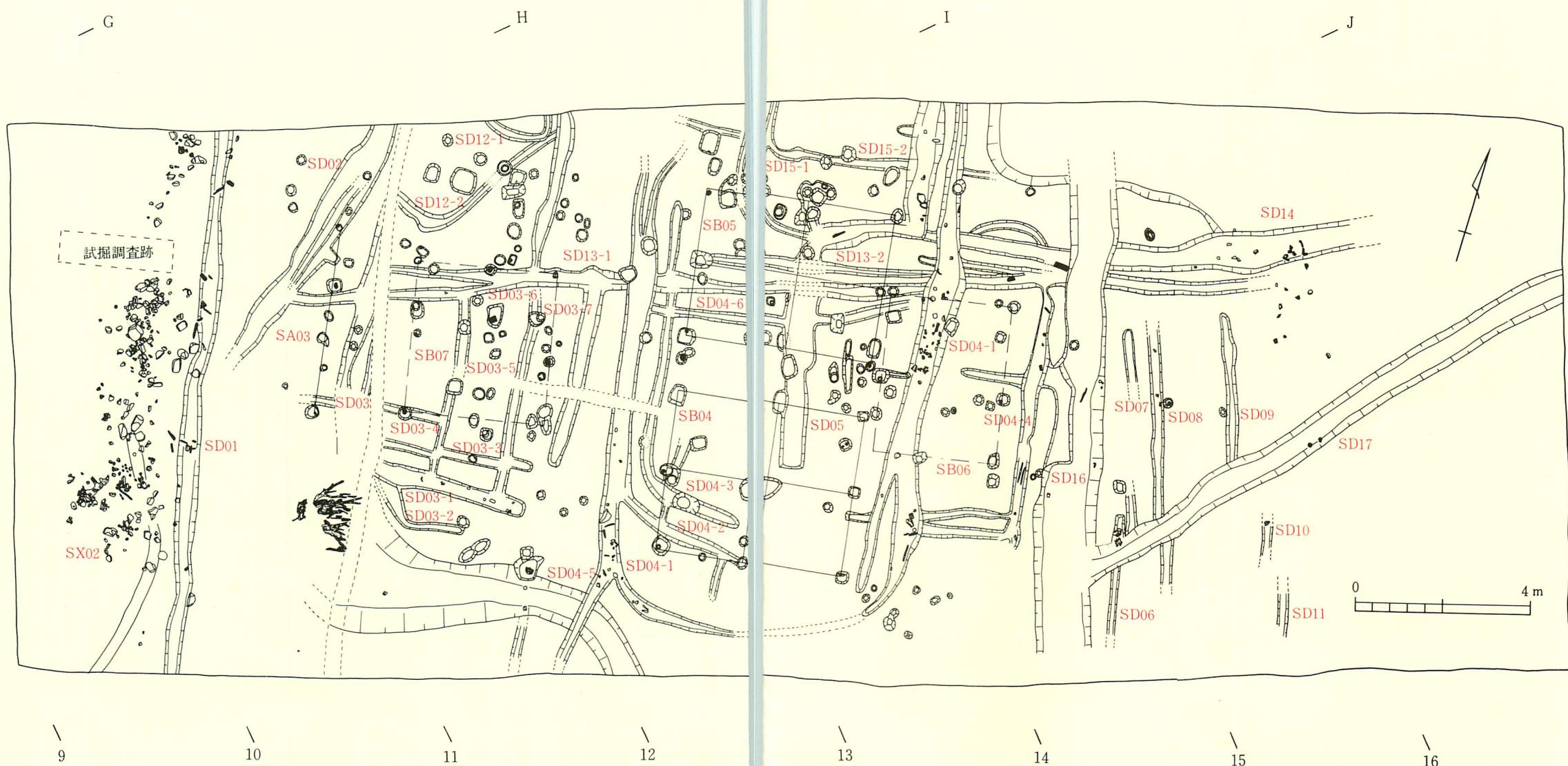
前述のSD10から東へ20cmと近接した位置で検出。SD06~11のなかでは最も東端にあたる。

SD12

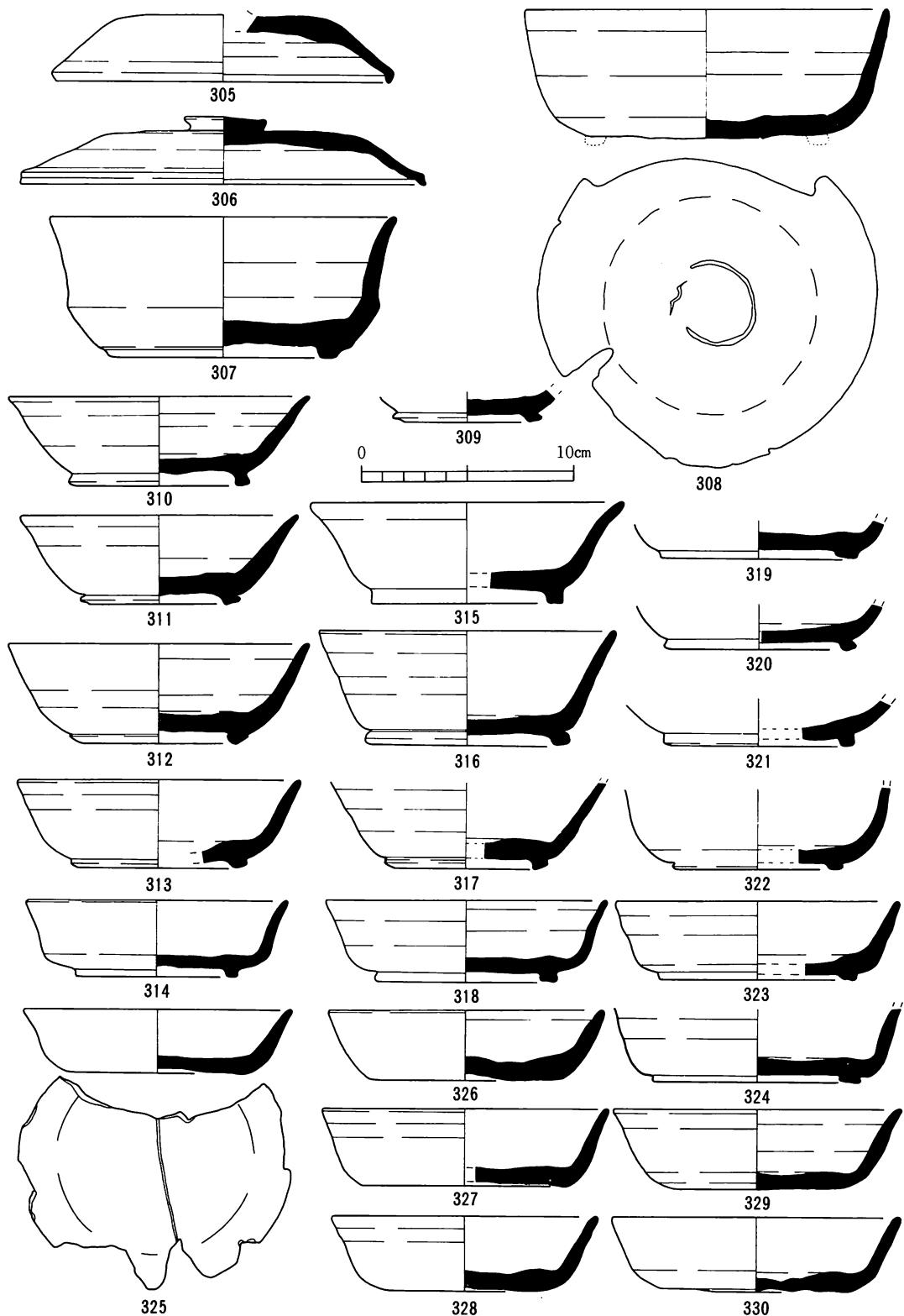
H12区内から調査区外の北へ流れるL字状の2条の溝。分岐する形で後述するSD04のように建物と関連する可能性も考えられるので、それぞれ12-1・2と枝番号を付した。SD12-2はH13区内でSD03-5に切られており、SD12-1の埋土からは大形の舟形木製品（第13図33）と思われる加工木片が出土している。

SD13

検出総延長21m、溝幅20~45cm前後を測る東西溝



第6図 調査区全体図(1/120)



第7図 SDO1~17出土土器実測図2(1/3)

であるが、I 12・J 14区間にそれぞれ分岐点がある。溝底の標高は調査区の西と東で、西の方が約15cm高く、分岐点の形状とも合わせ、水は西から東へ流れていたと推定される。また、S D04-1・16に切られている。埋土からは須恵器・土師器・有孔木製品（第14図49）のほか、クルミ・モモの核7点が出土している。

SD 14

前述SD 13の北側を平行して流れる東西溝。切り合い関係によりSD 04-1・16よりも古いが、同じく交差するSD 05やSD 15との時期関係は確認できなかった。流れが途切れるJ 16区内で、遺物の溜まり部分があり、「東家」及び「忍人」と書かれた墨書き土器（第9図333・335）・ヒキリ板（第13図35）や棒状・板状の加工木片（第13・14図36・44・47）・クルミ・モモの核8点などが出土している。

SD 15

後述するSD 04と同様、建物の周りをめぐる形になると思われる。検出できたのは1条の南北溝から2条の溝が東へ湾曲しながら分岐する部分であり、東側はSD 04・05によって切られて不明である。埋土からは須恵器・土師器の小片のみであったが、溝で囲まれた部分にあたるI 14区内の包含層から、「倉富女」と記された墨書き土器（第9図582・584）が2点出土している。

SD 16

調査区東側に位置する南北溝である。検出総延長11m、溝幅は55～110cm、深さ15cm前後を測り、溝底は平坦である。SD 13・14をJ 15区内で切っている。埋土からは須恵器・土師器のほかに、ヒキリギネ・刀形の可能性が考えられる木製品（第13図34・41）や板状の加工木片（第14図31・38・41・45・50）・クルミ・モモの核31点などが出土している。

SD 17

L 14区内でSD 16の東肩から北東に走る斜行溝。検出総延長12.5m、溝幅70～80cm、深さ15～18cmを測る。SD 16と同時存在であるかは確認できなかったが、SD 06～09より新しい。

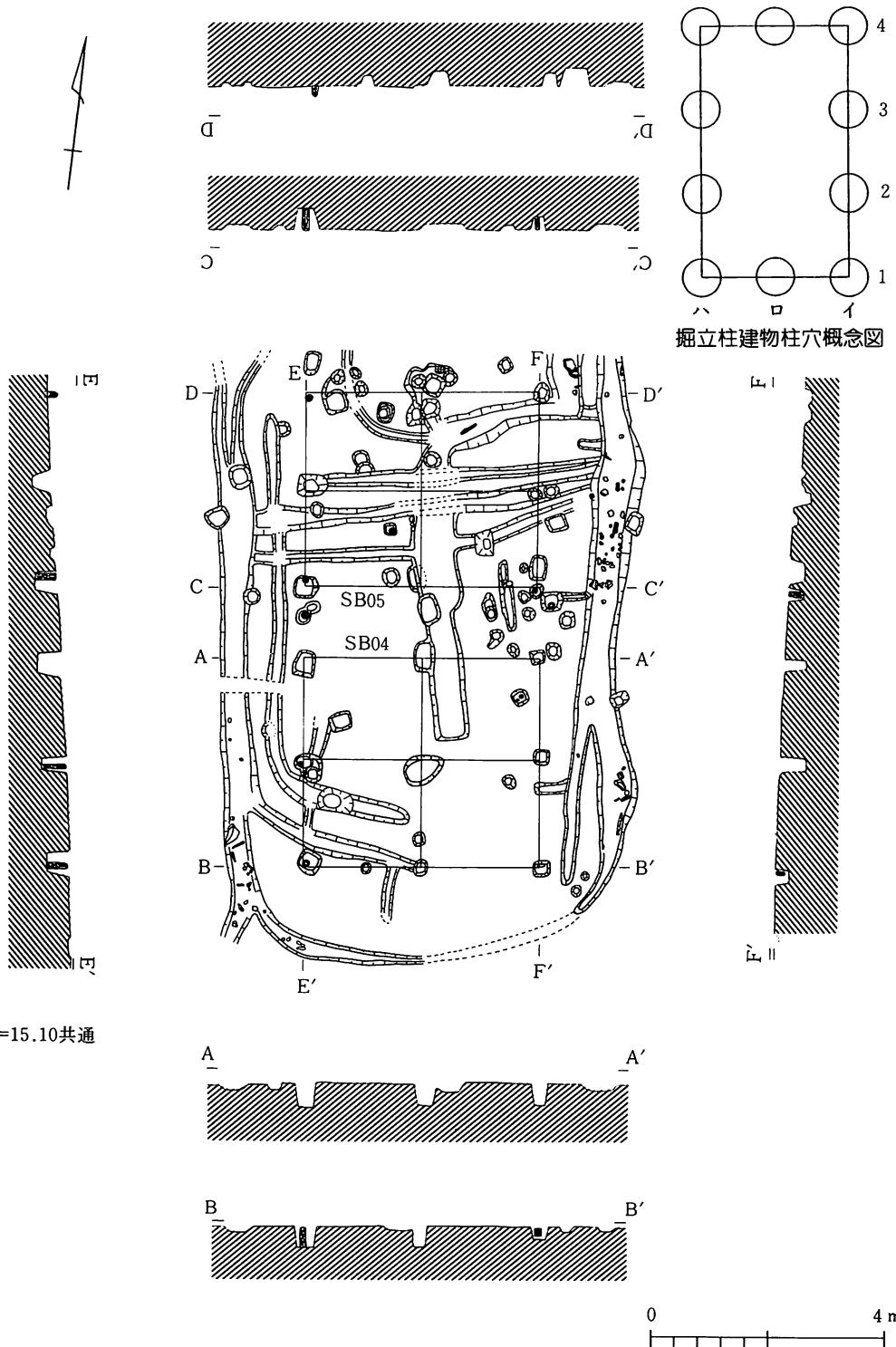
（2）建物 [SB 04～07]

SB 04・SD 04

調査区の中央部に位置する東西2間（4.16m）、南北2間（3.56m）の東西棟の総柱建物である。桁行（東西）方向の柱間は208cm等間、梁間（南北）方向の柱間は178cm等間である。

柱掘形は東側柱列が一辺30cm前後と小さいながら隅丸方形で整っているが、その他は不揃いで一辺25～60cmの略方形ないし不整形である。柱穴の深さは25～40cmで2箇所に柱根が残る。1箇所は柱穴ハ1で柱直径が7cm、もう1箇所が柱穴ハ2で柱直径がやはり7cmと細いものである。推定床面積は14.8m²、建物の主軸N-10°-Wを測る。

なお、東柱と思われる柱穴口2は50×65cmで不整形であるが、柱穴はハ2と同様に検出には至らなかった別の建物の柱穴と重複しているためと判断している。



第8図 SB04・05・SD04実測図(1/120)

S B 0 4 と後述する S B 0 5 は南北方位に柱筋を揃えて並び建っていたと推定されるが、それらの建物を囲むように溝 S D 0 4 が検出された。前後関係が不明のため、建物周辺を交差・分岐する溝の総称を S D 0 4 とし、さらに方位に応じて 1 ~ 6 までの枝番号を付した。

最も外周にあたる S D 0 4-1 は、S B 0 4 の南側柱列に沿って弧状に湾曲しながら建物の梁間（南北）方向を並行に流れしており、溝の中心線（主軸）と建物の柱列との距離は西側と東側でそれぞれ 120 cm 前後と平均している。この南北に走る部分で幅 50 ~ 70 cm、深さ 10 ~ 20 cm を測るが、湾曲部分では狭くなり幅 10 ~ 20 cm となる。

また、S D 0 4-1 で囲まれた区画内には分岐する形で S D 0 4-2・3・6 が検出されたが、同時存在か否かは確認できなかった。溝底の標高が北と南では約 35 cm 南の方が高いことから、水の流れは、調査区外の南側から S D 0 4-5 を通り、J 1 2 区内で S D 0 4-1 に注ぎ込まれ北へ流れていたと考えられる。

S D 0 4-1 の溝内には 2 箇所の遺物溜まりが認められた。1 箇所は J 1 4 区内の S B 0 5 と並行する部分で、須恵器の墨書き土器 3 点（第 13 図 331・332・334）・土師器の甌（第 11 図 354）・完形品 3 点を含む箸状木製品 12 片（第 13 図 1 ~ 12）・曲物材 4 片（第 13 図 24 ~ 27）・陽物状の製品 1 点（第 13 図 14）・クルミ・モモの核 11 点などが出土している。もう 1 箇所は J・K 1 2 区内で、須恵器・土師器のほか板状や棒状の加工木片（第 13 図 13・19・28・29・32・39）などが出土している。また、この地点では溝内の土層観察をした際に、植物化石の存在を肉眼で確認できたため、溝内から約 8 kg の土壌をサンプリングし、水洗選別による植物化石の検出と同定作業を行っている。同定結果については、南木陸彦氏による報告を第 7 章に掲載した。

S B 0 5・S D 0 4

先に記述したように、S D 0 4-1 に囲まれた区画内で S B 0 4 の北に 120 cm 隔てて並ぶ建物である。東西 2 間（4.14 m）、南北 2 間（3.50 m）の東西棟で、束柱は検出できなかったが、S D 0 5 に切られている点や隣接する S B 0 4 との関連などから総柱建物の可能性が高いと考えられる。桁行（東西）方向の柱間は 207 cm 等間、梁間（南北）方向の柱間は 175 cm 等間と、復元柱間寸法は S B 0 4 よりもわずかに小さくなっている。柱掘形は一辺 25 ~ 45 cm の隅丸方形ないし不整形であり、柱穴イ 1・ハ 1・ハ 3 の 3 箇所に柱根が残っている。柱直径はそれぞれ 11 cm、7 cm、11 cm を測る。

建物の推定床面積は 14.49 m²、主軸方位が N-10°-W で梁間（南北）方向の西側柱列が S B 0 4 のそれと同一線上に位置している。

S B 0 6・S D 0 5

調査区の中央部東寄りに位置し、柱間寸法が不揃いではあるが、柱筋が南北方向に一定である点や、溝で区画された空間内に柱根を遺存する柱穴が集中する点などから、建物として扱った。復元規模は東西 1 間（2.72 m）、南北 2 間（3.57 m）で、推定床面積 9.71 m²、主軸方位が N-13°-W を測る南北棟になる。ハ 1 にあたる柱穴は精査したが検出できなかった。桁行（南北）方向の柱間は東側柱列で北より、214 cm、143 cm。西側柱列で北より 185 cm である。梁間

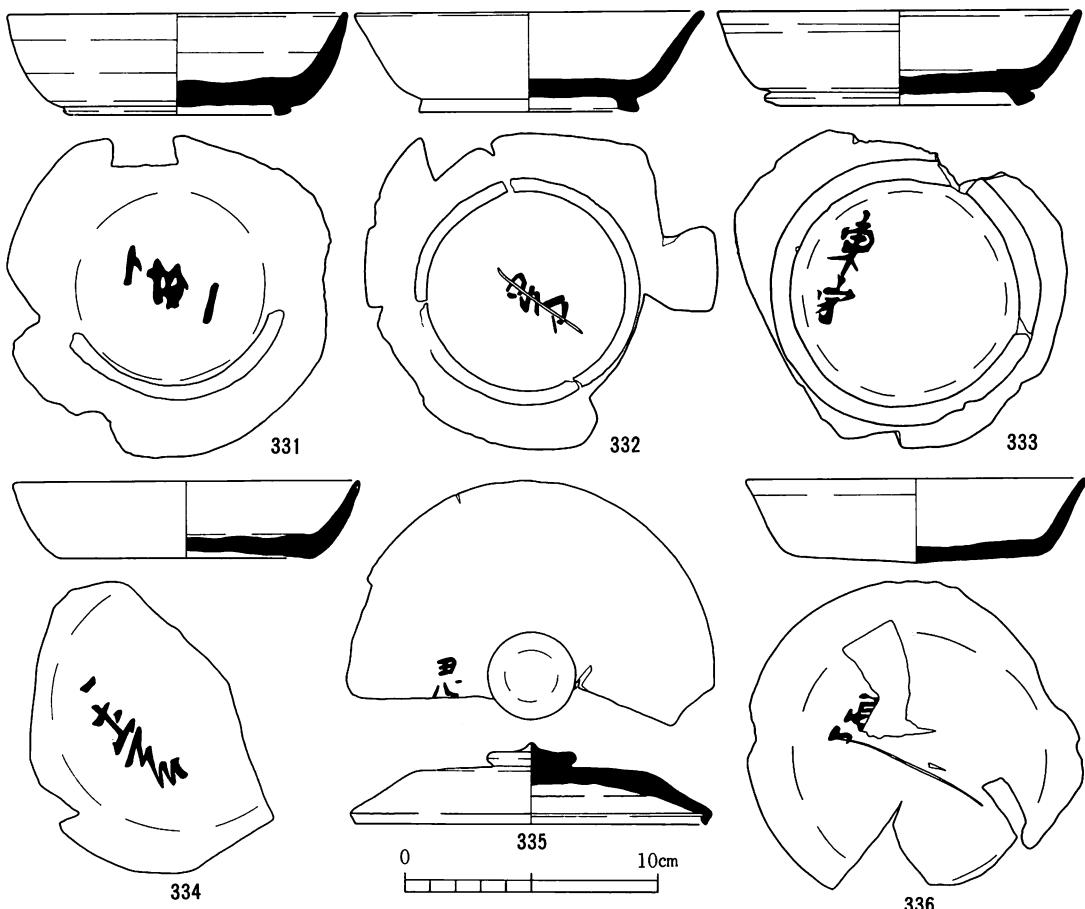
(東西) 方向の柱間は北側で 272cmを測る。柱掘形は一辺30cm前後の隅丸方形ないし20~30cmの不整形なものであり、深さは20~35cmを測る。柱穴イ2・ロ2には柱根が残っており、柱直径がそれぞれ 9cm、8cmと細いものである。

S B 0 6 から西へ約 170cm隔てて S D 0 5 が位置している。J 1 3 区南端に始まり、I 1 4 区内でクラシック状に蛇行して調査区外の北へ流れ込んでいると思われるが、排水機能のほかに建物を区画する溝の可能性も考えられため、ここで扱った。溝幅は60~80cmで、深さは南で15cm、北へ行くほど深く、I 1 4 区内では約35cmとなる。溝の中心線（主軸）は S B 0 6 の主軸方位と同一である。東西方位で交差する S D 15-2 を切っているが、S D 04-6・13-1・2・15-1 に関しては切り合いを確認できなかった。

S B 0 7・S D 0 3

前述した S B 0 4~0 6 は、それぞれ S D 03-1・S D 0 5 と S D 04-4 あるいは S D 04-3 と S D 04-4 で区画された空間内に集中する柱穴から復元できた建物である。これらと同様の傾向を示しているのが H~J 区グリッド間であり、S D 0 3 で区画された空間に S B 0 7 が位置しているが、この他にも検出には至らなかった別棟の建物の存在が予想される。

S B 0 7 の復元規模は東西 2 間 (3.12m) 、南北 2 間 (3.50m) で、推定床面積は 10.92m² 主



第9図 S D 出土墨書き土器実測図(1/3)

軸方位が S B 0 6 と同じく N-13°-W を測る南北棟になる。

梁間（東西）方向の柱間は 156 等間である。桁行（南北）方向の柱間寸法は東側柱列で北より 110 cm、240 cm。西側柱列で北より 205 cm、145 cm と不揃いである。柱掘形は一辺 30 cm の隅丸方形ないし円形を呈し、深さは 25~40 cm を測る。柱穴イ 2・イ 3・ロ 3・ハ 1 の 4 箇所に柱根が残っていた。柱直径はそれぞれ 9 cm、10 cm、10.5 cm、10 cm と平均している。梁間（東西）方向北側柱列であるイ 3・ロ 3 の柱根は片側面から底面までを斜位に削って尖らせた形態であり、S D 13-1 を切って建てられている。

また、建物と関連する遺構として扱った S D 0 3 は S D 04-1 のように明確な構成単位を示していない。南北及び東西方向に走る溝の一群を S D 0 3 と総称したもので、いずれも溝幅 20~45 cm、深さ 5~12 cm の浅い素掘りの溝である。最も西側を流れる S D 03-1 は近代の暗渠排水によって切られているため、断定はできないが、J 1 1 区内から始まり、西へ弧状に湾曲しながら南北溝として調査区外の北へ流れていたと推定される。S D 0 7 との間隔は、西側柱列と約 120 cm、南側柱列と約 150 cm 平均の距離である。

S D 03-2 は南端で湾曲する溝で、S D 03-1 に合流する形をとる。S D 03-3・4 は東西溝であり、S D 03-3 は建物の南側柱列よりさらに約 80 cm 南に、S D 03-4 は南側柱列上に位置している。また、柱穴ハ 1 は S D 03-4 を切って掘られている。

S D 03-5・6 は J 1 1 区内の S D 03-1 から分岐する南北溝で、S D 03-5 は S D 13-1 と合流し、S D 03-6 はさらに調査区外へと流れている。S D 03-7 最も東側を流れる南北溝で、建物の東側柱列とは東へ 50~80 cm、S D 04-1 とは西へ約 110 cm 離れた位置にある。

なお、S D 03-1 は前述した S D 0 4 と同様に、植物化石の検出と同定を目的とした土壤のサンプリングを実施した地点である。（第 7 章参照）

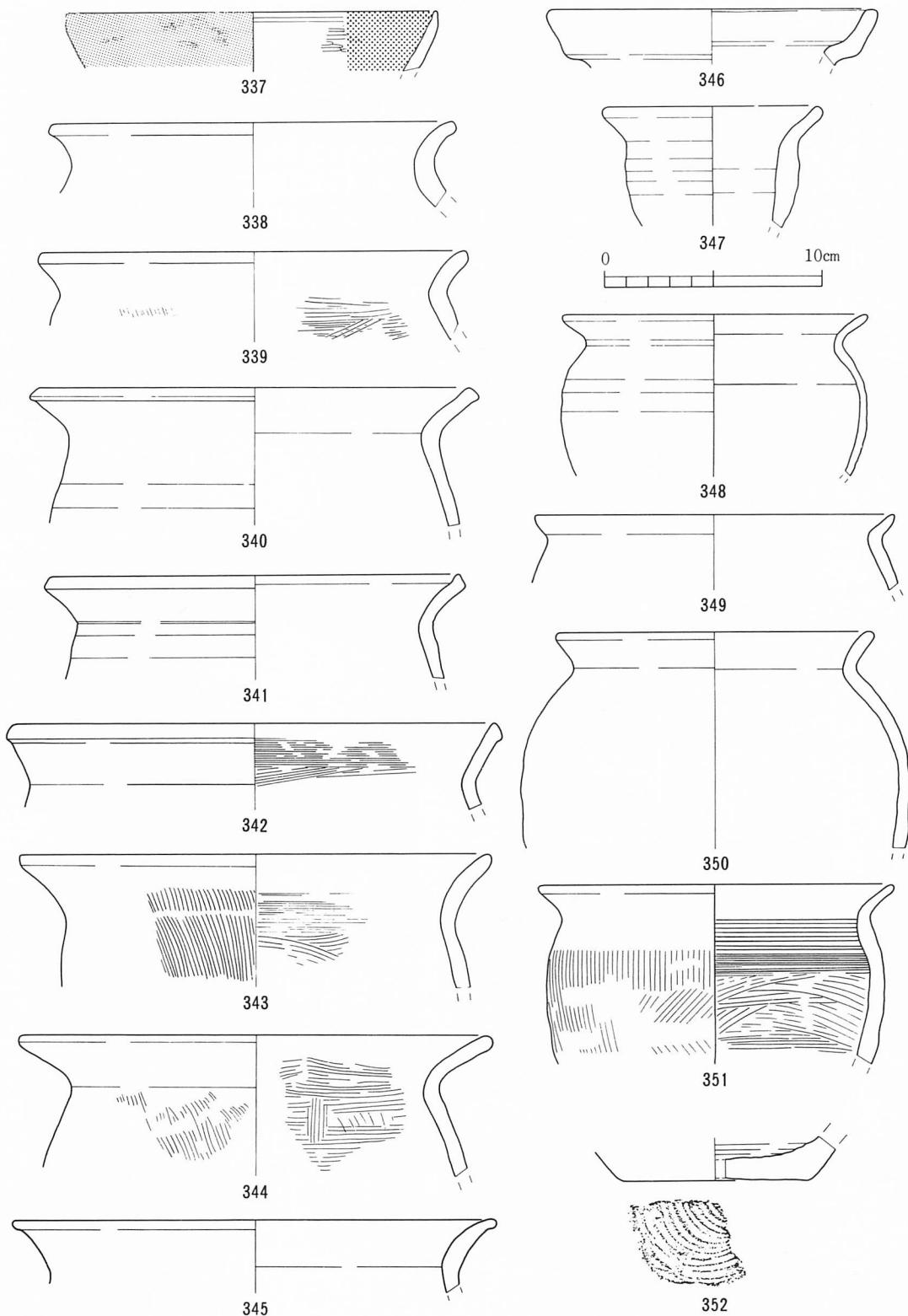
（3）柱 列

S A 0 3

調査区西側で配石 S X 0 2 と S B 0 7 及び S D 0 3 との間に位置する南北 3 間の柱列である。柱間の寸法は北より 125 cm、120 cm、176 cm を測る。

柱掘形は一辺 25~35 cm の隅丸方形ないし不整形なものであるが、S D 0 2 を切って掘り込まれている柱穴イ 4 は掘形を確認できず、柱根のみの検出であった。このほか柱穴イ 1・イ 3 にも柱根が残っており、柱直径はそれぞれ 11 cm、13.5 cm、14 cm を測り、調査区で検出した建物の柱よりもひとまわり太いものとなっている。

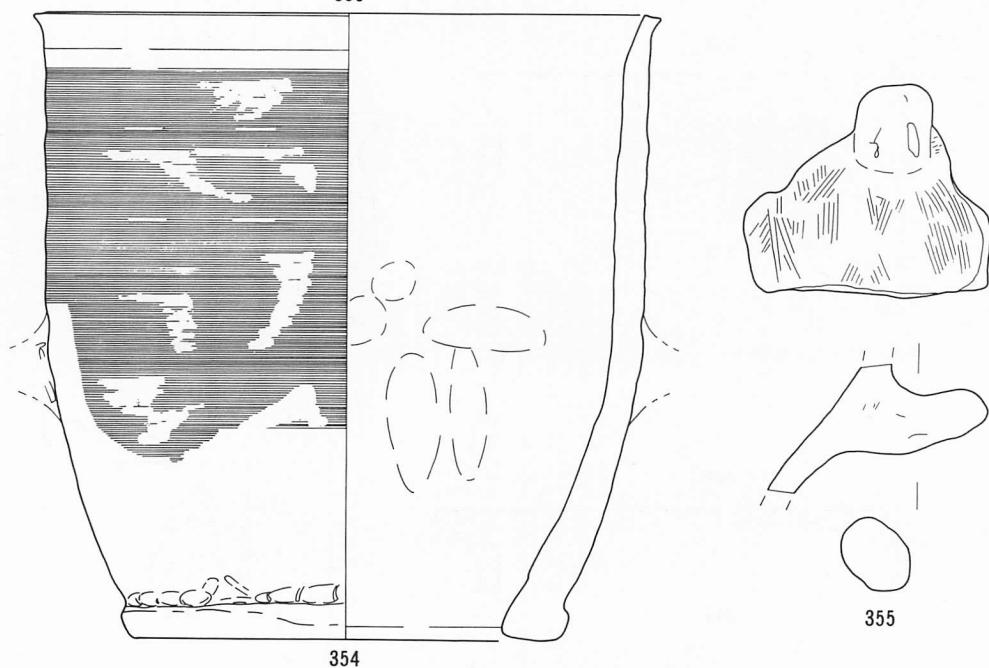
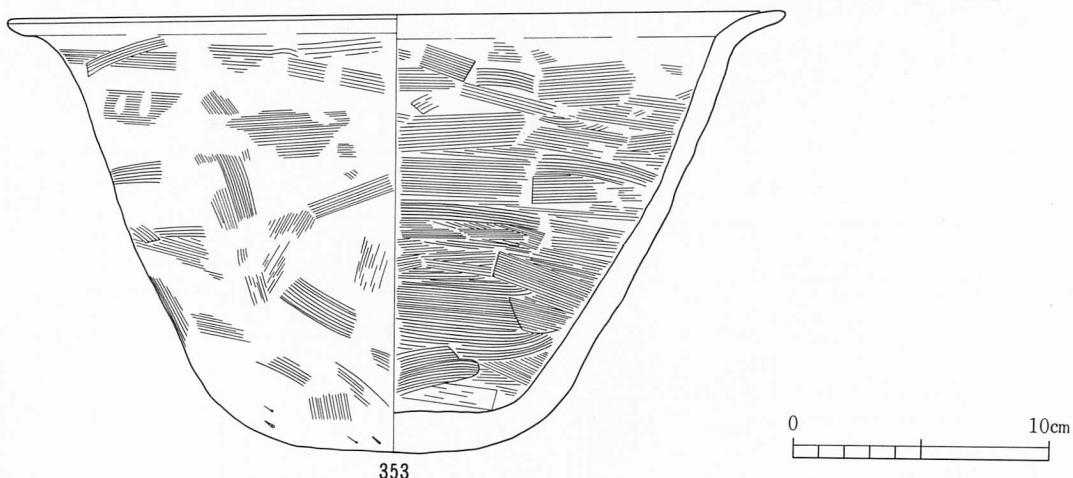
方位は N-13°-W で、近接する S B 0 7 ではなく、S B 0 4・0 5 と同じである。S D 0 3 で囲まれた区画内には S B 0 7 と重なる形で別棟の建物の存在が想定できることから、同方位で配置された未検出の建物の西を画する塀の可能性も考えられる。



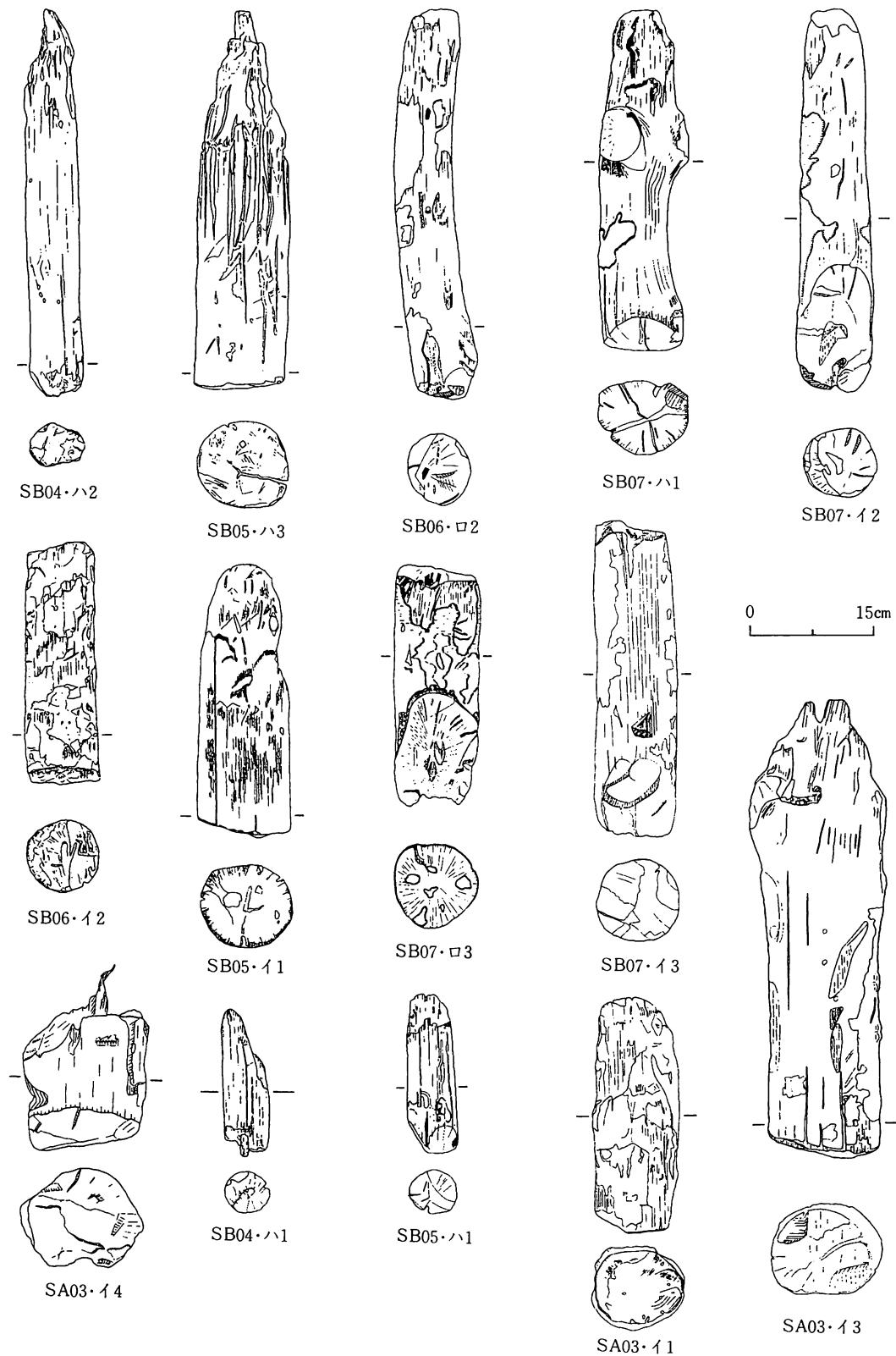
第10図 SD出土土師器実測図1 (1/3)

第2表 建物計測表

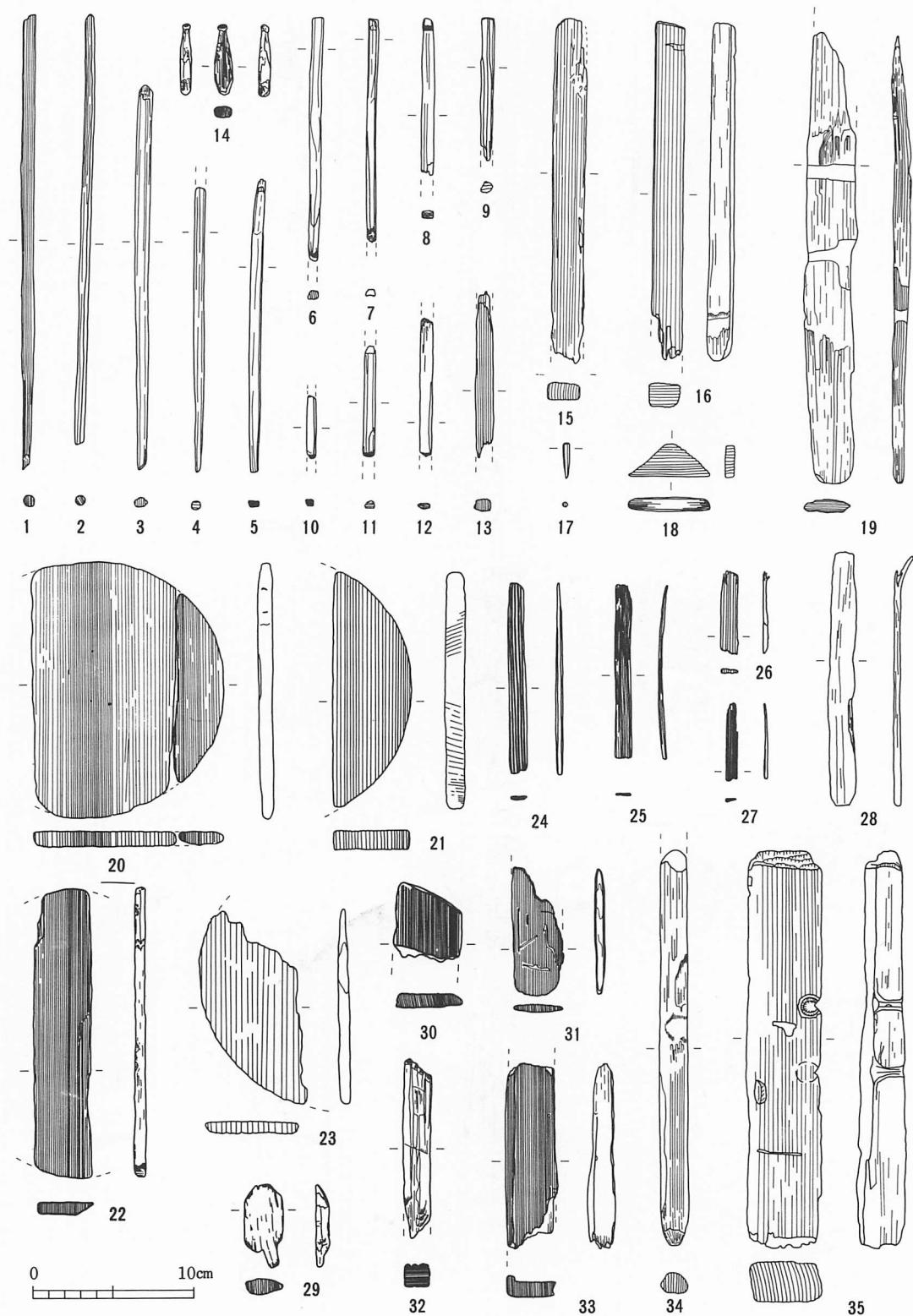
建物番号	柱間 (梁×桁)	柱間寸法		桁長	渠長	床面積	方 位	掘 形 規 模
		桁行	梁行					
0 4	2 × 2	2.8	1.78	4.16	3.56	14.8	N-10°-W	隅丸方形ないし不整形 (0.3)
0 5	2 × 2	2.7	1.75	4.14	3.50	14.49	N-10°-W	隅丸方形ないし不整形 (0.3)
0 6	1 × 2	2.72	-	2.72	3.57	9.71	N-13°-W	隅丸方形ないし不整形 (0.3)
0 7	2 × 2	-	1.56	3.50	3.12	10.92	N-13°-W	隅丸方形ないし不整形 (0.3)



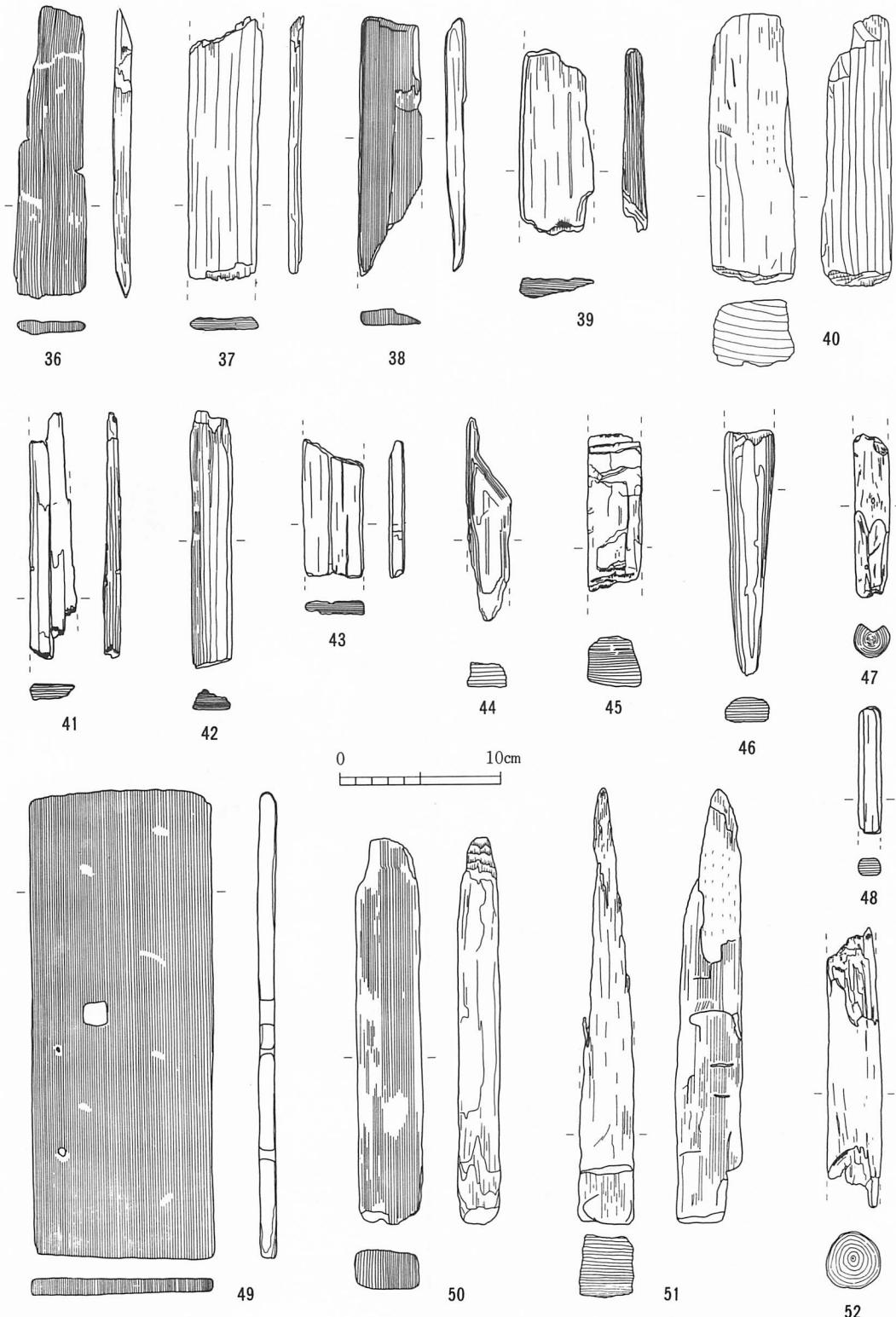
第11図 S D出土土師器実測図2(1/3)



第12図 柱根実測図(1/8)



第13図 SD 出土木製品実測図1 (1/4)



第14図 SD出土木製品実測図2(1/4)

(4) 配石遺構

SX 02

調査区の西端で検出した南北方位の配石遺構である。全体の形状は I 9・10区内を南端として、幅 2 m 前後で帯状に北へ続いている。検出総延長は 10 m であるが、G 11 区壁面の土層観察によりさらに調査区外の北にのびていくことが確認できる。検出面での標高は北と南で、南の方が約 25 m くなっている。

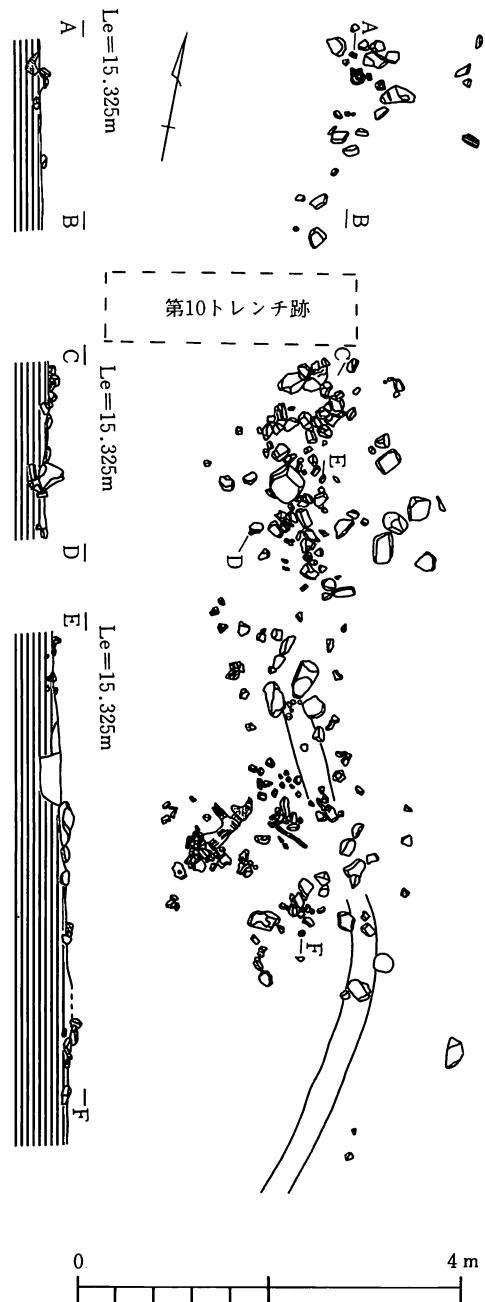
また、SD 01 をはさんで東側の建物や溝が集中する遺構検出面とは約 40 cm 前後、SX 02 の方が高くなっている。

配石内は最大径 30 cm 程度の様々な形態の礫や比較的小振りの礫で構成されている。H 10 区北側を分布調査時の試掘孔（第 10 トレンチ）が、加えて南側を近代の暗渠排水が横断しているために、遺存状態は必ずしも良いとはいえないが、ほぼ完全に復元できる須恵器の長頸壺（第 19 図 429・431）をそれぞれ出土した I 9・10 区内及び G 11 区内はさらに小さな構成単位として、それぞれ一辺 150 cm、100 cm 前後で内部に空間をおく方形プランになる可能性がある。

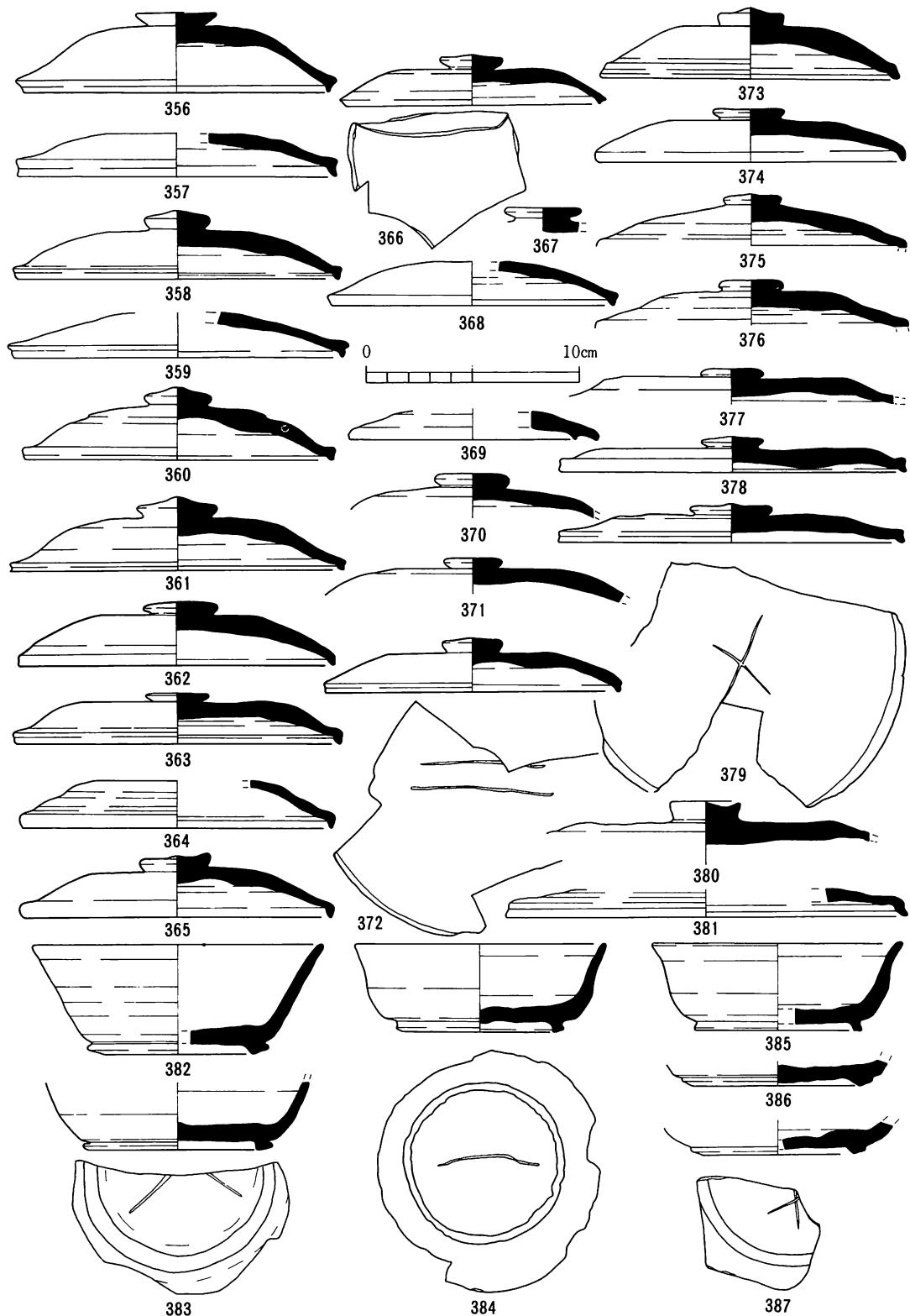
同様に H 10 区内でも北から一辺 70 cm、50 cm、100 cm 前後の方形プランが重なりあっているような検出状況であるが、プランとしては全体にくずれていの点や、前述した搅乱箇所もあって断定はできない。

配石の南北の両端にあたる I 9 区内から G 11 区内までの全体を通した主軸は N-10°-W で建物及び南北溝の方位と近似あるいは同一のものとなっている。

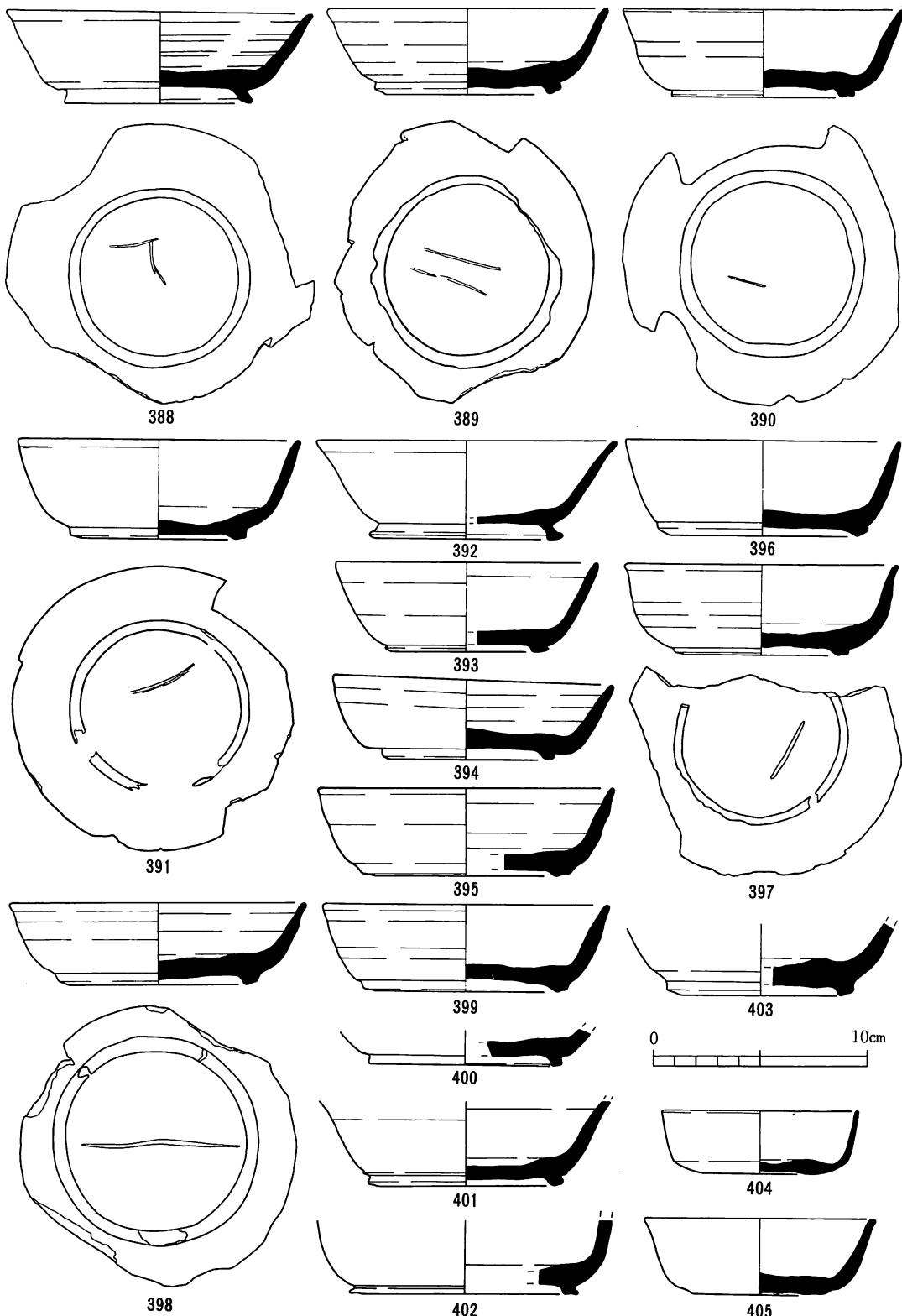
配石内部及びその周辺からは多量の須恵器・土師器片・「忍人」と書かれたものやそのほか判読不能の墨書き器 6 点・焼土塊 2 片・木片などが出土している。



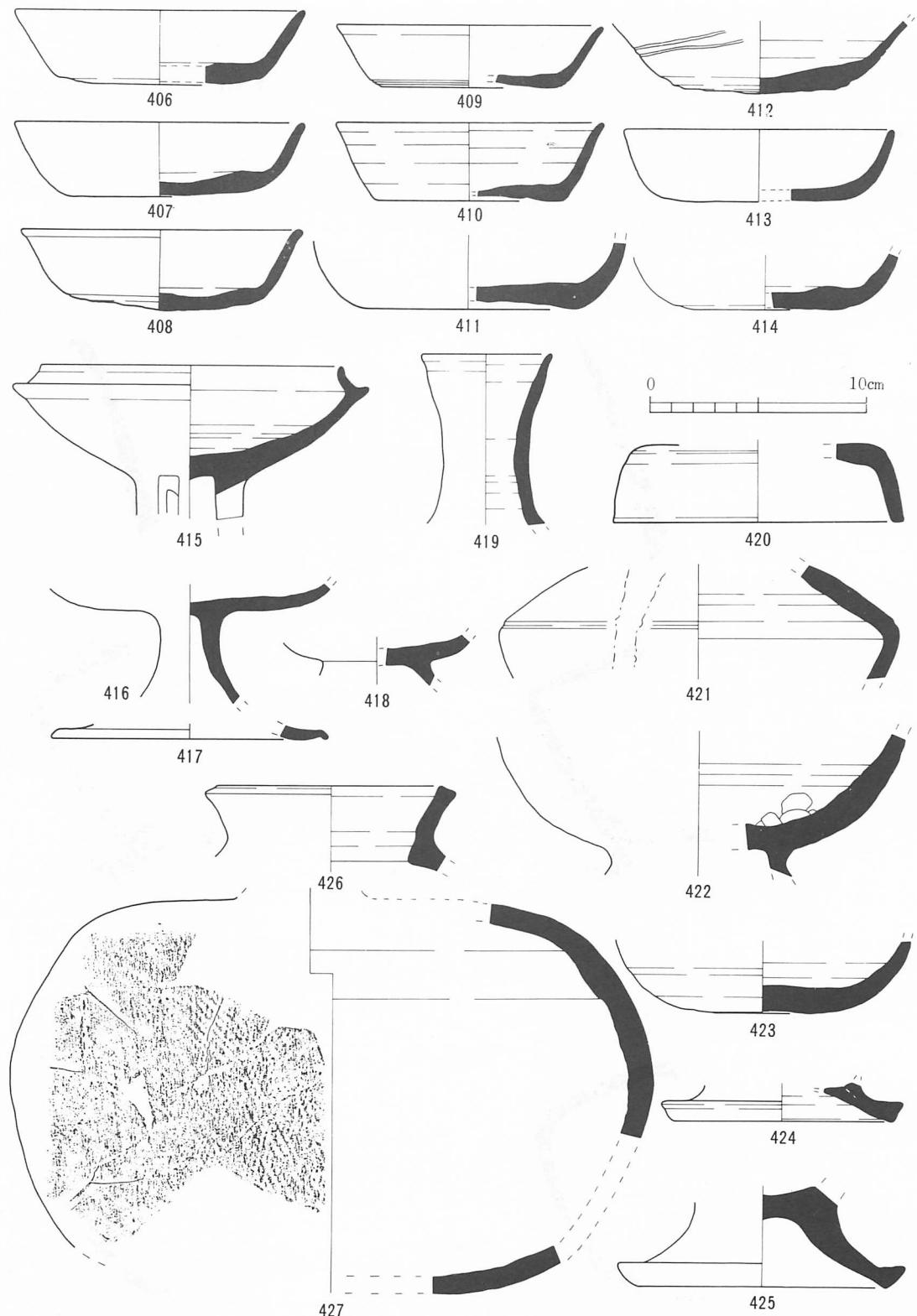
第 15 図 SX 02 実測図 (1/120)



第16図 S X 02出土須恵器実測図 1 (1/3)



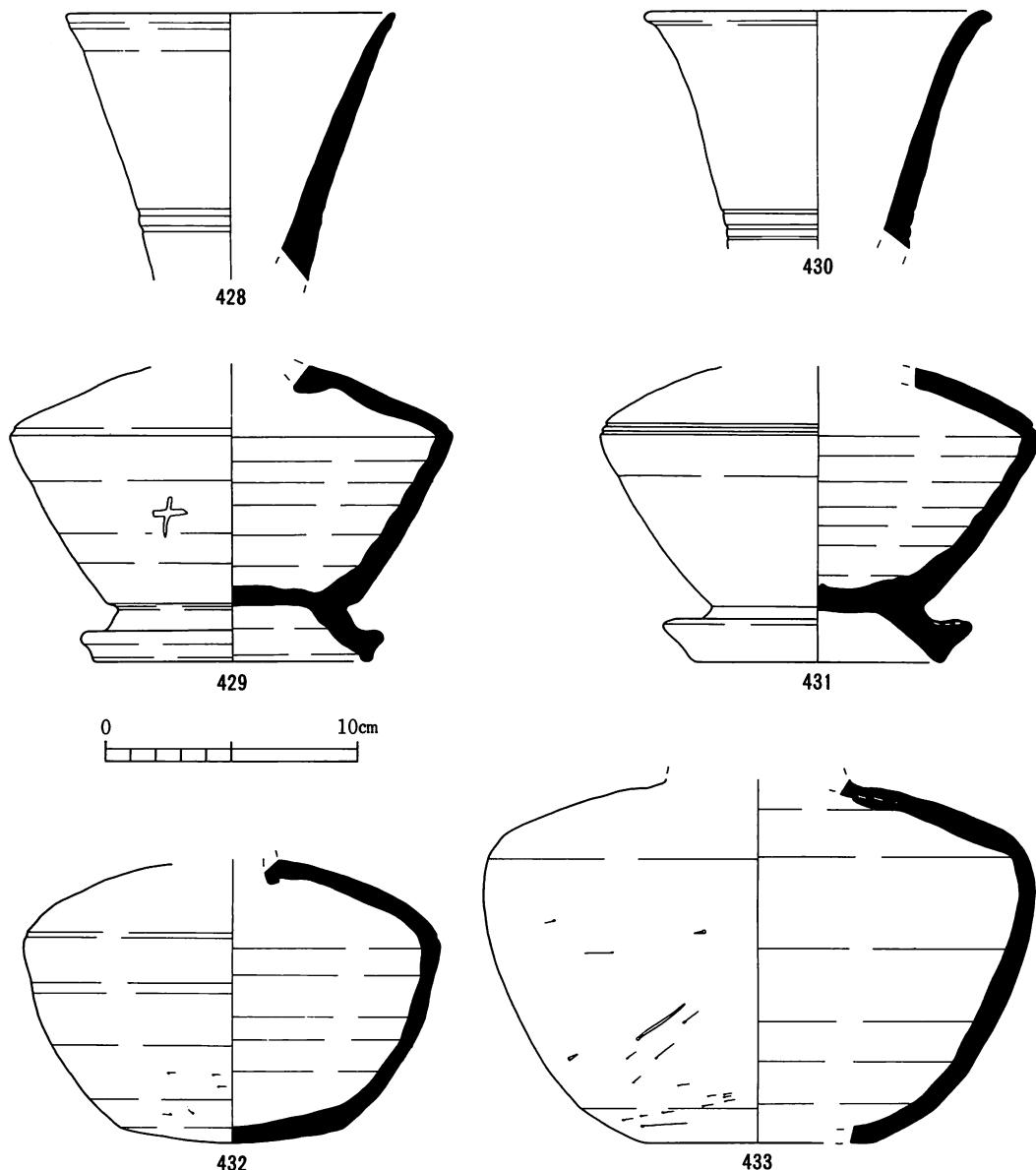
第17図 S X 02出土須恵器実測図2(1/3)



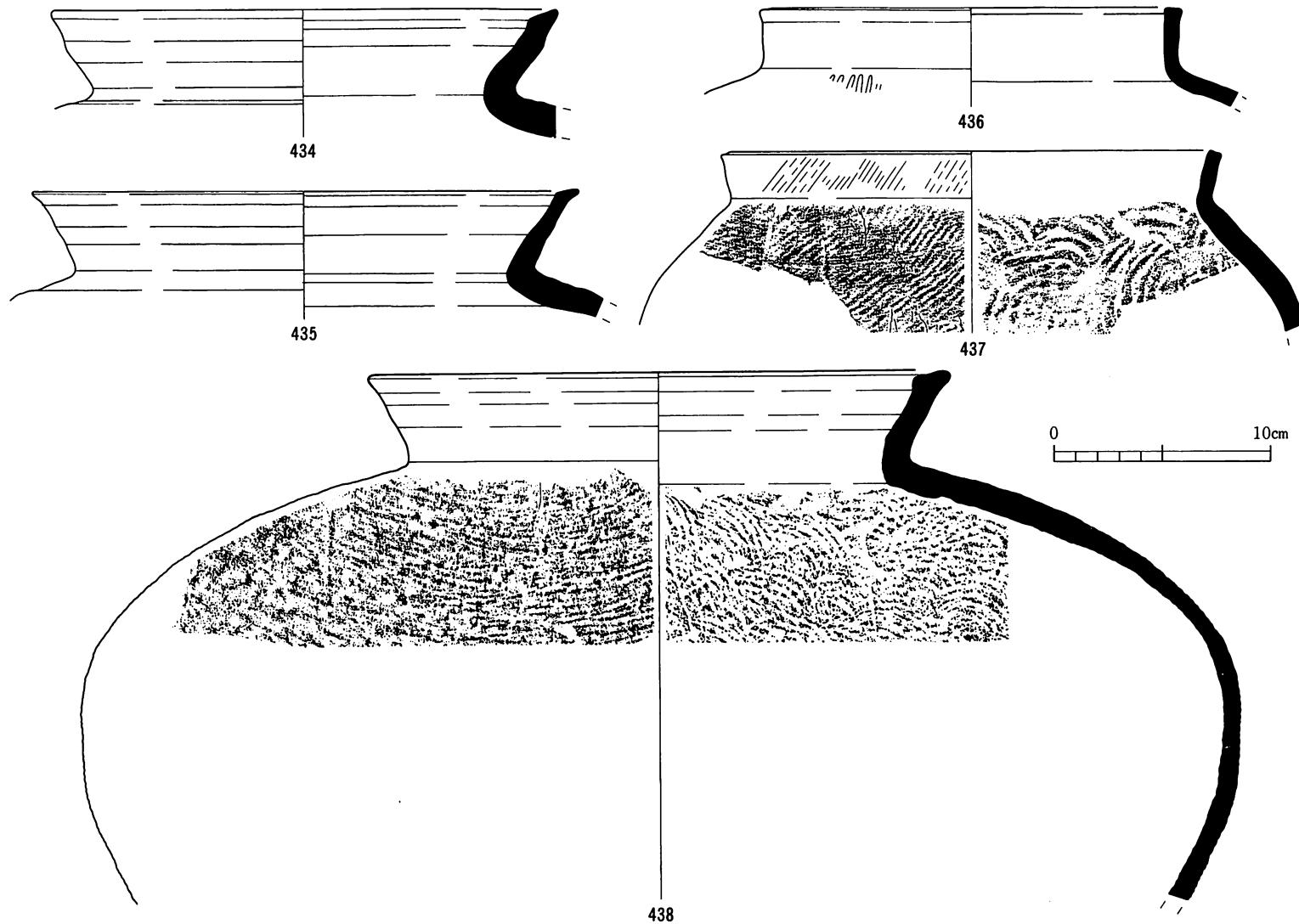
第18図 SXO2出土須恵器実測図3(1/3)

配石内土層断面の観察では、規則的に積まれていたり、礫の上端部が水平位に置かれたような状況は認められず、二次的火熱を受けた礫もI 9区内で数個が確認できた程度であった。

以上、S X 0 2 の概要を記したが、その正確については決定的な判断資料は得られていない。第1次調査で検出したS X 0 1 と合わせていくつかの特徴を記してみると、走行の方位の違いはあるが、幅1.5'～2 mの列石が連続的に、方向を決めて直線的にのびている点、加えてS X 0 1 からは円面鏡・フィゴの羽口が、S X 0 2 からは墨書き器など遺跡の性格の一端をうかが



第19図 S X 0 2出土須恵器実測図4(1/3)



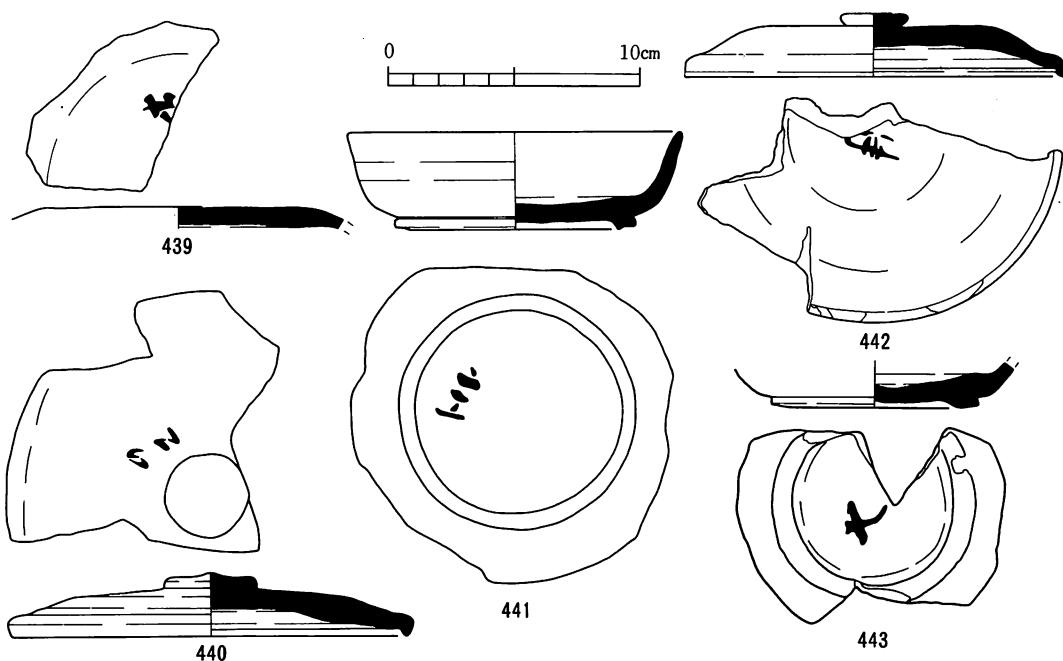
第20図 SXO2出土須恵器実測図5(1/3)

わせるような遺物をはじめ、8世紀第2四半期を中心として第1四半期から第3四半期に比定される須恵器・土師器などの遺物が相当量含まれている点などがあげられる。

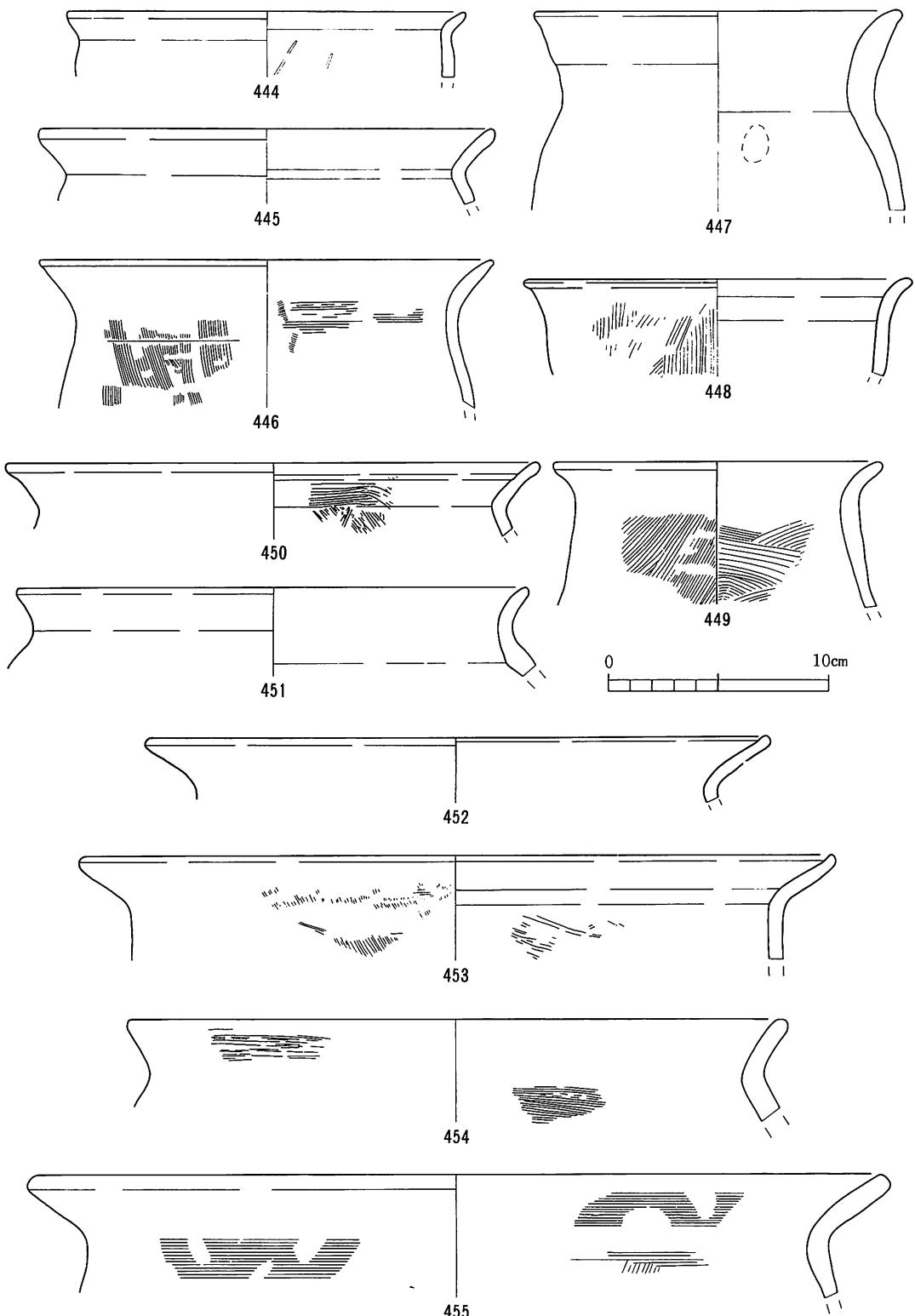
これは遺跡内で現在までに判明している奈良時代に営まれた集落存続の時期全般にわたるものである。

次に建物との配置関係で見てみると、東西方位のSX01の南側とSB02の北側柱列とは、並行して約5m離れた位置関係にある。続いてSX02の東側とSB07の西側柱列の距離は並行して約4.5m離れている。さらにSB04を囲む溝SD04-1とSX02の南端がほぼ東西方位の線上にのっている。

これらの点から、SX01・02を計画的に配置された集落内の施設としてとらえ、その性格のひとつとして建物を中心とする空間を区画する機能を想定しておき、今後の類例の増加をまってさらに検討を加えていきたい。



第21図 SX02出土墨書土器実測図(1/3)



第22図 S X 02出土土師器実測図1 (1/3)

(5) 敵状溝

S U 1 4 ~ 1 9

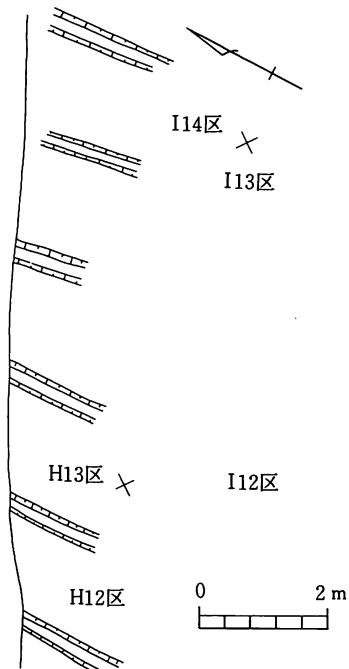
調査区北端にあたるH 1 2 ~ I 1 4 区内で検出した南北方向に走る敵状の溝を、その性格の上から一括して報告しておきたい。

これらはいずれも奈良時代の包含層（第6層）の上面に掘り込まれており、今回の調査で確認できた古代の最も新しい遺構といえる。

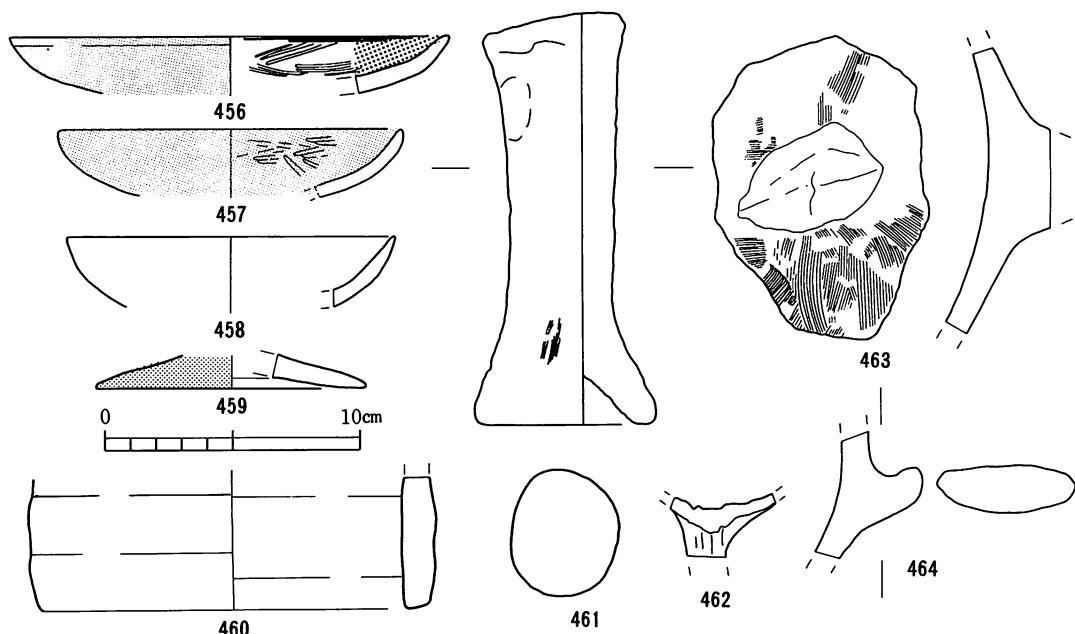
溝幅は20~30cm、深さは5~15cm前後が平均的で、並行している溝間の距離（敵幅）はそれぞれ1.6~1.9m前後の範囲にまとまっている。

また、各溝の長さは北側が調査区外のために未検出であり、加えて南側は後世の削平によって一様に途切れている状態のため、調査区北側から1.5mから2m前後を計る短いものであった。

出土遺物は須恵器・土師器の細片が少量で時期を特定できるものはないが、S U 1 4 ~ 1 9 の方位が第1次調査で検出したS U 0 1 ~ 1 3 の方位と同じく、N-5°~10°-Eの間にまとまっているほか、前述した立地条件・溝の形状・規模・溝間距離に類似性が見いだせることから、生活面としての建物などが廃絶した奈良時代中葉以降につくられた畠の敵にともなう遺構と推定している。



第23図 S U 1 4 ~ 1 9 実測図(1/120)



第24図 S X 0 2 出出土師器実測図(1/3)

第5章 出土遺物

今回の調査で検出した遺物には、須恵器・土師器・墨書き土器・木製品・石製品・製塩・鍛冶関係の遺物などがある。これらの大半が奈良時代のものであるため、ここでは浅い素掘りの溝(S D)・配石遺構(S X 0 2)及び包含層出土遺物の説明を中心に記述を進め、総括的な評価は第8章のまとめで行うことにしておきたい。また、説明の都合上、同じ器種での分類は『四柳白山下遺跡I』で抽出した分類に準じている。

(1) 須恵器

壺蓋(第5・7・9・10・16・21・25図)

総点数で24点以上が出土しており、次に述べる有台壺と1器種としての点数が揃っている。

第3表に示したように、口径14cm代と15cm代のものが主体となっている。このなかでは、偏平なボタン形のつまみ径3cm、器高3cm前後、天井部が平坦面をもつ平笠形と天井部からなだらかに口縁端部へ移行する笠形の器形に分化する壺蓋B2類の出土量が多く、その先行的形態と思われるB1類、つまみも体部も偏平なC類も一定量認められる。

また、天井部はすべて回転ヘラ削りが施されており、口縁端部の形態には断面が三角形を呈するタイプ、端部を外方につまみ出すタイプ、端部を折り曲げるタイプなどがあるが、断面三角形のものが圧倒的に多い。

このほかに、口径18cm代で宝珠形に近いが上面が平坦なボタン形のつまみをもち、口縁端部を短く外屈させるD類(380・381)、口径13cm以下で内面返りをもつA類や端部を折り曲げたり、内屈させるE類が少量認められる。

有台壺(第7・9・16・17・21・26・27・30図)

総点数で24点以上が出土しており、須恵器のなかに占める比率は34%と食膳具のなかでは最も量が多い。第4表に示したように、口径12~15cmの間に量的なピークがある。形態的な特徴

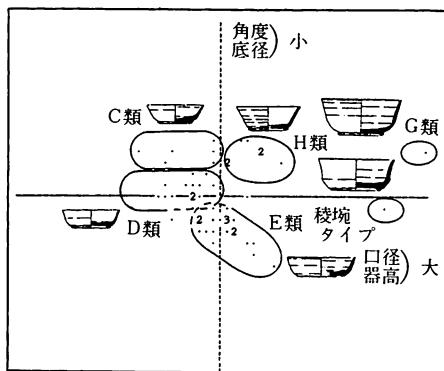
第3表 須恵器壺蓋・口径分布

上 / 未 溝	(SS) 0	10	20	30 度数
11. 126600	11. 491700	-3.00:	.	0
11. 491700	11. 856800	-2.70:*	.	0
11. 856800	12. 111900	-2.40:*	.	2
12. 111900	12. 586900	-2.10:*	.	0
12. 586900	12. 951900	-1.80:*	.	0
12. 951900	13. 317000	-1.50:*	.	1
13. 317000	13. 682000	-1.20:*	.	1
13. 682000	14. 047100	-0.90:*****	.	5
14. 047100	14. 112100	-0.60:*****	.	11
14. 112100	14. 777200	-0.30:****	.	4
14. 777200	15. 142200	0.00:*****	.	10
15. 142200	15. 507300	0.30:*****	.	10
15. 507300	15. 872400	0.60:*****	.	6
15. 872400	16. 042500	0.90:***	.	3
16. 042500	16. 602500	1.20:*	.	0
16. 602500	16. 967500	1.50:*	.	0
16. 967500	17. 332600	1.80:*	.	0
17. 332600	17. 697600	2.10:*	.	0
17. 697600	18. 062700	2.40:*	.	0
18. 062700	18. 427700	2.70:*	.	1
18. 427700	3. 00:*	.	.	1

第4表 須恵器有台壺・口径分布

上 / 未 溝	(SS) 0	10	20	30 度数
10. 179200	10. 480900	-3.00:	.	0
10. 480900	10. 840900	-2.70:	.	0
10. 840900	11. 171600	-2.40:*	.	1
11. 171600	11. 502400	-2.10:*	.	2
11. 502400	11. 833200	-1.80:*	.	0
11. 833200	12. 164000	-1.50:*	.	0
12. 164000	12. 494800	-1.20:***	.	3
12. 494800	12. 825700	-0.90:***	.	4
12. 825700	13. 156500	-0.60:*****	.	9
13. 156500	13. 487300	-0.30:*****	.	8
13. 487300	13. 818100	0.00:*****	.	4
13. 818100	14. 148900	0.30:*****	.	12
14. 148900	14. 479700	0.60:***	.	4
14. 479700	14. 810500	0.90:*	.	2
14. 810500	15. 141300	1.20:*	.	1
15. 141300	15. 472100	1.50:*	.	0
15. 472100	15. 802900	1.80:*	.	1
15. 802900	16. 133800	2.10:*	.	0
16. 133800	16. 464600	2.40:*	.	1
16. 464600	16. 795400	2.70:*	.	0
16. 795400	3. 00:*	.	.	1

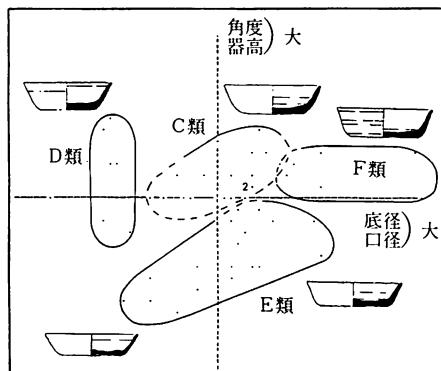
第5表 須恵器有台壺・主成分分析による2次元散布



第6表 須恵器無台坏・口径分布

変更の番号 = 2		データの数 = 53		
変更の名前 = 口径		10	20	30 底 底
は 上 /	未 番	(SS) 0
9. 520060/	9. 828810/	-3. 00: *	..	1 0
9. 828810/	10. 137600/	-2. 70: *	..	0 0
10. 137600/	10. 755100/	-2. 10: *	..	0 0
10. 755100/	11. 063800/	-1. 80: *	..	1 1
11. 063800/	11. 372600/	-1. 50: *	..	1 1
11. 372600/	11. 681300/	-1. 20: ***	..	4 4
11. 681300/	11. 990100/	-0. 60: ***	..	1 1
11. 990100/	12. 298800/	-0. 30: ***	..	3 3
12. 298800/	12. 607500/	0. 00: ***	..	12 12
12. 607500/	12. 916300/	0. 30: ***	..	4 4
12. 916300/	13. 225000/	0. 60: ***	..	8 8
13. 225000/	13. 533800/	0. 60: ***	..	1 1
13. 533800/	14. 042500/	1. 20: *	..	1 1
14. 042500/	14. 151300/	1. 20: *	..	1 1
14. 151300/	14. 460000/	1. 50: *	..	0 0
14. 460000/	14. 768800/	1. 80: *	..	0 0
14. 768800/	15. 077500/	2. 10: **	..	0 0
15. 077500/	15. 386500/	2. 10: **	..	0 0
15. 386500/	15. 695000/	2. 70: *	..	0 0
15. 695000/		3. 00: *	..	0 0

第7表 須恵器無台坏・主成分分析による2次元散布



でF類の一部、口径12cm以下でD類などが分布している。また、S X 0 2 から出土した 404 は口径 9.1cm と小型で、精選された胎土に海綿骨片を比較的多く含む点が他の製品とは異なっている。図化はできなかったが同地点からの 2 個体分を含め、いずれも古相を示している。

高坏（第18図415～418・第29図567）

坏部から脚部までを復元できるものは出土していない。415は脚基部から坏部にかけて遺存する有蓋高坏。端部にはたちあがりを伴い、脚部には透かし窓が認められるもので、今回確認できた土器のなかでは最も古い形態をとる。416・417 は同一個体と思われる無蓋高坏。脚基部から反りながら水平方向に開いた脚端部に、やや下方につまみ出した端面をつくる。

壺（第18図419～425・第19図428～433・第29図568～575）

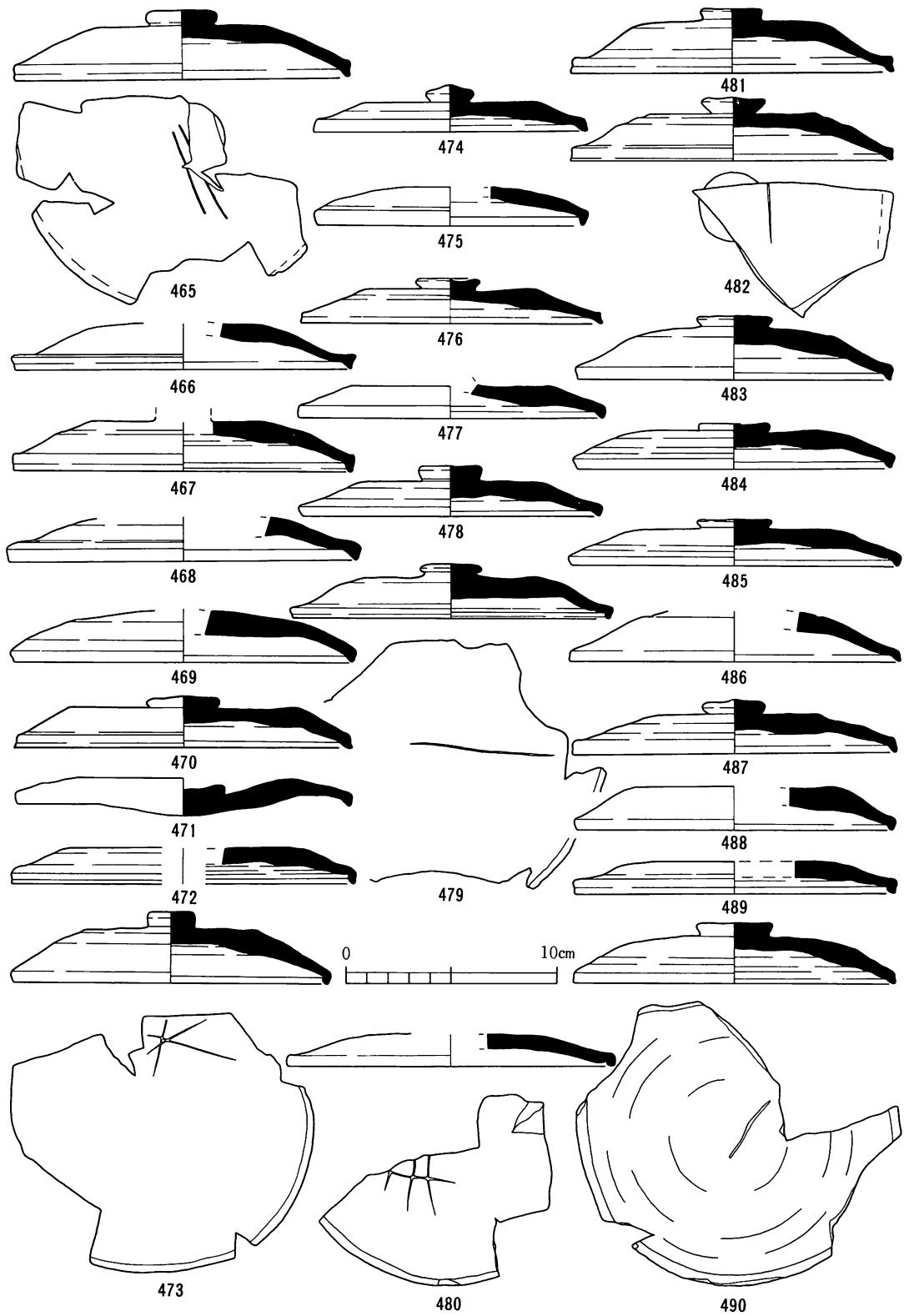
419・428～433・571～573 はいわゆる長頸壺。いずれも体部外面下半にヘラ削りが施され、他の部位はヨコナデで仕上げるが、底部に高台を付するもの（428～431）とそうでないもの（432・433・571～573）がある。なかでも428～431は2個体分がS X 0 2 内の別々の地点から出土したもので、おおよその器形を知ることができる。428と429、430と431が同一個体で、それぞれ口径13cm、13.7cm、体部最大径17.6cm、17.4cm、高台径11cm、10cmを測り、肩部及び口頸部に数条の沈線をめぐらす点や胎土・焼成具合も似通っているが、口縁部が基部付近からそのまま

をみると、口径13cm前後では高径指数30、底径55前後と底径縮小気味の有台坏C類と器形的にはC類に対して底径が大きく、器高が低いD類が主体となっている。また、口径14cmでは高径指数25、底径指数75前後と偏平な器形のE類の出土が多く、器高が4.5～5cmと高く第1次調査では抽出できなかったH類も一定量存在する。

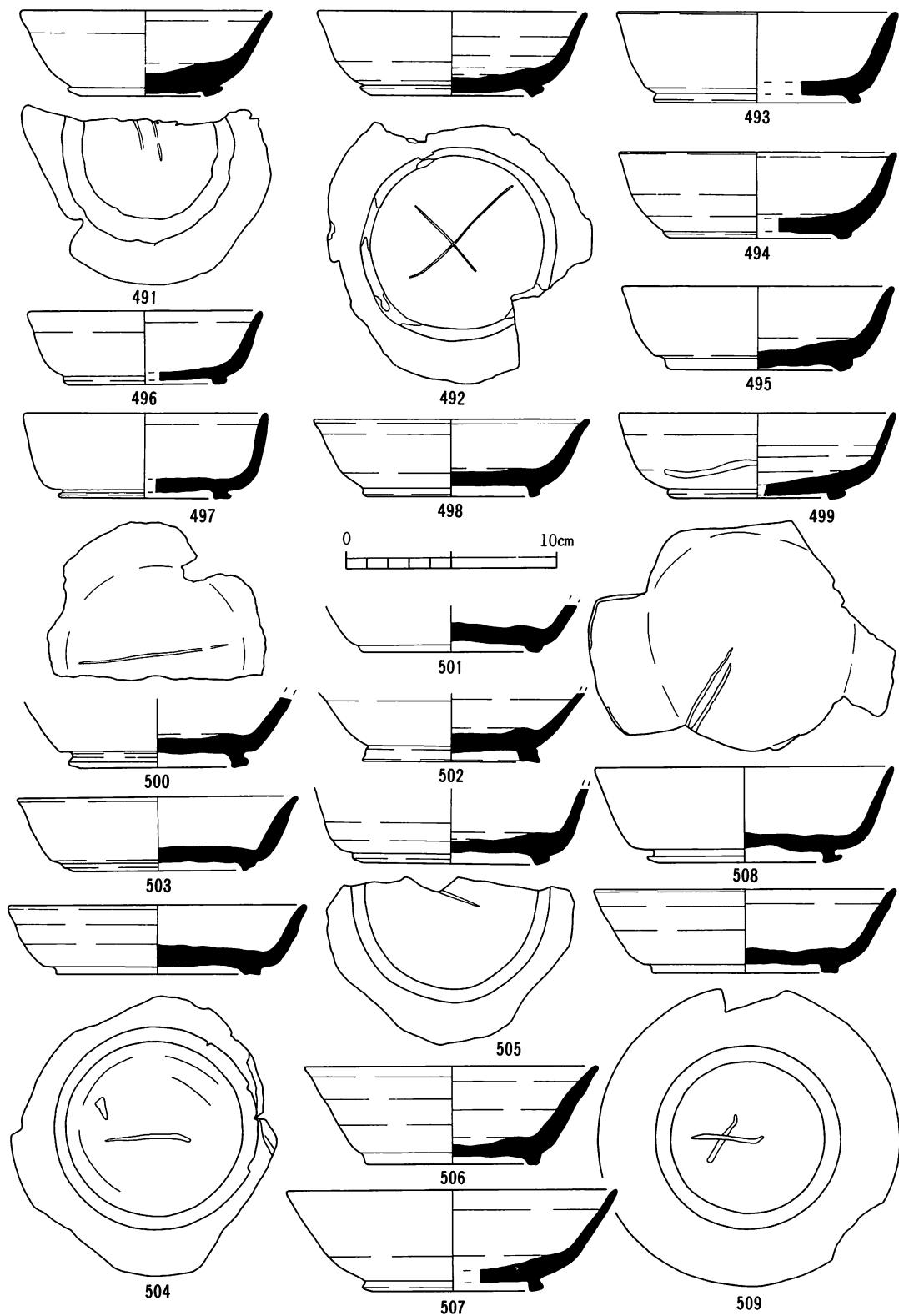
この他、高径16.2cmで体部下半あたりが屈曲して稜をなす 307 や口径17cmを測る深身のG類（522）などが少量認められる。

無台坏（第7・9・17・18・27・28・30図）

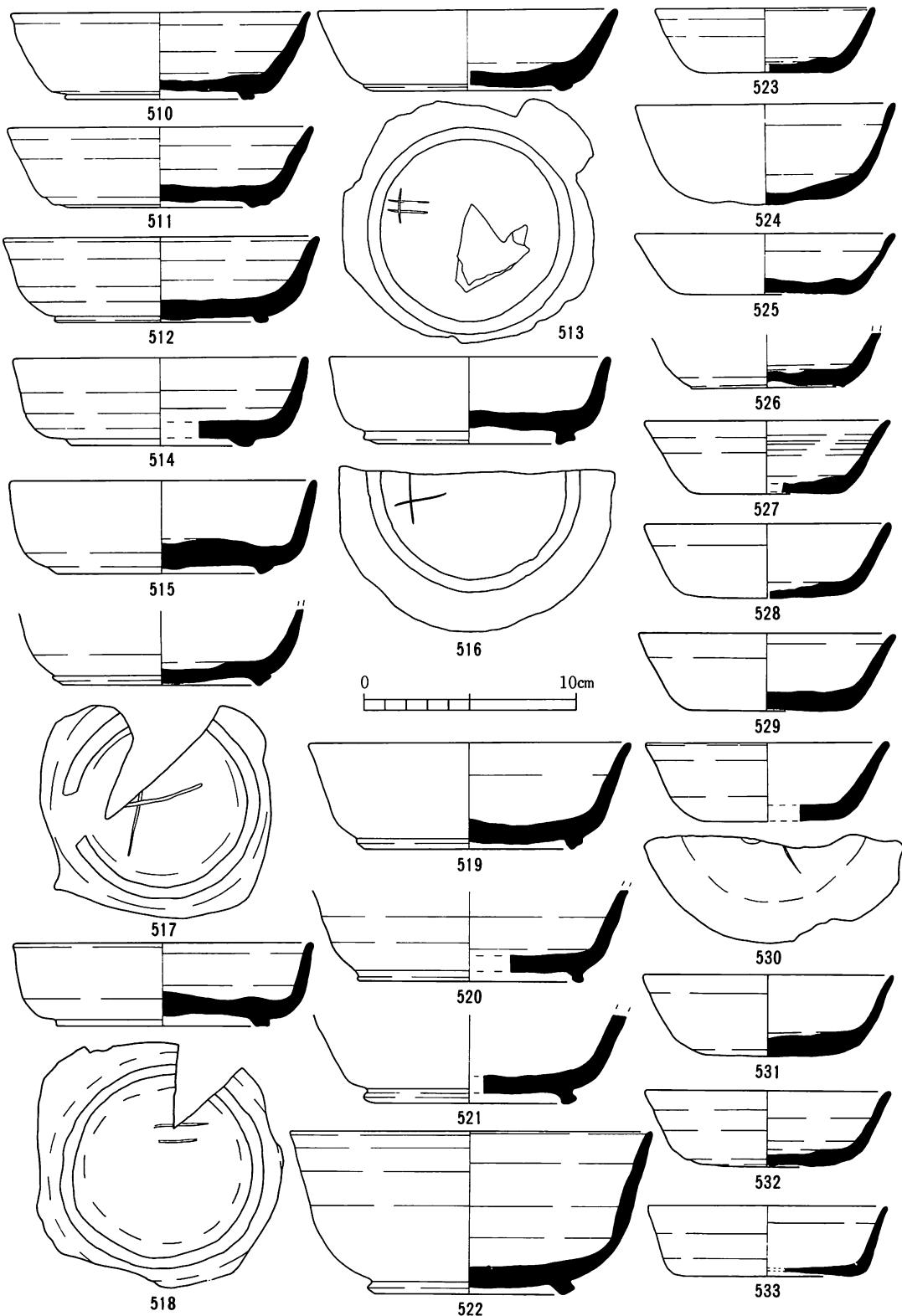
個体数19点以上と食膳具では有台坏に次ぐ量を占めている。そのなかでも口径12～13cm代にピークがあり、12cm代では高径指数30前後で底部から体部が丸みをもって立ち上がる無台坏C類とE類の一部が主体となっている。続く口径13cm代では高径指数25と口径と底径との差が他の器形と比較して小さく、偏平なE類とそれよりも器高が高くなるF類が認められる。このほか出土量は少ないが抽出できたものに、口径15cm



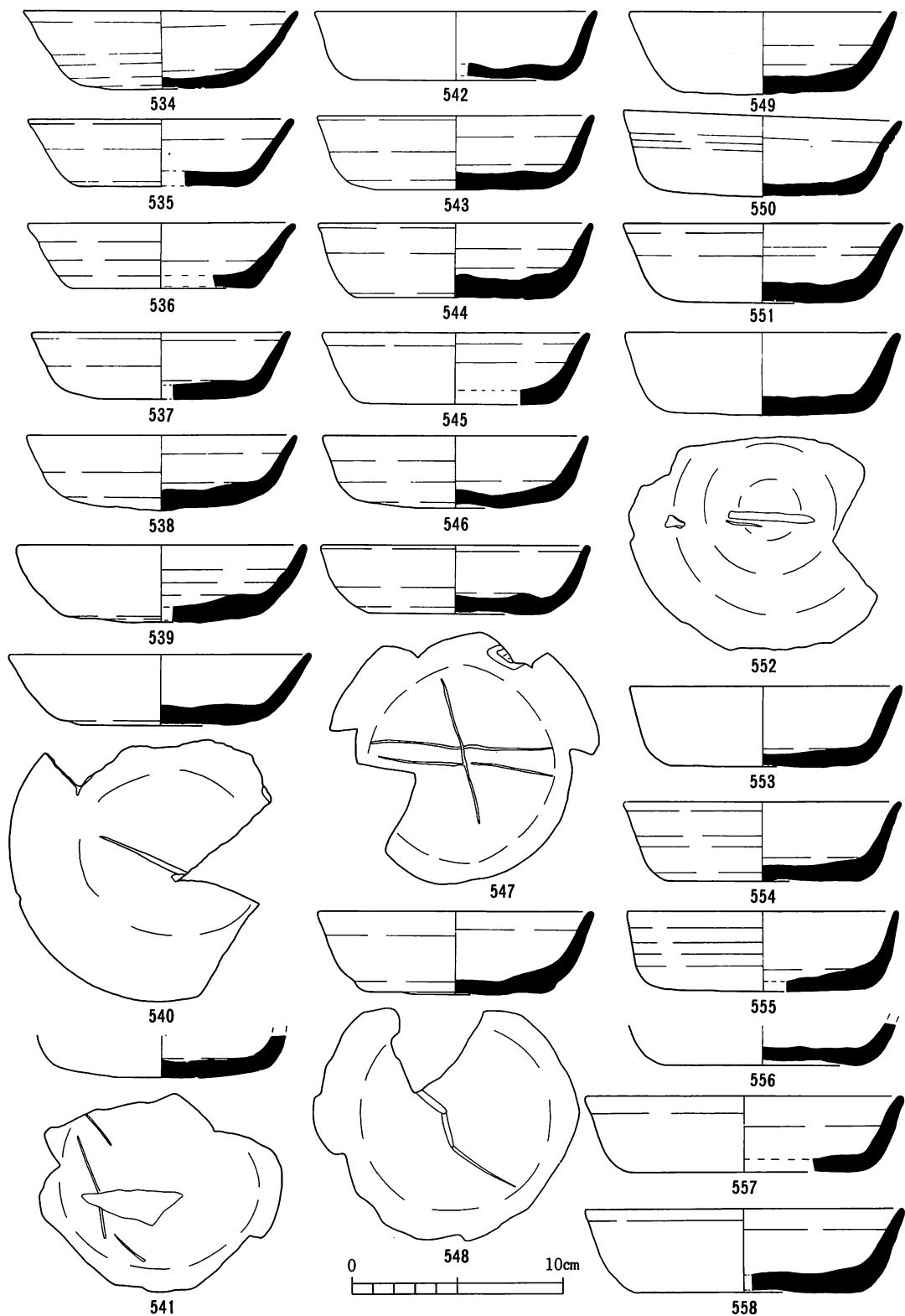
第25図 包含層出土須恵器実測図1 (1/3)



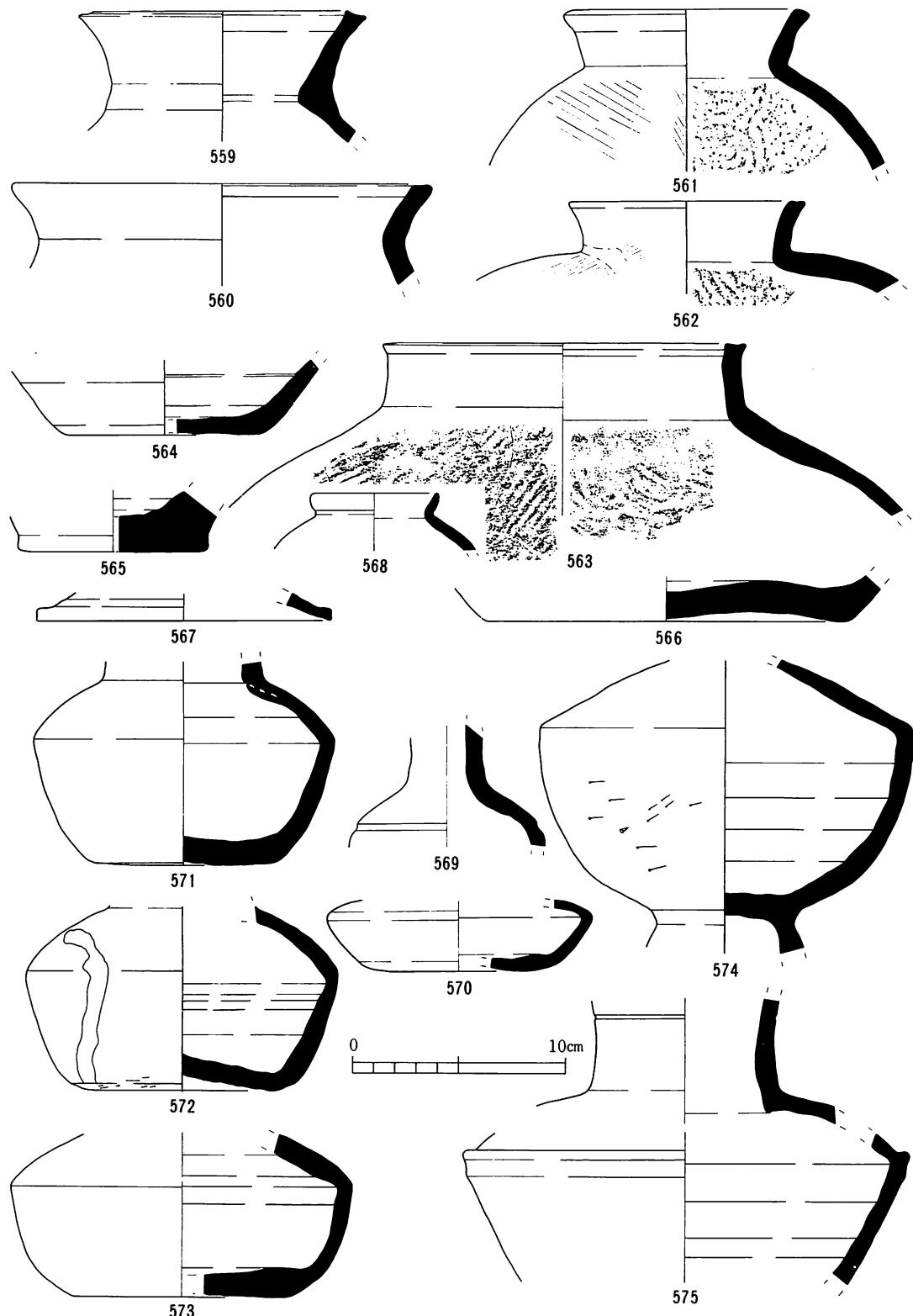
第26図 包含層出土須恵器実測図2(1/3)



第27図 包含層出土須恵器実測図3(1/3)



第28図 包含層出土須恵器実測図4(1/3)



第29図 包含層出土須恵器実測図5(1/3)

緩やかに収まる428と端部で外屈して丸く収まる430との違いがある。429の体部外面には「+」のヘラ書きが刻まれている。432・433・571～573は体部径によって、14cm代の571・572、16cm代の432・573、22cmの433に分けられる。また、同一個体と思われる421と422及び574は体部形態から脚付きの長頸壺として扱った。それぞれ体部最大径18.4cm、17cmを測る。

568は口径5.8cmを測る小型の短頸壺。420は短頸壺の蓋になると考えられる。口径13.4cmで、調整は頂部外面にヘラ削り、口縁部にヨコナデ調整を施す。570は底径7.4cm、体部最大径12.4cmを測る平瓶の体部片で、全体に偏平な器形である。

横瓶（第18図426・427・第29図561・562）

全体の器形を知ることができるのは、口縁部片の426と体部片の427で、S X 0 2 内での出土状況及び胎土などにより、同一個体の可能性が高い。口縁端部に外傾する面をとり、口縁部内外面にナデ調整が施される。口径11.8cm。体部外面は平行叩きの後にカキ目調整、内面は叩き調整（同心円文）の後で入念なナデ調整により、叩き目を消去している。体部側端に粘土板の接合痕を残す。

壺（第20図434～438・第29図559・560・563）

調査区出土の壺は口縁部片がほとんどで、口径25cm前後、口縁部が外傾しながら面をとるもの（434・435・438）と口径20cm前後で口縁部が直立気味に立ち上がるもの（436・437・563）に区分される。調整はすべて口縁部内外面にナデ、体部外面に平行叩き、内面にも叩き調整による同心円文を施す。また、酸化硬質焼成によって暗赤褐色を呈し、叩き目が口縁部外面にまで及んでいる437と酸化軟質焼成によって淡灰褐色の563はカキ目で叩き目を消去している。

体部の器形が確認できるのはS X 0 2 出土の438で、体部中位が最大径53.2cmを測り、球形を呈する。

（2）墨書土器（第9・21・30図）

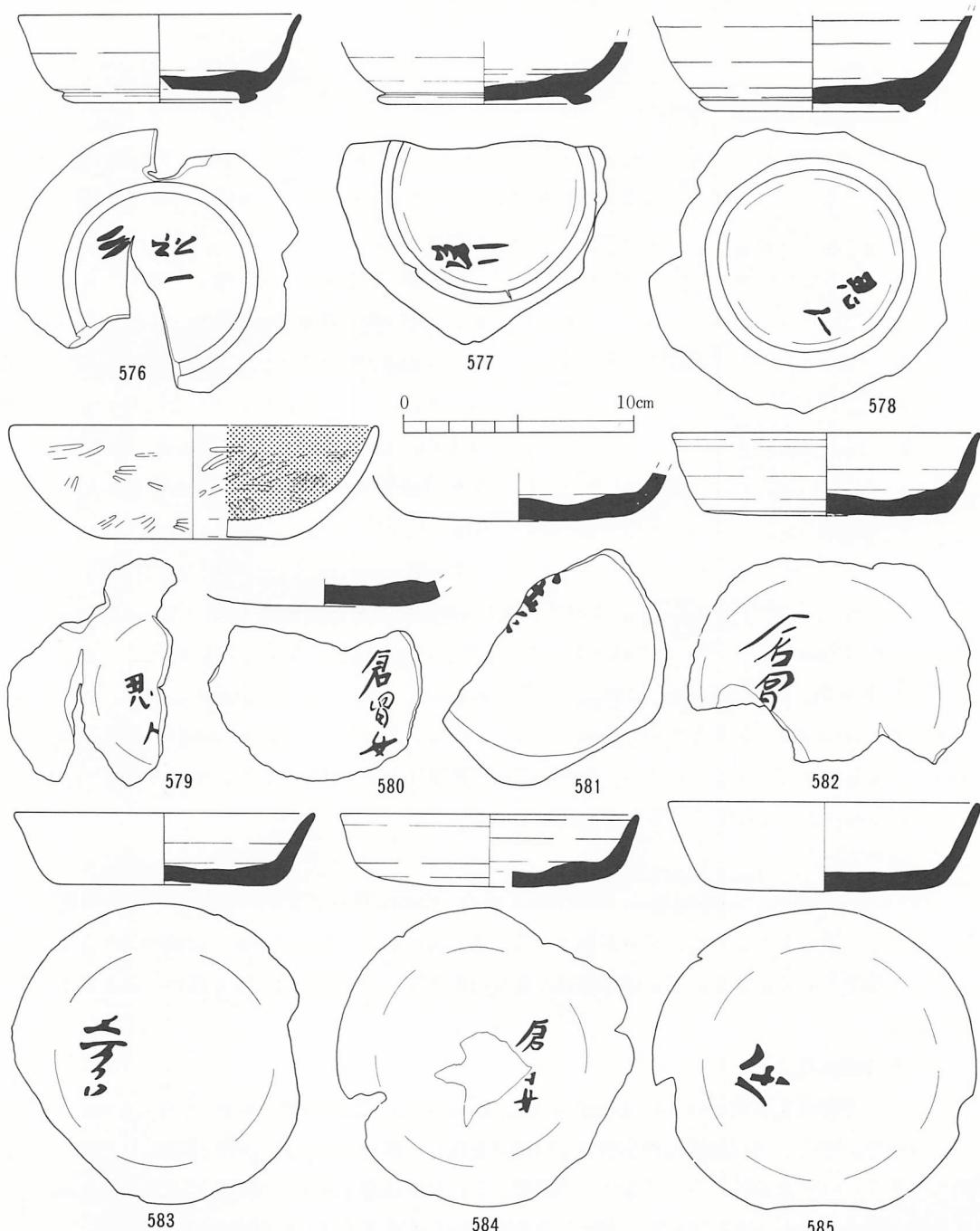
墨書土器は浅い素掘りの溝S D04-1から3点、同じくS D14から2点、S D08から1点、配石S X 0 2から5点、奈良時代の包含層から10点が出土した。総点数は21点で、そのうち須恵器は20点、土師器は1点である。以下、判読できた墨書土器について若干の説明を加えておきたい。^④

東家（332・333）332は建物の周りをめぐるS D04-1、333はS D14のそれぞれ遺物溜まりから出土している。吉岡康暢氏が既に指摘されているように、^④ なんらかの公的施設の一区画内で、家屋の方位による位置関係から生じた名称のように思われる。

土万呂（334・583）第1次調査時のものも含めれば7点となり、全調査区域を通して最も出土頻度の高い個人名の墨書文字となる。

倉富女（580・582・584）女性の個人名と解したが、3点いずれも倉庫ふうの建物（S B 0 4・0 5）周辺の遺物包含層からの出土であり、「倉富」を吉祥句とすれば「嘉字+女」となり実名ではない可能性も考えられる。

忍人 (335・578・579) 男性の個人名で、「忍人」の史料としては『正倉院文書』に天平十五年 (743) から天平宝字八年 (764) ごろにかけて東大寺写経所に勤務した能登臣忍人が見いだせる。墨書き土器の忍人が能登臣忍人であると断定はできないが、土器そのものが8世紀中葉を示す型式であり、能登出身の官人と同一人物である可能性も考えられる。



第30図 包含層出土墨書き土器実測図(1/3)

Ⅲ(576) 底部に記されている2箇所の墨書のうち、左側の「Ⅲ」を記号墨書と解した。同様の墨書が本遺跡と邑知潟をはさんで西岸に位置する寺家遺跡から大量に出土しており、遺跡固有の標識墨書として祭祀での使用が示唆されている点が注目される。^⑨

八十(585) 数字を表す墨書。本遺跡周辺で採集された墨書土器に「田地八十」があり、^⑩この場合は単独ではあるが吉祥句的な意味をもつ嘉字と解した。

(3) 土師器

甕(第10・22・31・32図)

第8表に示すように、口径10~20cmの間で15cmをピークとする一群と口径20~25cmの一群、ばらつきはあるが30cm以上のものという分布状況からそれぞれを便宜上、小形・中形・大形と

第8表 土師器甕・口径分布

式数の番号 = 1		データの数 = 55		
式数の名前 = ... 口径				
以 上 /	未 指	(GS) 0	10	20
				30 底数
2. 663210		0		0
4. 323980	-3.00:	0		0
4. 323980	-2.70:	0		0
5. 984750	-2.40:	0		0
7. 425200	-2.40:	0		0
9. 306290	10. 967100	-1.80:**	0	2
10. 967100	12. 627800	-1.50:**	0	1
12. 627800	14. 288600	-1.20:*****	0	5
14. 288600	15. 243400	-0.90:*****	0	9
15. 243400	17. 209000	-0.60:*****	0	8
17. 610100	19. 270900	-0.30:***	0	4
19. 270900	20. 931700	0.00:*****	0	6
20. 931700	22. 592500	0.30:*****	0	8
22. 592500	24. 253200	0.60:*****	0	6
24. 253200	25. 217800	0.90:*	0	1
25. 217800	27. 574800	1.20:*	0	1
27. 574800	29. 235500	1.50:**	0	1
29. 235500	30. 896300	1.80:**	0	1
30. 896300	32. 557100	2.10:	0	0
32. 557100	34. 217800	2.40:	0	0
34. 217800	35. 878600	2.70:	0	0
35. 878600	39. 00:**	3.00:**	0	1

して扱った。

小形甕 口縁部がくの字状に外反し、そのまま端部が丸く収まるものがほとんどであるが、体部最大径が上半にあり、外面を縦位のハケ目、内面を横位のハケ目で調整するもの(596・598・602等)、口縁部が短く外反し、カキ目調整された偏球形の体部をもつもの(607~609等)が認められる。

中形甕 小形甕同様くの字口縁で端部に面をもたないもの(446・450・587等)、くの字口縁から端部が面をもつか、さらに上方につまみ出されるもの(586・594・604等)が主体となっているが、有段口縁状に端部を内傾させてつまみ上げたもの(605)や口縁部直下が幅広の隆帯状のもの(603)なども少数認められる。

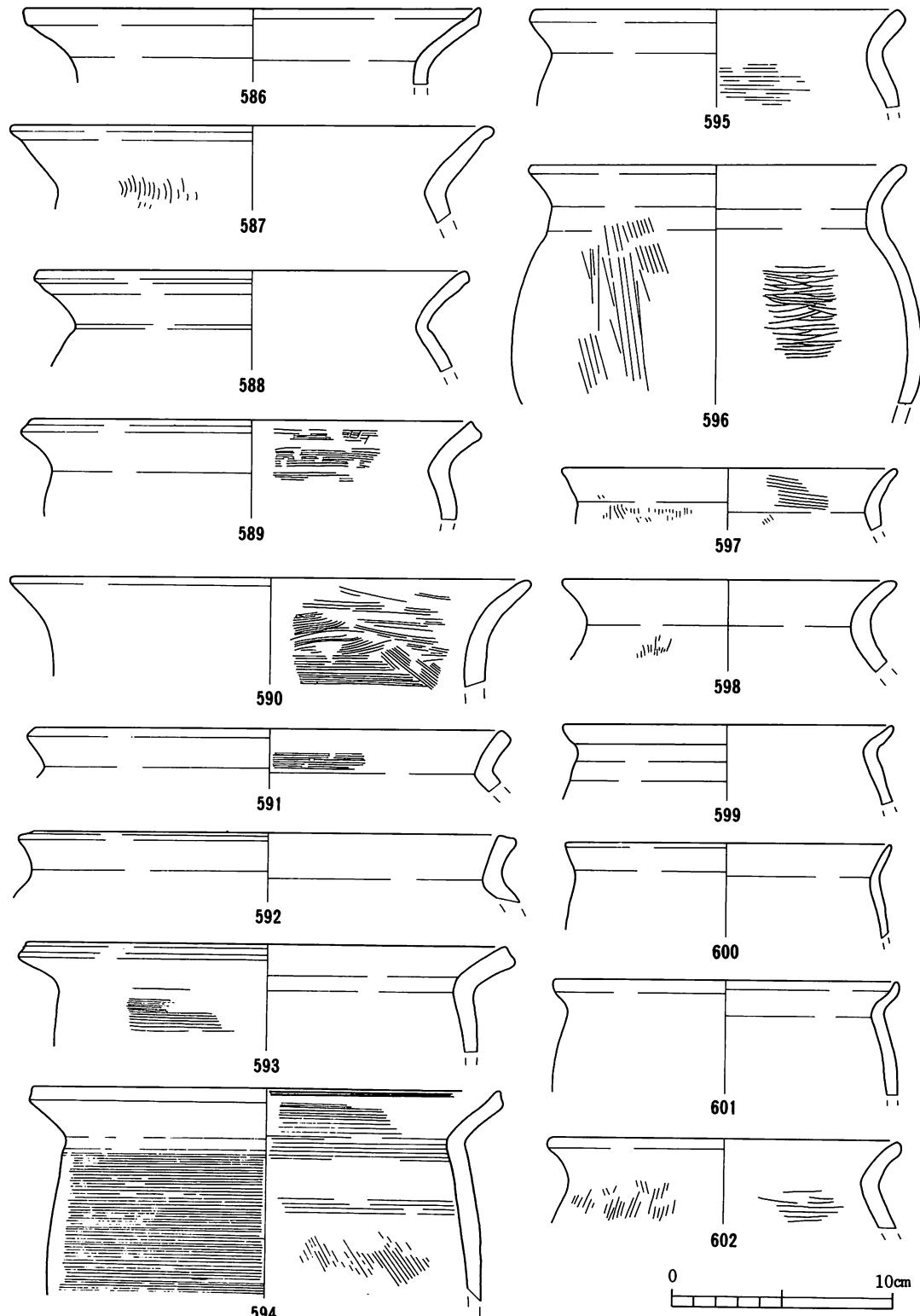
大形甕 口縁端部に面をもたないもの(454)、面取りするもの(455)、面取り部分をつまみ上げるもの(452・453)がある。また、底部形態では丸底(614・616)、平底(623)、回転糸切りの平底(352・617・618)を確認している。

鍋(第11図353)

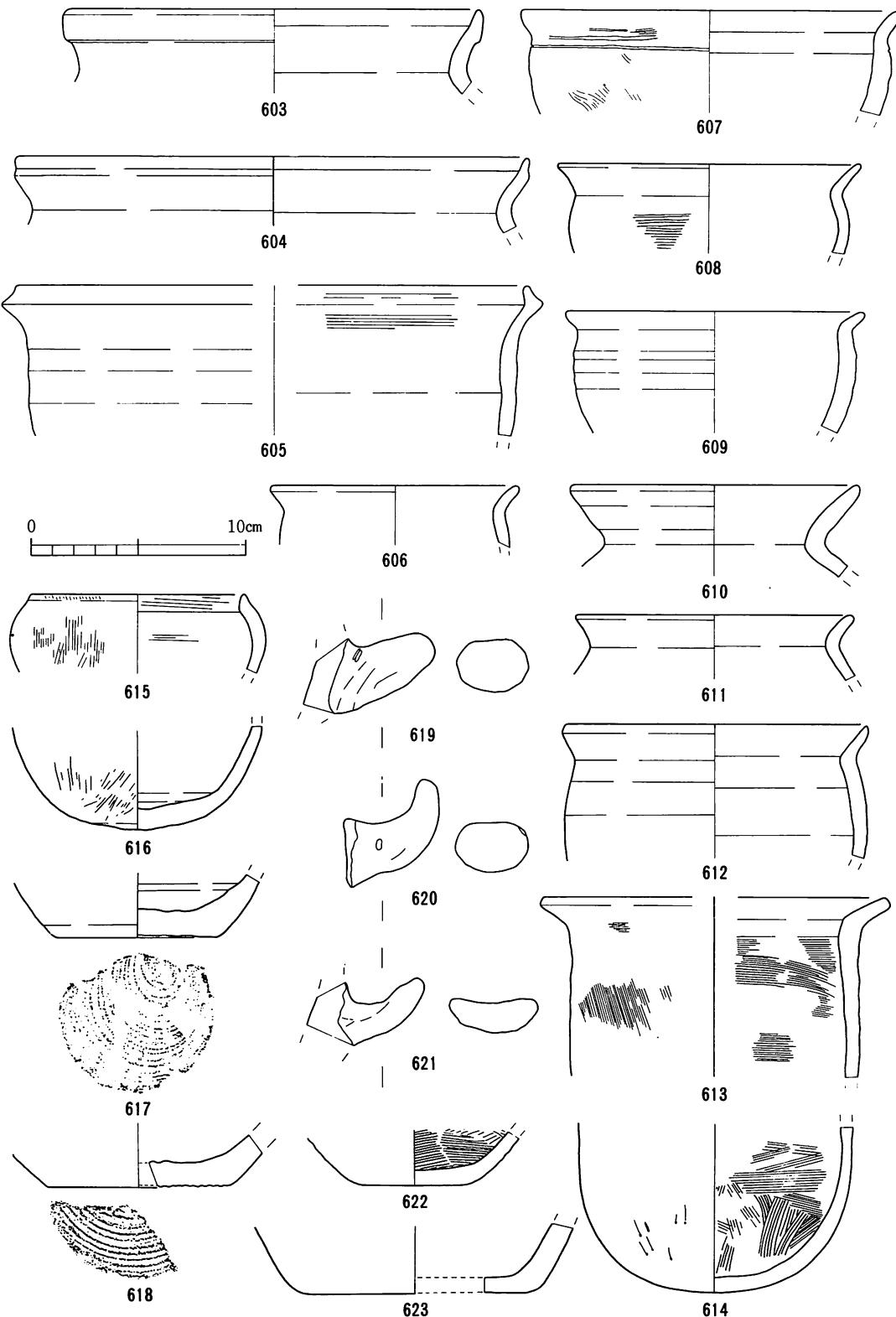
S D 出土の鍋で、口径30.6cm、器高17cmを測る。全体に器肉は厚く、底部周辺をヘラ削りするほか、器表全面にハケ目調整が施される。器形は体部から外方に開き、口縁部でさらに外反して端部が丸く収まる。胎土は海綿骨片を含むもので、土師器全般に多く認められるタイプである。

甌(第11図354)

S D04-1遺物溜まり出土の354は口径24.8cm、器高24.6cm、底部内径12.4cm(外径16.8cm)を測る甌で、体部下半が締まるが全体的には筒状を呈し、体部中位に把手が2個相対して付く器形である。内外面は細いカキ目とナデで調整し、口縁部は緩く外反しながら端部が面取りされ外縁が短くつまみ出されている。胎土には雲母・長石片を多く含むが焼成は良好である。

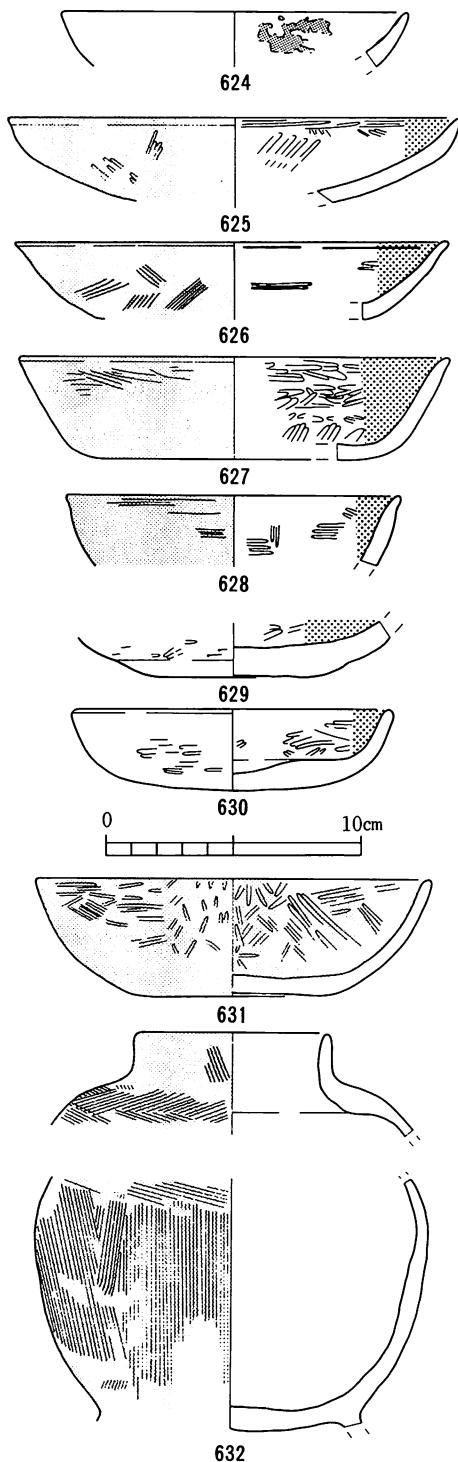


第31図 包含層出土土師器実測図1 (1/3)



第32図 包含層出土土器実測図2(1/3)

壺・椀 (第10・24・30・33図)



第33図 包含層出土土師器実測図3(1/3)

壺または椀には、外面赤彩内黒土師器・内黒土師器・両面赤彩土師器・土師器がある。資料が少ないので断定できないが、外面赤彩内黒の出土が多く、口径17cm前後で浅い皿状に近い形態を示すもの(456・625~627)と椀形器形(628)に分かれる。同じように内黒土師器には口径12.6cmで浅身で630と口径16cmで「忍人」と墨書きされた深身の579、両面赤彩には口径16cm前後(337・631)と13cm前後(457)というように法量分化が認められる。また、内面に漆の付着が見られる624はチヂミ現象も認められ漆器の代用器としての塗漆土師器の可能性が高い。

短頸壺(第33図632)

同形の須恵器を模倣した土師器の短頸壺で口径7.7cmを測る。口頸部周辺を斜位、体部にかけて縦位のハケ目調整、加えて外面全体が赤彩されている。

製塩関係の土器(第24図461・462)

461は完形に近い形で出土した支脚、円柱状の脚部から底部にかけて緩く広がり底部内面が凹んでいる。462は棒状脚であるが、脚部上位の形態は不明。いずれも指頭によるナデとオサエ調整痕が残る。

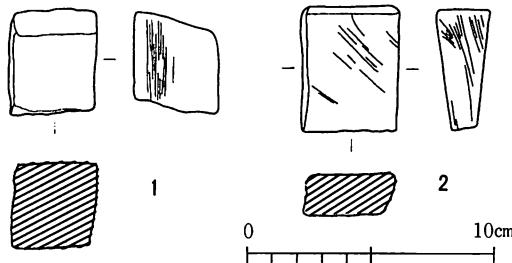
(4) 木製品(第13・14図)

何らかの加工木片と思われる製品は2点(包含層出土23・37)を除き、すべて浅い素掘りの溝からのものであり、60点以上を数える。これらの多くは欠損して原形を保つものは少ない。ここでは一定の目的で加工を施し、その種類が特定または推定できた木製品を選んで記述することにした。

1~12はSD04-1の遺物溜まりからまとめて出土した箸状木製品。完形の1~3はそれぞれ全長28.2cm、26.8cm、23.8cmを測る長いものである。面取りは4面または多面取りで、薄手のものも認められる。重量は含水状態(以下同じ)で6~8g。14は前述1~12と同じ遺物溜まりからの検出で、加工法も箸状木製品に近いが、身が太く頭部を鉢頭状に意識して削りだしてお

り、ミニチュアの陽物状または人形木製品の可能性が考えられる。全長4.3cm、身幅0.4~1.1cm、身厚0.7cm、重量2gを測る。17は全長2cmの木釘。20~23は曲物底板で、柾目の板材が用いられている。復元径は20・21が16~17cm、22・23が18~19cmになる。続く24~27も曲物に使われた幅の狭い薄板断片で、厚さ0.2~0.4cmの柾目材である。33は立体大型の舟形木製品。左半分の断片で、ヘサキ・トモの様子はわからないが、内部は舷側にそって均一にくりぬかれている。舟底の形は平底で断面はU字形を呈する。現存長11.5cm、幅3.1cm、重量30g。41は遺存している片側面を刃部の棟部分とする刀形木製品の可能性がある。現存長13.5cm、幅2.8cm、重量18g。35はヒキリ板。板状加工木片の両端が切り落とされたもので、全長24.7cm、幅4.6cm、厚さ2.5cm、重量240gを測る。1面片側にヒキリウスを2個設け、側辺にV字刻みをつけているが、使用された焼けこげ痕が認められるのは1個のみである。ウスの形は径14mm、深さ8mmのU字形。34は板材を削って丸棒状にしたもので、先端の焼けこげ痕が13mmと前述ヒキリウス径に近い太さであることからヒキリギネの可能性が考えられる。

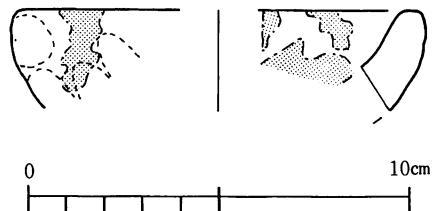
(5) 石製品 (第34図1・2)



第34図 砥石実測図 (1/3)

石製品では砥石が2点出土している。1は平面・断面ともに正方形の砥石。破面を除き4面を使用するが、上面の研磨痕は顯著ではない。全長3.3cm、幅3.2cm、厚さ3.3cm、重量82gを測る。2は長方形板状の砥石で各面を使用する。全長4.8cm、幅3.7cm、厚さ1.6cm、重量60gを測る。

(6) 鍛冶関係遺物 (第35図)



第35図 坩堝実測図 (1/2)

鍛冶関係の遺物として1点のみであるが、第1次調査出土の鞴羽口片に続き坩堝が建物周辺 (J14区) の遺物包含層から出土している。小片ではあるが厚さ12cm、口径12cm、深さ3~4cm前後の小型品に復元でき、外面にはユビオサエの調整痕がみられる。

やや丸みをおびた口縁部内外面には暗灰色の溶融した金属が付着する。なお、この付着した金属の鑑定を国立歴史民俗博物館教授田口 勇氏にお願いしたところ銅滓であるとの教示を得ている。

- 註 (1) 平成2年9月26日に石川県立埋蔵文化財センターで行われた第34回埋蔵文化財担当市町村職員等研修会での講演後、埋文センター職員の方々のご厚意により、国立歴史民俗博物館教授平川南氏に本遺跡出土の墨書土器を実見していただき、数々の指導と助言を得た。記して感謝の意を表したい。
- (2) 吉岡康暢『墨書土器』『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会1983
- (3) 小嶋芳孝『寺家遺跡発掘調査報告書Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター 1988 金沢市
- (4) 今井淳一『四柳白山下遺跡I』羽咋市教育委員会 1990に掲載したものである。

第6章 漆器の塗膜分析について

四柳 嘉章

羽咋市教育委員会より依頼のあった、羽咋市四柳白山下遺跡出土漆器の塗膜分析所見を以下の通り報告する。

分析の方法

漆器の器形は盤状のもので、広葉樹の横木取りである。片面が剥離しているが、総赤色漆器の可能性が大きい。

塗膜分析は漆塗膜の細片をエポキシ系樹脂（アラルダイト G Y1252 J P. H Y837）に包埋後、その断面を研磨し顕微鏡観察によって、手板試料と比較検討をおこなうものである。

分析結果（巻頭カラー図版2-右下）

塗膜層構成は木地固め（渋）の上に、①炭粉層が施されている。層厚は薄いところで24.35 μm、厚いところで73.05 μm、平均48.7 μmである。炭粉は1 μm以下の均一な微粒子が大半であるが、8×4 μmの大きなものも若干含まれている。本層の定性分析はしていないが、炭粉粒子の空隙状況からみて渋層と考えられ、^⑩ 上層にも4～5 μmの渋層が認められる。この上に②赤色漆層（ベンガラ？）が施されているが、層厚は24.35 μmとやや厚い。粒子は1 μm以下の微粒子である。

考 察

四柳白山下遺跡は8世紀を主とした集落跡で漆器も同時代となれば、総赤色のものとしては全国最古例となる。しかし残念ながら出土状況が不詳であることと、上層において一部中世遺物が認められたので、時期判定の情報を得るために塗膜分析を行った。

分析の結果、漆器の塗装工程は炭粉渋下地の上に、中塗りの黒色漆を介せず直接赤色漆が施された、いわば簡素化された普及型の漆器であると判断された。

渋下地の漆器は現在のところ11世紀代に東北（青森）や北陸（石川）で使用され、^⑪ 以後普及型の安価な漆器として、中世には一般的なものとなり、近代にいたるまで大量に生産された。一方古代の漆器製作法は『延喜式』によるところの「土漆」（鉱物粒子を含む漆下地）の上に、研ぎを伴いながら何層もの漆層を塗り重ねる方法が一般的である。^⑫ 9世紀前半の羽咋市寺家遺跡土坑内出土漆皿（ケヤキ）^⑬ や平城京左京一条三坊 S D 6 5 0 出土の須恵器坏形漆椀^⑭も同様のものであった。

加えて赤色漆器の古い例は9世紀前後とされる平城京一条三坊 S D 6 5 0 出土の端反椀（内赤外黒色）^⑮と、滋賀県大津市瀬田野畠遺跡の椀（内赤外黒色）^⑯、石川県では加賀市田尻シンペイダン遺跡の皿（内赤色、12世紀中葉）^⑰ぐらいである。赤色（朱）漆器の使用が貴族間

で盛行するのは9世紀後半から10世紀とみてよいであろう。つまり、それ以前の8世紀代の挽きもの漆器は黒色漆のものしかなく、四柳白山下遺跡の年代、即ち8世紀中葉前後の赤色漆器の出土例は皆無ということになる。

以上の点から、炭粉渋下地の四柳白山下遺跡出土漆器は中世の所産と考えられる。しかし赤色漆の盤形態では中世の出土例はわずかであり、貴重な資料が追加されたといえよう。

- 註 (1) 永嶋正春「中世漆器の塗膜層構成について」『西川島－能登における中世村落の発掘調査』穴水町教育委員会、1987
- (2) 四柳嘉章・江頭俊郎「古代末期の渋下地漆器について－加賀市田尻シンペイダン遺跡出土漆器の塗膜・定性分析」『中世北陸の在地窯－生産と流通の諸問題』北陸中世土器研究会、1990
- (3) 四柳嘉章「古代～近世漆器の変遷と塗装技術」『石川考古学研究会会誌』第34号 石川考古学研究会、1991
- (4) 同上
- 谷内硕央『金屋・新保・猫ノ目遺跡』羽咋市教育委員会、1982
- (5) 『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所、1985
- (6) 同上
- (7) 同上
- 林 博通・栗本政志「近江国府関連官衙跡の調査－大津市瀬田野畠遺跡の調査概要」『古代文化』第35巻第1号 古代学協会、1985
- (8) 田嶋明人『加賀市田尻シンペイダン遺跡発掘調査報告書』石川県教育委員会、1979
四柳・江頭註 2文献

※本稿では漆工用語の説明は省略している。註3文献を参照いただければ幸いである。

第7章 四柳白山下遺跡の大型植物化石

流通科学大学 南木睦彦

1. 大型植物化石のリスト

四柳白山下遺跡は石川県羽咋市にあり、能登半島の基部邑知地溝帯に位置する。考古遺物から奈良時代（8世紀前半代）と考えられる建物の周囲をめぐる溝から、植物化石に富む堆積物が2地点で採集された。堆積物は0.5mmのふるいで水洗篩分けされ、同定可能と考えられる化石が拾い上げられた。以上の処理は発掘担当者により行われ、拾い上げられたものが筆者に分析依頼されたので、種類分けおよび同定をした。同定後の試料はSD04地点のものがMM923. SD03地点のものがMM924の番号を付けて流通科学大学に保管されている。

同定結果を第9表に示す。大量に産出したものと、栽培植物および栽培されていた可能性がある植物の写真を図版23, 24に示す。

同定されたものは、クワ属の種子が過半を占めた。クワ属を除くと、草本が種類数、個数ともに多い。両地点の群集組成の差異はあまりなく、同様の傾向を示した。ただし、SD04地点でイネやイヌビエなどで炭化したものが産出したのに対し、SD03地点ではマメ科A以外は炭化種実は産出しなかった。

木本ではクワ属がいちじるしく多産した。クリ、ムラサキシキブ属、ガマズミ属ガマズミ節は普通に産出した。カヤのみが針葉樹で、他はいずれも落葉広葉樹であった。

草本ではヒュ属、スゲ属A、イネ、アサが多産した。ホタルイ属A、シロザ近似種、イヌコウジュ属またはシソ属、ヤナギタデ、ヘビイチゴ属、ナス属A、イヌビエ、イネ科A、イネB、エノキグサ、ホタルイ属B、エノコログサ属、カヤツリグサ属A、カヤツリグサ属Bなどが普通に産出した。

2. 栽培植物等

栽培されていたことが確実なものは、モモ、イネ、アサ、マメ科A、シソ属、ナス、メロン仲間である。また、栽培の可能性があるものはクリ、シロザ近似種、ヒュ属、イヌコウジュ属またはシソ属である。

クリ（図版23-1）はいずれも破片で計測が困難であったが、少なくとも長さが22mm以上はあった。野生のものとしては最大級であり、栽培されていた可能性がある。

モモ（図版23-5）は、半分に割れたものが2個体産出した。長さ×幅×厚さ（半分の値）が、 $24.9 \times 20.3 \times 8.8\text{mm}$ 、および $26.4 \times 20.4 \times 9.8\text{ mm}$ であった。

イネ（図版23-9～11）は未炭化の穎、炭化した穎、炭化した胚乳の、三つの状態で産出した。

アサ（図版24-17）はいずれも果皮が取れた種子の状態で産出した。

シロザ近似種（図版24-20.21）とヒュ属（図版24-22.23）は、いずれも人里雑草であったとも考えられるが、栽培の可能性もあると思われる。

マメ科A（図版24-29）は、炭化しており、アズキやリョクトウに類似した形態をしている。長さ5.2mm、幅3.3mmであった。

シソ属（図版24-27）、イヌコウジュ属またはシソ属（図版24-28）は、長さが1.7mmから2.0mmのものを便宜的にシソ属とした。野生種にこのような大きなものはないので、これらは栽培されていたと考えられる。長さ1.4mmから1.7mmのものはイヌコウジュ属またはシソ属としたが、これらと、シソ属としたものの変異は連続しているように見える。

ナス（図版24-32）は、長さ3.2mm、幅2.5mm程度の偏平な種子である。野生種と比較して大きく、また編目状の彫紋の稜が顆粒状の組織から出来ている点で現生のナスと一致するので、ナスとした。

メロン仲間（図版24-33）は、8個体が産出しており、2個体が計測可能であった。長さ×幅×厚さは、8.2×3.6×1.1mmおよび5.2×2.0×0.8mmであった。

多様な栽培植物ないしその可能性がある植物が産出したが、建物跡をとりまく溝からの産出であることを考えると、この付近で栽培されていたというよりはむしろ、食用等にしていた栽培植物を投棄したものが産出したと考える方がよいであろう。

3. 古植生

堆積物が採集された遺構のような小規模な溝では、遠方からの遺体が流れ込む可能性が少ない。したがって、産出したものは、堆積の場周辺に生育していたか、人が投棄したものである。

草本で水湿地等の湿った環境を好むものには、サナエタデ、ホタルイ属A、ヤナギタデ、ホタルイ属B、ポンクトタデ、ミゾソバ、ヘラオモダカなどがあった。いずれも湿地ないし抽水植物であり、浮葉植物や沈水植物などの、水深があるていど必要な植物は見られなかった。一方、畑地や路傍などのややかわいたところに生育するものには、ヒュ属、シロザ近似種、ヘビイチゴ属、エノキグサ、エノコログサ属、カタバミ属などがあった。林床などに生育するものは見られなかった。以上から、溝の中にサナエタデやホタルイ属A、B、ヤナギタデなどが生育し、溝の縁や、溝の周囲にヒュ属、シロザ近似種、ヘビイチゴ、エノキグサ、エノコログサ属などが生育していたと推定される。現在の人里の水路周辺で見られる植物相と類似している。

一方、木本はクワ属を除くと産出量が少なかった。クワ属はいちじるしく多産する事から、周囲に生育していた可能性が高い。その他の樹木に森林の主要な構成要素となるものはないので、堆積の場周辺に森林はなく、産出したような樹木が散点的に生育していたものと思われる。

第9表 四柳白山下遺跡の大型植物化石一覧表

数字は2.0kgの土壤から水洗篩分けにより取り上げられ、同定された種実の実数。

和名 ^{**}	学名	産出部位	S D04	S D03
木 本				
カヤ	<i>Torreya nucifera</i> (Linn.) Sieb. et Zucc.	葉 種子	1	1
クリ*	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	果実	8	1
クワ属	<i>Morus</i>	種子	250	694
カジノキ	<i>Broussonetia papyrifera</i> (Linn.) Vent.	核		1
ヒメコウゾ	<i>Broussonetia kazinoki</i> Sieb.	核		2
モモ**	<i>Prunus persica</i> Batsch	核		2
フジ属	<i>Wisteria</i>	芽		1
アカメガシワ	<i>Mallotus japonicus</i> (Thunb.) Muell. Arg.	種子		1
カエデ属	<i>Acer</i>	種子	1	
ケンボナシ属	<i>Hovenia</i>	種子	2	
ブドウ属	<i>Vitis</i>	種子	1	3
キブシ	<i>Stachyurus praecox</i> Sieb. et Zucc.	種子	3	
ムラサキシキブ属	<i>Callicarpa</i>	核	6	3
ニワトコ	<i>Sambucus sieboldiana</i> (Miq.) Blume ex Graebn.	種子	2	1
ガマズミ属ガマズミ節	<i>Viburnum</i> sect. <i>Odontotinus</i>	核	6	
草 本				
ヘラオモダカ	<i>Alisma canaliculatum</i> A. Br. et Bouche	果実		2
イネ**	<i>Oryza sativa</i> Linn.	未炭化類 炭化類	34 8	26
イエビエ	<i>Echinochola crus-galli</i> (Linn.) Beauv.	炭化胚乳	36	
エノコログサ属	<i>Setaria</i>	未炭化類 炭化類	8 6	10
イネ科 A	<i>Gramineae A</i>	穎	16	
イネ科 B	<i>Gramineae B</i>	炭化類	18	
イネ科 C	<i>Gramineae C</i>	炭化類	1	
イネ科 D	<i>Gramineae D</i>	穎	1	
イネ科 E	<i>Gramineae E</i>	穎	1	
スゲ科 A	<i>Carex A</i>	果実	56	69
カヤツリグサ類 A	<i>Cyperus A</i>	果実	3	7
カヤツリグサ類 B	<i>Cyperus B</i>	果実	6	5
ホタルイ属 A	<i>Scirpus A</i>	果実	27	6
ホタルイ属 B	<i>Scirpus B</i>	果実	10	3
イグサ属 A	<i>Juncus A</i>	種子	4	
カナムグラ	<i>Humulus scandens</i> (Lour.) Merill	種子	5	
クワクサ	<i>Fatoua villosa</i> (Thunb.) Nakai	果実	1	
アサ**	<i>Cannabis sativa</i> Linn.	種子	54	32
カラムシ属 A	<i>Boehmeria A</i>	種子	5	
サンショウソウ属	<i>Pellionia</i>	種子	5	
ミゾソバ	<i>Polygonum thunbergii</i> Sieb. et Zucc.	果実	2	1
サナエタデ	<i>Polygonum scabrum</i> Moench	果実	30	38
ボントクタデ	<i>Polygonum pubescens</i> Blume	果実	1	4
ヤナギタデ	<i>Polygonum hydropiper</i> Linn.	果実	23	7
イヌタデ近似種	<i>Polygonum cf. longisetum</i> De. Bruyn	果実	2	4
タデ属 A	<i>Polygonum A</i>	果実	1	
シロザ近似種*	<i>Chenopodium cf. album</i> Linn.	種子	27	6
ヒユ属*	<i>Amaranthus</i>	種子	134	7
ノミノフスマ近似種	<i>Stellaria cf. alsine</i> Grimm	種子	5	
ナデシコ科 A	<i>Caryophyllaceae A</i>	種子	6	
タガラシ	<i>Ranunculus sceleratus</i> L.	果実	1	
ヘビイチゴ属	<i>Duchesnea</i>	果実	23	7
マメ科 A**	<i>Leguminosae A</i>	種子		1
マメ科	<i>Leguminosae B</i>	種子	1	
カタバミ属	<i>Oxalis</i>	種子	2	5
エノキグサ	<i>Acalypha australis</i> Linn.	種子	16	
スミレ属	<i>Viola</i>	種子	1	
チドメグサ属	<i>Hydrocotyle</i>	果実	1	
シロネ属	<i>Lycopus</i>	果実	1	
シソ属**	<i>Perilla</i>	果実	5	
イヌコウジュ属またはシソ属*	<i>Mosla</i> and/or <i>Perilla</i>	果実	17	15
キラシソウ属	<i>Ajuga</i>	果実	1	
ハダカホオズキ	<i>Tubercapsium anomalum</i> (Franch. et Savat.) Makino	種子		2
ナス**	<i>Solanum melogena</i> Linn.	種子	1	2
ナス属 A	<i>Solanum A</i>	種子	1	22
メロン仲間**	<i>Cucumis melo</i> Linn.	種子	5	
タカサゴロウ	<i>Eclipta prostrata</i> (Linn.) Linn.	種子	2	6
オナモミ	<i>Xanthium strumarium</i> Linn.	果実	1	7
不 明		果実	2	2

※1. **: 栽培されていたと考えられるもの。 *: 栽培されていた可能性があるもの。

第8章 遺構と遺物の検討

本遺跡の調査は第1・2次と継続して行っており、合計調査面積が隣接して約600m²と狭い範囲である。よってここでは一括の形で遺構や遺物についてその年代と特色を検討し、遺跡の性格を明らかにするための手がかりとしたい。

土器 第1・2次調査で出土した土器は、須恵器の無台壺・有台壺及び蓋・高壺・鉄鉢・横瓶・短頸・直口壺及び蓋・長頸壺・甕・円面硯、そして土師器の壺・椀・高壺・短頸壺・鍋・甕・製塙土器・支脚・坩堝など器種が豊富である。第10表はこれらの器種構成を示したもので、点数の計算方法は口縁部計測法を用いた。¹¹⁾ まず、全体の器種構成比率では食膳具が74.6%と高く、貯蔵具・煮炊具は4.4%、21%と低い比率となっている。用途別では食膳具、すなわち食器の比率が須恵器93%、土師器7%と須恵器が大勢を占める。むろん年代差等を無視して扱っているため、細かく見れば時期別に若干の変化はあるだろうが、奈良時代前半を通して須恵器の優勢は変わらない。続いて貯蔵具では土師器赤彩短頸壺を除き須恵器が、煮炊具ではすべて土師器が使用されている。

次に、須恵器だけに限定した器種構成をみると、用途別では食膳具が全体の92.4%と多数を占める。器種別では有台壺（壺蓋）が55.9%と最も多く、次いで無台壺が28.1%、その他は1割を切っている。土師器の場合では、食膳具が19.5%、煮炊具が79.2%となり、須恵器とは逆の構成比を示している。また、煮炊具のなかでは甕が79.2%と主体となっている。

以上、本遺跡出土土器の器種構成の様相は、能登における8世紀の傾向を示しながらも、宇野隆夫氏が既に指摘されている公的な様相の強い場での特徴をも示しているようである。¹²⁾ さらに、第10表には現れないが、出土土器中に占める墨書き土器の比率の高さも、本遺跡が官衙的

第10表 四柳白山下遺跡出土土器の器種構成比

	第1次分		第2次分		総計	
	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数
須恵器無台壺	5.63 (13.9 %)	58	18.18 (26.5 %)	252	23.81 (21.8 %)	310
" 有台壺	5.97 (14.8 %)	59	23.85 (34.8 %)	382	29.82 (27.3 %)	441
" 壺蓋	23.80 (58.8 %)	191	23.56 (34.3 %)	338	47.36 (43.4 %)	529
" 高壺			0.38 (0.5 %)	7	0.38 (0.3 %)	7
" 鉄鉢	0.17 (0.4 %)	1			0.17 (0.2 %)	1
土師器壺または椀	4.28 (10.6 %)	72	2.66 (3.9 %)	51	6.94 (6.4 %)	123
" 高壺	0.61 (1.5 %)	14			0.61 (0.6 %)	14
食膳具総計	40.46 (71.6 %)	395	68.63 (76.5 %)	1,030	109.09 (74.6 %)	1,425
須恵器横瓶			1.29 (27.3 %)	54	1.29 (20.0 %)	54
" 甕	0.38 (22.2 %)	21	1.99 (42.1 %)	65	2.37 (36.8 %)	86
" 壺	1.33 (77.8 %)	21	0.95 (20.0 %)	49	2.28 (35.4 %)	70
土師器壺			0.50 (10.6 %)	27	0.50 (7.8 %)	27
貯蔵具総計	1.71 (3.7 %)	42	4.73 (5.3 %)	195	6.44 (4.4 %)	237
土師器甕	14.38	341	15.58 (95.4 %)	263	29.96 (97.6 %)	604
" 鍋			0.29 (1.8 %)	32	0.29 (0.9 %)	32
" 甕			0.45 (2.8 %)	38	0.45 (1.5 %)	38
煮炊具総計	14.38 (25.4 %)	341	16.32 (18.2 %)	333	30.70 (21.0 %)	674
計測品総計	56.55	778	89.68	1,558	146.23	2,336

な性格をもつことのひとつの傍証となるであろう。出土土器の年代については、第1次の報告で記述しているため、ここではふれなかつたが、既存の編年に対比すれば、田嶋編年（田嶋1988）でのII3～IV1期に比定され、III期を主体とするものと考えている。

遺構 今回の調査における最も大きな成果のひとつは、奈良時代前半の建物配置の様相を知り得たことである。第1次調査区内で検出された建物SB01～03は同じ地点での建て替えであり、いずれも一辺60～70cmの方形掘形をもち、同一方向をとる南北棟であった。続く第2次調査区内ではSB04～07が検出された。建物はいずれもSB01～03と比べると柱掘形が小さく、小規模なものであるが、周囲をめぐる溝によって建物の小区画が構成されるという共通性が確認された。なかでもSB04・05は西側柱列を揃えて南北に近接して並ぶ倉庫ふうの総柱建物であり、この2棟をめぐる溝の南端がSB01の北側柱列の線上にほぼのっている。

さらに、SB01～07の主軸方位はN-10°～16°-Wの間にまとまっており、建物以外の遺構である配石や柱列、溝などの配置も、こうした建物方向の同一性に基づいているものと推定される。第1・2次調査区で検出された奈良時代、与木郷域内の集落は遺物の様相と同じく、官衙的な傾向を示していると考えられる。

まとめ

- (1) 「東家」「忍人」「土万呂」「倉富女」「酒女」「田地」などの文字を記す墨書き土器、円面硯、転用硯、轆羽口、堀塙、木製品など本遺跡の性格に関して注目すべき遺物がある。
- (2) 各調査区域内で検出した建物は、主軸方位の同一性に基づいて配置されており、建物間の同時性と計画性が表現されていると思われる。
- (3) 隣接した調査区といつても、第1次と第2次の空間では、敷地・建物の規模・性格のうえで著しい差が認められる。
- (4) 第2次調査区域内では、溝あるいは柱列（掘立柱塙）で細分した小区画内に倉庫ふうの建物などが配置されている。溝内からの多量の植物化石（モモ・クルミ等）や製塩土器・支脚・轆羽口・堀塙などの出土遺物から塩生産・鍛冶などの工房に関連した雑舎的な地区であったことが予想される。
- (5) 第1次調査区域内に配置された建物は、その規模・構造及び周辺から集中的に出土している円面硯・転用硯などの遺物から、前述の雑舎地区の管理的施設と考えられる。

以上、いくつかの観点から第1・2次調査区で検出された遺構・遺物を検討した。限られた時間と紙面の都合により消化不良の点は否めないが、与木郷域内の本遺跡周辺に官衙的な性格をもつ奈良時代の集落が展開したことは確実である。今後の周辺の調査に期待したい。

- 註** (1) 1988年11月4日に石川県立埋蔵文化財センターで行われた第28回埋蔵文化財担当市町村職員等研修会での宇野隆夫氏の講演内容—食器研究と計量の意義をめぐって—および註2文献による。
- (2) 宇野隆夫 「越中の国府・莊家・村落」『歴史学と考古学』高井悌三郎先生喜寿記念論集 1988



第36図 第1・2次調査区域図(1/200)

第11表 四柳白山下遺跡出土土器観察表1

插図 No	器種	器形	調整	胎土		現存量 (/24)	計測値							遺構 出土地点	備考	
				海綿 骨片	砂粒		雲母	断面	A	B	C	D	E	F		
297	須恵器	坏蓋	内外面ナデ、天井部ヘラ削り		SM3	IV	5.8(5)	3.3			14.8		0.6	2.6	3.2	SD04-1 内面降灰
298	"	"	"		SM3	III	4.2(1)	3.7	8.0		15.4		0.6	2.0	2.6	SD16 外面降灰、内面ヘラ書「-」
299	"	"	"		SD3	III	19.5(6)	3.1	6.7		13.7		0.5	2.4	2.9	P 20-22
300	"	"	"		S3.M4	IV		3.1					0.5			SD16 外面降灰
301	"	"	"		SM4	II	19.6(4)	2.8	9.0		14.3		0.5	1.5	2.0	P 88 外面降灰
302	"	"	"		SM3	II	4.0(9)	3.1	6.4		14.4		0.6	2.5	3.1	SD04-1 内外墨痕?
303	"	"	"		SM3	III	11.0(3)				14.8					SD03-1
304	"	"	内外面ナデ		S3.M4	III	2.0(1)				14.1					SD04-1 内面墨痕?
305	"	"	内外面ナデ、天井部ヘラ削り		SM2	III	7.5(2)		7.2		15.5		3.0			SD05 外面降灰 内面墨痕
306	"	"	"		SM3	III	13.0(16)	3.8	10.0		18.8		0.6	2.5	3.1	SD14
307	"	有台坏	内外面ナデ、底部付近削り		SM4	II	4.5(5)	10.6	11.8		16.2		0.6	5.5	6.1	78 SD04-1
308	"	"	内外面ナデ		SM3	IV	13.0(6)		14.4		16.8		6.0		77	SD04-1 底部外面ヘラ書
309	"	"	内外ナデ		S2	IV		7.0	6.4			0.4				SD01 外面降灰
310	"	"	内外ナデ		SM4	II	3.0(6)	8.3	8.0		14.1		0.6	3.6	4.2	56 SD04-1
311	"	"	内外ナデ		SM3	III	5.5(7)	7.4	7.2		13.0		0.4	3.7	4.1	58 SD09
312	"	"	内外ナデ		S3.M4 (長石)	IV	7.2(5)	6.2	8.0		14.0		0.6	4.1	4.7	66 SD16 酸化軟質焼成
313	"	"	内外ナデ		SM4	IV	9.0(2)	8.0	8.0		13.2		0.4	3.7	4.1	65 SD16 底部外面墨痕?
314	"	"	内外ナデ		SM4	II	8.6(5)	7.4	9.0		12.2		0.4	3.2	3.6	68 SD03-1
315	"	"	内外ナデ		S3.M4	III	9.5(9)	9.0	9.0		14.7		0.7	4.0	4.7	58 SD14
316	"	"	内外ナデ		SM4	IV	9.4(12)	9.4	9.0		14.0		0.6	4.7	5.3	64 SD10 酸化軟質焼成
317	"	"	内外ナデ		S2	III		7.6	7.6			0.4				SD03-2
318	"	"	内外ナデ		SM3	IV	9.0(10)	8.4	9.2		13.2		0.5	3.3	3.8	70 SD16 底部外面墨痕
319	"	"	内外ナデ		SM4	IV	2.0(3)	9.4	10.2			0.4				SD04-1
320	"	"	内外ナデ		SM3	III		8.8	8.8			0.4				SD16
321	"	"	内外ナデ		SM4	IV		8.6	7.6			0.3				P 73 酸化軟質焼成
322	"	"	"		SM3	IV		7.8	8.0			0.3				SD04-1 底部外面墨痕
323	"	"	"		SM4	IV	4.0(3)	9.0	9.6		13.0		0.3	3.4	3.7	72 SD17
324	"	"	"		SM4	IV	2.0(3)	9.4	10.2			0.4				SD04-1
325	"	無台坏	"		SM3	III	5.5(6)		8.0		12.5				3.0	64 SD03-1 底部外面ヘラ書「-」
326	"	"	"		SM3	III	1.8(4)		8.4		13.0				3.2	66 SD14 酸化軟質焼成
327	"	"	"		SM4	IV	12.8(9)		9.6		13.4				3.6	70 SD3-1 "
328	"	"	"		SM4	IV	6.0(3)		7.0		12.5				3.5	66 SD04-1 "
329	"	"	"		SM3	IV	13.6(5)		7.6		13.3				3.8	66 SD04-1 "
330	"	"	"		SM3	III	8.6(5)		8.6		13.3				3.4	67 SD04-1 底部外面ヘラ書「X」一部墨痕
331	"	有台坏	"		SM4	III	3.8(5)	8.8	9.2		13.4		0.3	3.7	4.0	75 SD04-1 底部外面墨痕「□□□」
332	"	"	"		SM3	III	9.0(8)	8.6	8.4		13.8		0.5	3.4	3.9	60 SD04-1 底部外面ヘラ書「-」墨痕□□【東家】
333	"	"	"		SM4	IV	2.5(5)	10.2	10.0		14.1		0.4	3.3	3.7	69 SD14 底部外面墨痕、【東家】
334	"	無台坏	"		SM3	IV	3.0(3)		10.0		13.6				3.0	70 SD04-1 底部外面墨痕、【土万呂】
335	"	坏蓋	"		SM4	IV	10.0(4)	3.5	8.6		13.8		0.9	2.3	3.2	SD14 天井部外面墨痕認□【入】
336	"	無台坏	"		SM4	III	10.0(9)		9.0		13.2				3.2	63 SD08 底部外面墨痕、【□】
336	"	坏蓋	内外ナデ、天井ヘラ削り		S2.M3	I	12.0(8)	3.2	4.8		14.2		0.6	3.1	3.7	SX02 外面降灰
357	"	"	"		SM2	III	3.4(1)				14.8					SX02 "
358	"	"	"		SM3	IV	5.0(1)	3.0	6.0		15.0		0.9	2.3	3.2	SX02 "
359	"	"	"		SM2.L1	IV	6.5(8)				15.4					SX02 酸化硬質焼成
360	"	"	"		SM3	III	5.0(2)	3.1	6.2		14.3		0.8	2.6	3.4	SX02
361	"	"	"		SM3	IV	3.2(4)	3.7	6.4		15.4		0.9	2.5	3.4	SX02 酸化軟質焼成
362	"	"	"		SM4	IV	5.6(4)	3.4	7.0		14.6		0.6	2.4	3.0	SX02 外面一部降灰
363	"	"	"		SM4	III	5.0(7)	2.9	8.7		15.2		0.4	1.9	2.3	SX02
364	"	"	"		SM2	III	3.1(1)				14.3					SX02
365	"	"	"		S3.M4	IV	10.4(6)	3.3	7.7		14.3		0.7	2.2	2.9	"

第12表 四柳白山下遺跡出土土器觀察表2

插図 No	器種	器形	調 整	胎 土				現存量 (/24)	計 測 値							遺 構 出土地点	備 考		
				海綿 片骨	砂 粒	蓋 母	断 面		A	B	C	D	E	F	G	H			
366	須恵器	环 蓋	内外ナデ、天井ヘラ削り		SM3		IV	2.7(4)	2.9	6.6		11.8		0.6	1.7	2.3	SX02	酸化硬質焼成 内面ヘラ書「-」?	
367	"	"	" "		SM2.L1		IV		3.5								"		
368	"	"	" "		SM2.L1		IV	1.5(4)	3.5			13.2					"	外面降灰	
369	"	"	" "		SM2		IV	3.2(1)				11.5					"	内面返り	
370	"	"	" "		SM3		I		3.5								"		
371	"	"	" "		SM3		III		2.8	7.4				0.5			"		
372	"	"	" "		SM3		III	6.3(4)	2.8	8.0		13.7		0.6	1.9	2.5	"	外面降灰 内面ヘラ書「-」	
373	"	"	" "		S2.M3		IV	7.0(3)	3.0	5.5		13.6		0.8	2.4	3.2	"	内面墨痕、酸化硬質焼成	
374	"	"	" "		SM4		I	8.0(6)	3.3	7.4		14.0		0.5	2.0	2.5	"	外面降灰	
375	"	"	" "		SM2		III		2.6					0.5			"		
376	"	"	" "		SM3		III		2.9					0.5			"		
377	"	"	" "		SM4		I		2.9	9.4				0.4			"	外面降灰	
378	"	"	" "		SM3.L2		IV	5.8(2)	2.8	12.0		15.8		0.6	1.1	1.7	"		
379	"	"	" "		SM4		IV	6.3(4)	3.3	10.0		16.0		0.5	1.3	1.8	"	内面ヘラ書「+」 酸化硬質焼成	
380	"	"	天井ヘラ削り		M3.L2		IV		3.3					1.0			"		
381	"	"	内外ナデ、天井ヘラ削り		SM3		IV	4.5(4)	3.1			18.4			0.7		"	外面降灰	
382	"	有台环	内外ナデ		ML3		III	3.4(5)	8.4	8.0		13.6		0.5	4.6	5.1	61	"	
383	"	"	"		SM3		III	2.0(3)	7.6	8.8				0.4			"	底部外面ヘラ書「×」?	
384	"	"	"		M3.L2		IV	10.4(4)	7.0	8.0		11.8		0.4	3.6	4.0	73	"	酸化硬質焼成 底部外面ヘラ書「-」
385	"	"	"		SM3		II	1.4(4)	7.6	7.6		11.5		0.3	3.7	4.0	71	"	
386	"	"	"		SM3		IV	2.0(3)	7.7	8.7				0.5			"	底部外部墨痕	
387	"	"	"		SM3.L1		IV		6.9	8.0				0.4			"	底部ヘラ書「×」?	
388	"	"	"		SM3		III	9.0(6)	8.2	8.6		14.2		0.6	3.7	4.3	60	"	底部外面ヘラ書「ヘ」
389	"	"	"		SM4		IV	8.4(5)	7.7	8.8		13.2		0.4	3.6	4.0	64	"	口縁部外面一部降灰 底部外部ヘラ書「=」
390	"	"	"		SM4.L		IV	12.0(7)	7.4	8.6		13.0		0.5	3.6	4.1	70	"	底部外面ヘラ書「-」
391	"	"	"		SM4		IV	16.0(14)	7.2	8.2		13.2		0.5	4.1	4.6	71	"	底部外面ヘラ書「-」
392	"	"	"		SM2	(クリー ム色)	II	7.2(8)	9.2	8.2		14.1		0.7	3.9	4.6	56	"	外面一部降灰
393	"	"	"		ML3		II	1.7(9)	6.7	7.6		12.3		0.3	3.9	4.2	65	"	
394	"	"	"		SM4		III	16.0(4)	8.0	9.8		13.4		0.5	3.2	3.7	64	"	
395	"	"	"		SM4		IV	0.5(1)	8.4	10.0		14.0		0.3	3.8	4.1	72	"	
396	"	"	"		SM3		III	16.0(7)	8.8	9.8		12.7		0.4	4.0	4.4	74	"	酸化軟質焼成
397	"	"	"		SM4		IV	4.0(3)	7.2	8.2		12.7		0.4	3.8	4.2	77	"	底部外面ヘラ書「-」
398	"	"	"		SM3		IV	2.0(3)	8.2	9.6		13.8		0.5	3.3	3.8	70	"	酸化軟質焼成 底部外面ヘラ書「-」
399	"	"	"		M3.L2		IV	10.3(11)	8.8	10.0		13.4		0.5	3.5	4.0	70	"	
400	"	"	"		SM3		II		8.7	9.4				0.4			"		
401	"	"	"		S3.M4		IV		8.5	9.0				0.3			"		
402	"	"	"		SM1		IV	4.1(3)	10.8	10.4				0.4			"		
403	"	"	"		SM2		III	2.7(3)	7.5	8.7				0.5			"		
404	"	無台环	"	S 3	S 1		IV	1.0(2)		5.4		9.1			2.9	79	"		
405	"	"	"		SM2		III	3.4(3)		6.0		10.7			3.5	71	"	酸化軟質焼成 底部外面ヘラ書「-」	
406	"	"	"		SM3		III	5.0(4)		8.0		13.4			3.4	58	"	酸化軟質焼成	
407	"	"	"		S3.M4		III	19.2(2)		8.0		13.4			3.4	64	"	底部内面ヘラ書「ヘ」	
408	"	"	"		SM3		IV	14.0(6)		7.4		13.1			3.7	63	"		
409	"	"	"		S 2		IV	2.5(3)		8.0		12.5			2.9	57	"	酸化軟質焼成	
410	"	"	"		SM4		IV	6.0(8)		8.5		12.6			3.6	66	"		

第13表 四柳白山下遺跡出土土器觀察表3

通 号 No	器種	器形	調 整	胎 土		現存量 (/24)	計 測 値								遺 構 出土地点	備 考	
				海綿 片骨	砂 粒		A	B	C	D	E	F	G	H	I		
411	須恵器	無台坏 内外ナデ		SM4		IV		10.0								SX02	酸化軟質焼成 口縁内外墨痕
412	"	"	"	SM3		IV	4.6(10)	7.0								"	口縁外面へラ書「=」 外面降灰
413	"	"	"	S3		III	2.3(1)	7.4	12.3					3.4	71	"	口縁外面から底部にかけて墨痕?
414	"	"	"	SM3		IV		8.0								"	酸化軟質焼成
415	"	有蓋高坏	"	SM4		III	9.2(7)	5.0	16.6			5.2				"	脚部透かし有
416	"	無蓋高坏	底部外面ヘラ削り	S1	SM3	III		8.0								"	
417	"	"	内外面ナデ	SM		III		13.0								"	脚端部のみ、416と同一個体か
418	"	"	底部外面ヘラ削り	S2		IV		5.2								"	坏部内面降灰
419	"	長頸瓶	口頸部内外面ナデ	SM3		III	2.4(5)			6.2						"	
420	"	壺 盖	内外面ナデ、天井部ヘラ削り	SM3		IV	3.0(1)			13.4						"	内面降灰
421	"	壺	内外ナデ	SM3		II			18.4							"	体部外面降灰
422	"	"	体部外面下半ヘラ削り	SM3		IV		8.6								"	脚付きの広口壺か? 421と同一個体
423	"	"	底部付近ヘラ削り	SM4		III		6.0								"	
424	"	長頸瓶	外面ナデ	S1	SM3	IV										"	酸化軟質焼成、暗黄褐色
425	"	壺	ナデ	SM3		III		11.4				3.1				"	外面降灰
426	"	横 瓶	体部外面カキ目、平行叩き	SM4		II	8.0(48)			11.8						"	体部側端内面、接合底
428	"	長頸瓶	外面ナデ	SM3		II	4.4(22)			13.0						"	口頸部二条の沈線
429	"	"	体部下半ヘラ削り	SM3		II		11.4	9.0				2.2			"	428と同一個体、 体部へラ書「+」
430	"	"	内外面ナデ	SM4		II	5.0(12)			13.7						"	口頸部三条の沈線
431	"	"	体部下半ヘラ削り	SM4		II		9.8	8.4			2.1				"	430と同一個体、肩部沈線
432	"	"	"	SM4		III		6.0	16.6		8.0					"	肩部沈線
433	"	"	体部~底部ヘラ削り	SM3		II		9.0	22.0		11.5					"	外面降灰
434	"	壺	口縁部内外ナデ	SM3		II	2.0(1)			23.4						"	内外面降灰
435	"	"	体部平行叩き、 内面同心円紋	SM3		I	2.0(5)			25.2						"	外面降灰
436	"	"	口縁部ナデ 体部外面平行叩き、 内面同心円紋	SM3		II	2.2(1)			19.4						"	
437	"	"	"	S4, M3		IV	3.3(4)			23.0						"	酸化硬質焼成、暗赤褐色
438	"	"	"	SM3		II	17.5(43)			26.8						"	肩部有台坏 溶着痕 2ヶ所
439	"	坏 盖	内外面ナデ、天井部ヘラ削り	SM4		III			10.4							"	天井部外面墨書 判読不能
440	"	"	"	SM4		IV	7.0(7)	3.6	8.4		15.4	0.6	2.0	2.6		"	" 酸化軟質焼成
441	"	有台坏	外面ナデ	SM4		IV	7.0(3)	9.4	9.0		13.3	0.4	3.4	3.8	75	"	底部外面墨書 判読不能
442	"	坏 盖	" 天井部ヘラ削り	SM3		III	9.0(5)	2.6	8.8		14.8	0.5	2.0	2.5		"	内面墨書 判読不能 外面降灰
443	"	有台坏	外面ナデ	SM3		IV		8.0	8.0			0.2				"	底部外面墨書 判読不能
465	"	坏 盖	内外ナデ、天井ヘラ削り	SM3		I	6.1(6)	3.3	8.0		15.6	0.8	2.5	3.3		I J 13 区	内面へラ書「=」 外面降灰
466	"	"	内外ナデ、天井ヘラ削り	SM4		III	4.4(4)				15.8					J 14 区	
467	"	"	"	SM3, L2		II	10.8(6)		8.0		15.7			2.3		J 13 区	
468	"	"	"	S3, M2		IV	4.0(1)				16.2					G 10 区	
469	"	"	"	M4, L2		III	9.7(7)				15.8					I - J 11 区	酸化硬質焼成 外面降灰
470	"	"	"	SM4, L2		IV	5.0(3)	3.4	10.7		15.7	0.5	1.9	2.4		K 13 区	
471	"	"	"	SM4		III	14.3(6)	3.7			15.5				1.3	LM 13 区	外面降灰
472	"	"	"	SM4		III	2.8(2)				16.0					I 11 区	屈曲
473	"	"	内外ナデ	SM3		IV	8.0(5)	2.2	8.0		14.6	0.6	2.7	3.3		I 9, J 10, J 11 区	内面へラ書「*」

第14表 四柳白山下遺跡出土土器観察表4

件名	器種	器形	調 整	胎 土		現存量 (/24)	計 測 値							遺 構 出土地点	備 考		
				海綿 片骨	砂 粒		A	B	C	D	E	F	G	H			
474	須恵器	壺 蓋	内外ナデ、天井ヘラ削り	SM3. M2		III	1.0(3)	2.3	8.0	12.8		0.8	1.4	2.2	I11. L15区	内面降灰	
475	"	"	"	SM3. M2		I	5.5(1)			12.6			1.8		J 12 区	外面降灰	
476	"	"	"	L1. M2		IV	8.4(8)	3.0	8.0	14.2		0.5	1.6	2.1	K10. H11. L15区	内面ヘラ削「」	
477	"	"	"	SM4		I	8.3(4)			14.2		1.5			K L 12 区	外面降灰	
478	"	"	"	SM4		III	6.2(5)	3.0	8.2	14.0		0.7	1.6	2.3	G10. J. H11区		
479	"	"	"	SM3		III	8.0(5)	2.9	8.6	15.0		0.6	2.0	2.6	L J12. J13区	内面ヘラ削「-」	
480	"	"	"	SM4		III	4.6(2)			15.2					J 12. L 13区	内面ヘラ削「#」?	
481	"	"	"	SM4		III	1.0(4)	2.8	6.0	15.0		0.5	2.5	3.0	K13. M14区	外面降灰	
482	"	"	"	SM2		IV	4.3(3)	2.9	7.6	14.9		0.8	2.2	3.0	N 14 区	内面ヘラ削「-」?	
483	"	"	"	SM4		III	6.0(6)	3.5	5.2	14.4		0.5	2.5	3.0	I 11. 12 区	内面墨痕	
484	"	"	"	SM4		III	3.7(4)	3.2	7.8	14.4		0.3	1.8	2.1	K12. 13 区	外面降灰	
485	"	"	"	SM4		II	2.8(3)	3.4	8.8	15.2		0.4	1.8	2.2	L 13. 14 区		
486	"	"	"	SM3 (0類)			5.0(1)			15.2					L 14 区	酸化軟質焼成	
487	"	"	"	SM3		III	3.5(3)	2.9	7.7	15.0					M 16 区	内面全体に墨痕	
488	"	"	"	S4. M3		IV	5.2(1)		9.0	14.5			2.1		L 15 区		
489	"	"	内外ナデ	SM4. L		III	6.5(2)		7.6	14.7			1.5		J 10. N 15 区		
490	"	"	天井ヘラ削り	S3. M4		III	10. (4)	3.5	5.2	14.8		0.6	2.2	2.8	J 12-13 区	内面ヘラ削「-」	
491	"	有台环	内外ナデ	SM3. L2		IV	7.0(4)	7.0	6.0	11.8		0.2	4.0	4.2	63	H 11 区	底部外面ヘラ削「=」
492	"	"	"	SM3		III	10.6(9)	8.6	8.6	12.8		0.3	3.7	4.0	68	K 11. J 12 区	酸化軟質焼成
493	"	"	"	M3. L2		IV	8.5(3)	9.6	9.4	13.1		0.4	3.9	4.3	75	自然流路内	酸化軟質焼成
494	"	"	"	SM3		III	1.0(1)	8.8	8.8	13.0		0.3	3.7	4.0	73	I 10 区	
495	"	"	"	SM3		IV	9.0(3)	8.8	9.6	12.7		0.3	3.7	4.0	73	K 14 区	酸化軟質焼成 外面全体墨痕
496	"	"	"	SM3		I	5.0(5)	7.6	7.6	10.9		0.2	3.3	3.4	71	H 11 区	外面降灰
497	"	"	"	S4. M3		II	7.8(4)	8.0	8.4	11.4		0.3	3.7	4.0	80	J 12 区	
498	"	"	"	M3		I	1.0(3)	8.2	8.6	13.0		0.5	3.1	3.6	63	K 13 区	
499	"	"	"	SM4		III	12.0(7)	8.2	8.2	12.9		0.4	3.6	4.0	70	J 11 区	体部外面ヘラ削「~」?
500	"	"	"	SM4		IV	1.0(5)	8.4	9.0				0.6			L 14. M 13 区	酸化軟質焼成 底部内面ヘラ削「-」
501	"	"	"	SM4		III			8.6	9.0			0.3			J 9 区	
502	"	"	"	SM3		II			8.4	8.0			0.4			M 14 区	
503	"	"	"	SM3. L2		III	9.0(7)	9.0	9.8	13.1		0.4	3.1	3.5	66	L 14 区	口縁外面墨痕? 焼?
504	"	"	"	SM3		II	6.0(7)	9.6	10.4	14.0		0.4	2.8	3.2	68	K 15 区	底部外面ヘラ削「-」
505	"	"	"	SM4		II			9.2	9.4			0.5			M 15 区	底部外面ヘラ削
506	"	"	"	M3. L2		III	17.0(6)	8.2	8.4	13.9		0.4	4.2	4.6	60	L 14. 15 区	外面降灰
507	"	"	"	SM4		IV	1.5(3)	8.5	8.2	15.6		0.5	4.3	4.8	59	J 14 区	酸化軟質焼成
508	"	"	"	M2. L1		III	4.0	9.0	9.4	14.0		0.5	4.0	4.5	70	K 14 区	底部内面ヘラ削「=」
509	"	"	"	M4. L2		IV	22.3(9)	8.6	8.8	14.2		0.5	3.4	3.9	61	L M 15 区	底部外面ヘラ削「×」 外面降灰
510	"	"	"	SM3		I	19.0(11)	8.8	9.6	14.0		0.3	3.7	4.0	70	L 14 区	
511	"	"	"	SM3		IV	20.0(4)	10.0	10.4	14.2		0.3	3.5	3.8	66	M 14 区	
512	"	"	"	S2		I	11.0(5)	10.0	10.0	14.7		0.3	3.7	4.0	72	J 14 区	酸化軟質焼成
513	"	"	"	SM3		IV	6.0(10)	9.8	9.8	14.0		0.3	3.5	3.8	65	G - H 110 区	" 底部外面ヘラ削「+」?
514	"	"	"	SM3		IV	2.0(5)	8.6	10.0	13.7		0.3	3.8	4.1	79	J 10 区	酸化軟質焼成
515	"	"	"	SM3		IV	2.4(15)	10.4	11.0	14.3		0.3	4.0	4.3	80	K 11 区	" 口縁内外墨痕?
516	"	"	"	SM3		III	11.0(1)	10.0	10.6	13.1		0.6	3.5	4.1	80	J 9 区	底部外面ヘラ削「×」
517	"	"	"	SM3		IV			10.0	10.0			0.2			H 10 区	底部外面ヘラ削「×」?
518	"	"	"	SM4		IV	2.0(6)	9.8	10.8	14.0		0.5	3.4	3.9	81	H 11 区	
519	"	"	"	SM3		III	14.6(9)	10.4	10.6	15.1		0.4	4.6	5.0	70	M 15 区	
520	"	"	"	SM3		III	1.5(2)	10.4	10.4				0.4			K 14 区	

第15表 四柳白山下遺跡出土土器観察表5

番号 No.	器種	器形	調 整	胎 土		現存量 (/24)	計 測 値							遺 構 出土地点	備 考		
				海綿 片骨	砂 粒		A	B	C	D	E	F	G	H			
521	須恵器	有台坏	内外ナデ		SM3	III		10.0	10.0			0.5			M14 区		
522	"	"	"		SM3	III	6.0(7)	9.8	10.0	17.0	0.5	7.2	7.7	76	M13 区		
523	"	無台坏	"		S1	IV	2.0(2)		6.0	10.1			3.0	67	J 11 区	胎土精良	
524	"	"	"		SM3	III	1.8(2)		5.0	12.0			4.6	71	K 14 区		
525	"	"	"		SM4	III	2.0(3)		7.6	12.0			2.8	60		底部外面うず状痕	
526	"	"	"		SM3	III			7.0						J 14 区		
527	"	"	内外ナデ		S4. M3	III	2.7(1)		6.3	11.4			3.4	60	K 15 区		
528	"	"	"		SM4	II	3.0(2)		7.4	11.4			3.5	64	J 10 区		
529	"	"	"		SM4 (長石)	III	1.5(6)		7.0	11.9			3.6	63	K 13 区	酸化軟質焼成	
530	"	"	"		SM3. L2	III	6.3(1)		6.0	11.3			3.7	64	J 14 区	底部外面ヘラ書	
531	"	"	"		SM3 (長石)	IV	2.0(4)		5.0	11.6			3.8	69	L 15. 16 区	酸化軟質焼成	
532	"	"	"		S1 SM3	III	8.6(4)		6.0	11.4			3.6	65	L 15 区	底部無調整	
533	"	"	"		M2. L1	IV	2.0(4)		8.2	11.0			3.3	72	M 16 区	酸化軟質焼成	
534	"	"	"		M 4 SM3	III	20.0(5)		6.0	12.8			3.1	55	L 15 区	底部外面うず状痕	
535	"	"	"		S2. M3	III	2.5(2)		7.0	12.4			3.1	58	K 13 区		
536	"	"	"		S5. M2	IV	10.8(4)		8.2	12.5			3.1	59	I. K 11 区		
537	"	"	"		M2	IV	4.3(4)		6.2	12.0			3.1	65	J 12. K 14 区	酸化軟質焼成	
538	"	"	"		SM3	IV	7.8(3)		6.8	12.6			3.5	65	K 14 区	酸化軟質焼成	
539	"	"	"		SM4	IV	6.5(5)		7.4	13.5			3.6	67	L 13 区		
540	"	"	"		SM3. L1	IV	11.5(4)		7.2	14.1			3.3	58	K 15 区	底部外面ヘラ書「-」	
541	"	"	"		SM4	IV			9.0						I 11 区	内面油痕、酸化軟質焼成	
542	"	"	内外ナデ		SM3	III	4.6(2)		9.6	13.4			3.2	72	J 11 区		
543	"	"	"		S3	IV	6.5(4)		8.0	13.0			3.4	71	L 14 区	内外墨痕?	
544	"	"	"		SM4 (長石)	IV	7.0(2)		9.0	13.0			3.5	74	L 13 区	酸化軟質焼成	
545	"	"	"		S4. M3	IV	3. (4)		8.4	12.6			3.3	67	J 14 区		
546	"	"	"		SM4	III	2.6(6)		8.0	12.5			3.4	72	J 11 区	外面部墨痕	
547	"	"	"		SM4	III	5.3(4)		8.0	12.7			3.2	71	K 10. M 13 区	底部外面ヘラ書「≠」	
548	"	"	"		SM4 (長石)	IV	2.0(4)		8.2	13.0			3.8	70	L. M 13 区	底部外面ヘラ書 酸化軟質焼成	
549	"	"	"		S4. M3	III	11.3(8)		7.2	12.6			3.9	68	J 10. 11 区		
550	"	"	"		SM4	IV	7.0(4)		8.0	13.0			3.8	61	L. I 11 区	外面部墨痕	
551	"	"	"		SM3 (長石)	IV	1.0(2)		8.0	13.0			3.7	65	I. J 10 区	酸化軟質焼成	
552	"	"	"		SM4	IV	5.0(6)		8.0	12.8			3.9	72	H. L 12	" 底部外面ヘラ書	
553	"	"	"		SM3	IV	11.6(9)		8.0	12.7			3.8	70	H. I 11 区	酸化軟質焼成 内面油痕 酸化軟質焼成	
554	"	"	"		M3. L1 (長石)	IV	12.8(7)		9.0	13.0			3.7	70	K 13. 14 区	酸化軟質焼成	
555	"	"	"		M3 (長石)	IV	2.6(1)		8.4	12.6			3.8	80	J 12 区	"	
556	"	"	"		SM3	III			9.6						I 12 区		
557	"	"	内外ナデ		M4	IV	4.0(1)		10.8	14.9			3.6	72	K 11 区	酸化軟質焼成	
558	"	"	"		SM3	IV	5.8(6)		10.0	15.0			4.0	72	J 9 区	"	
559	"	壺	口縁部ナデ、 体部外面叩き、内面同心円紋		SM3	II	11.8(1)			13.4	4.2					H 11 区	内外墨痕
560	"	"	口縁部内外ナデ		SM4	IV	1.0(1)			19.4						J 12 区	
561	"	横 瓶	口縁ナデ 体部中央付近外面 平行叩き、内面同心円紋		SM3	II	6.0(1)			11.4						L 15 区	
562	"	"	口縁ナデ 体部中央付近外面 平行叩き、内面同心円紋		SM3	II	11.5(3)			10.9						L 15 区	
563	"	壺	"		SM3	III	3.0(8)			17.0						K 12 区	酸化軟質焼成、淡灰褐色

第16表 四柳白山下遺跡出土土器観察表6

番号	器種	器形	調 整	胎 土		現存量 (/24)	計 测 値							遺 構 出土地点	備 考	
				海綿 片骨	砂 粒		断 面	A	B	C	D	E	F	G		
564	須恵器	壺	底部外面付近ヘラ削り	SM4		II			9.6							M13 区
565	"	壺	"	SM4		IV			8.8							K10 区 底部片、外面ヘラ削？
566	"	"	"	SM3		III			16.8							I 11 区 "
567	"	高 壱	外面ナデ	S3		III		13.7								I 12 区 脚部片
568	"	短頸壺	"	SI		IV	2.0(6)			5.8	1.0					I 13 区 断面赤褐色
569	"			S2		III										K15 区 肩部沈線
570	"	平 壱	外面ナデ	SM3		III			7.4	12.4			2.5			J 14 区
571	"	壺	体部下半ヘラ削り	SM4		III			9.0	14.0			5.9			J, K11 区 外面削灰
572	"	"	"	SM3		II			9.2	14.4			5.6			K13, 14 区 "
573	"	"?	"	SM4		IV		11.0	16.0			5.2				J 14 区 "
574	"	長頸壺	"	SM3		IV			6.6	17.0			8.4			M14 区 脚付き、底部内面削灰
575	"	"	"	SM2		IV			20.6							K14 区 口部沈線、肩部に 後をもつ
576	"	有台杯	内外ナデ	SM2, LI		IV	10.5(5)	8.2	8.2		12.2	0.4	3.4	3.8	70	N, M14 区 底部外面墨書「三」+ 「□□」(酸硬)
577	"	"	"	SM4		IV		9.0	8.0			0.3				N14 区 底部外面墨書「□□」 (酸硬)
578	"	"	"	SM4		III		9.2	8.8			0.3				N14, L15 区 底部外面墨書「忍人」
579	土師器	壺	内外磨き	S4, M3			1.2(4)		8.0	16.0				4.9	I 9 区	内面黒色、底部外面 墨書「忍人」
580	須恵器	無台杯	内外ナデ	SM4		IV			8.4							J 13 区 底部外面墨書「倉富女」 (酸軟)
581	"	"	"	SM4		IV			9.2							H10 区 底部外面墨書部分的(?)
582	"	"	"	SM4		IV	6.5(3)		9.4	13.2				3.6	75	I 14 区 底部外面 倉富□(女々) (酸軟)
583	"	"	"	SM4		IV	13.0(6)		9.0	13.0				3.1	64	K13 区 底部外面墨書「土万呂」(?)
584			"	SM4		IV	10.0(7)		8.4	13.0				3.1	73	I 14 区 底部外面墨書「倉富女」 酸化軟質焼成
585			"	SM3		IV	19.0(9)		8.2	13.3				3.8	69	M14 区 底部外面墨書 判読不能 (〃)

観察表中、〔調整〕については、各部位外面、内面の順に記入した。分記していない場合は内外面共通の調整手法であることを表している。

〔胎土〕は海綿骨片・赤褐色粒・雲母・石英・長石・岩石粒の形状、大きさ、含有量を裸眼で観察した。そのうち、石英・長石・岩石粒などは、ほとんどの土器が共通の傾向を示していたので、表中では砂粒として表記した。量は主観的にみて、通有量と思われるものを判断基準に3とし、以下5：非常に多い・4：多い・2：少ない・1：非常に少ないと表記した。また、断面とは、須恵器のみに行ったもので、安里 進「須恵器の断面色層と六世紀の焼成技術」『考古学研究』を参考に、酸化焰焼成によって生成した茶褐色系の色層を「酸化層」、還元焰焼成によって生成した青灰色系の色層を「還元層」とし、内外表面から内部まで完全な酸化層をI類、内外表面のみ還元層で、内部は全面的に酸化層が残るものをII類、還示層が内外表面からある程度内部まで及んでいるが、芯にはまだ酸化層が残るものをIII類、内外表面から芯まで完全に還元層のものをIV類、その他変則的な色層をなすものをV類として分類、表記した。

〔現存量〕については、基本的に口縁部の残存率を24分割法で、さらに状況に応じて()内に底部の残存を表した

〔計測値〕については、A：高台径、B：底径、C：口縁部ヨコナデ幅の直径あるいは体部最大径、D：口径、E：口縁部ヨコナデ幅あるいは口縁部高、F：Eに対する体部下半の高さ、G：体高、H：器高、I：体部の最も張り出した所から口唇部端へ直線を引いて計測した角度をそれぞれ表記した。

図 版



(1) 遺跡近景(北から)



(2) 調査風景(西から)



(1) SU14~19検出状況(南から)



(2) 掘り上がったSU14~19(南から)



(1) SX02検出状況(南から)



(2) SX02内土器検出状況(南から)



(1) 調査区全体遺構検出状況(西から)



(2) 調査区西側遺構検出状況(北から)



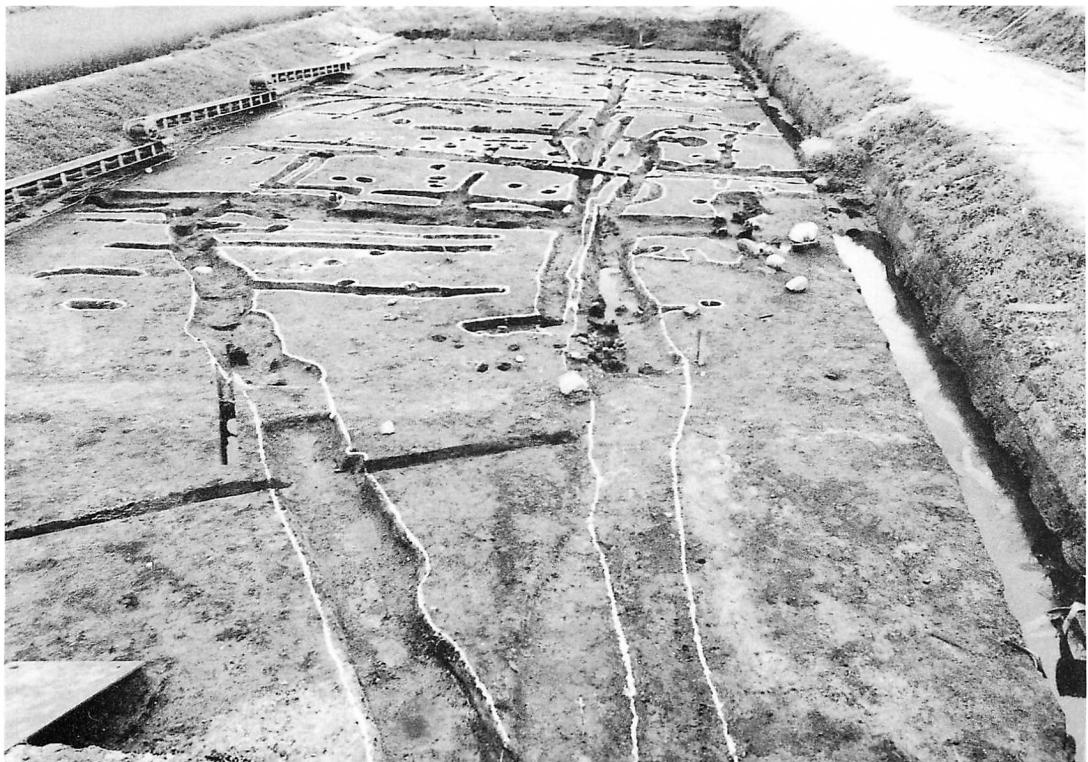
(1) 調査区中央遺構検出状況(北から)



(2) 調査区東側遺構検出状況(北から)



(1) 掘り上がった調査区全景(西から)



(2) 掘り上がった調査区全景(東から)



(1) 掘り上がった調査区中央1(北から)



(2) 掘り上がった調査区中央2(南から)



(1) 掘り上がったSB04・05・SD04(北から)



(2) 掘り上がったSB04・SD04(東から)



(1) 掘り上がったSB06(南から)



(2) 掘り上がったSB07(南から)



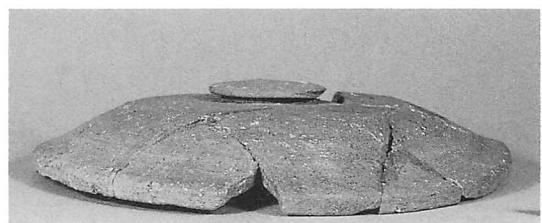
(1) SD14内ヒキリ板出土状況(南から)



(2) SD06内土師器鍋出土状況(西から)



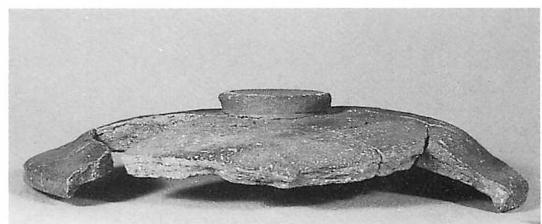
297



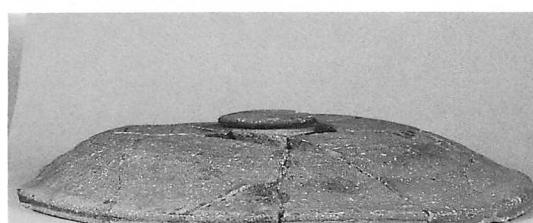
299



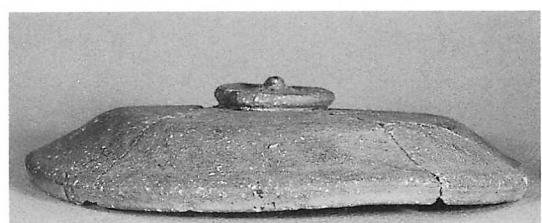
301



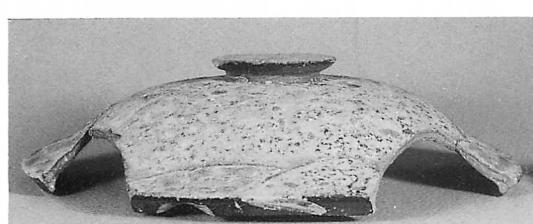
302



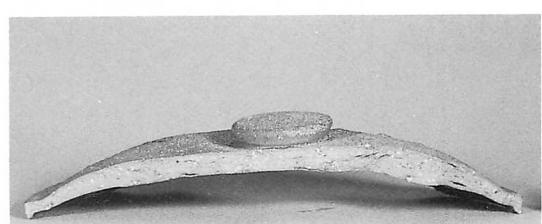
306



335



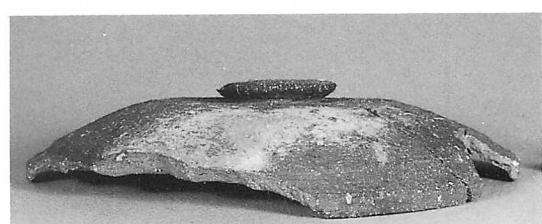
356



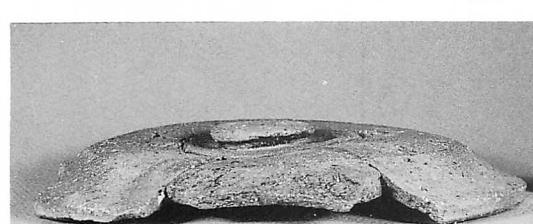
358



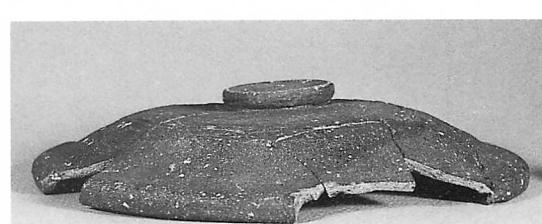
361



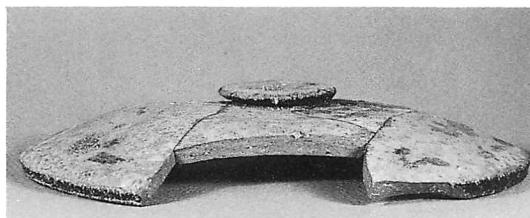
362



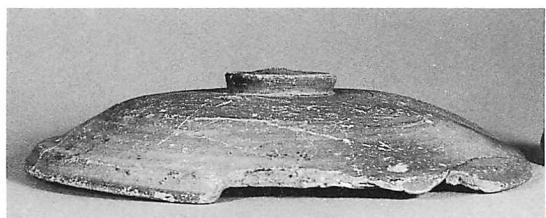
363



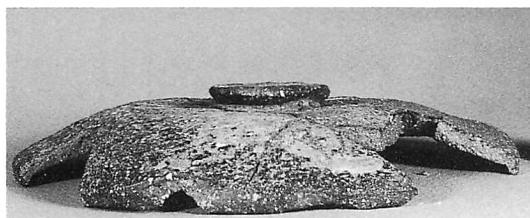
365



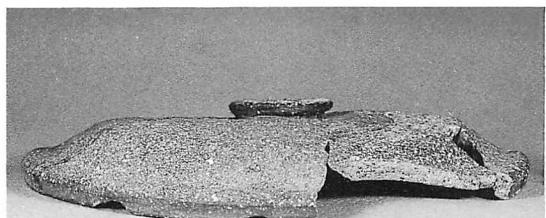
372



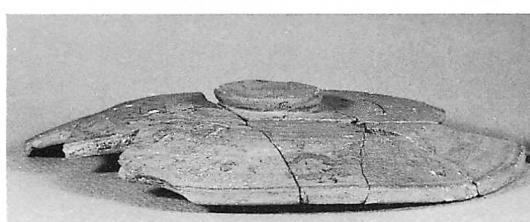
373



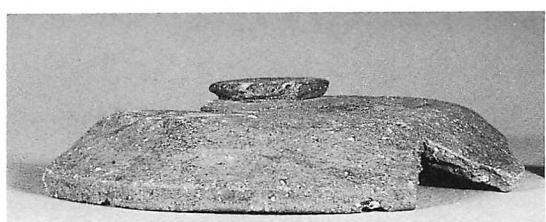
374



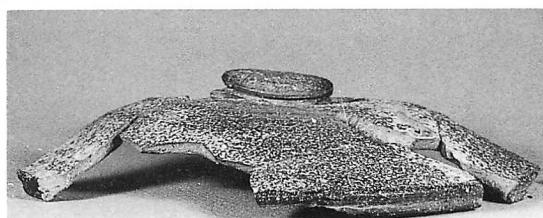
442



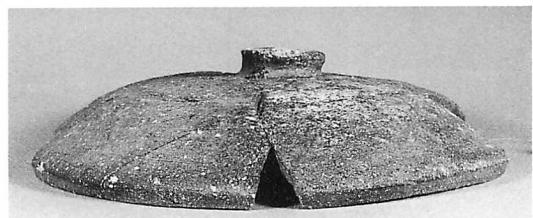
476



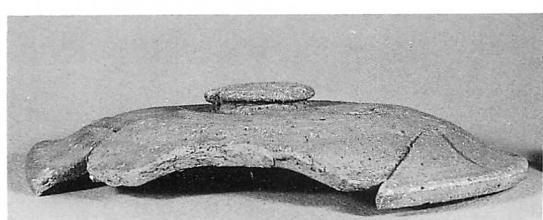
470



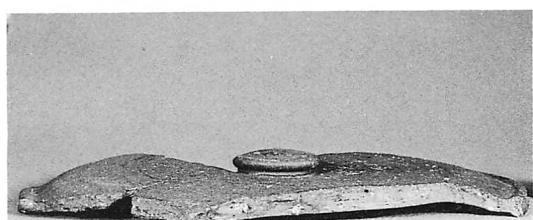
465



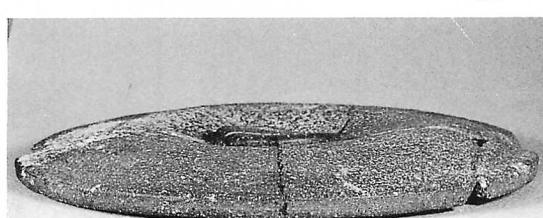
473



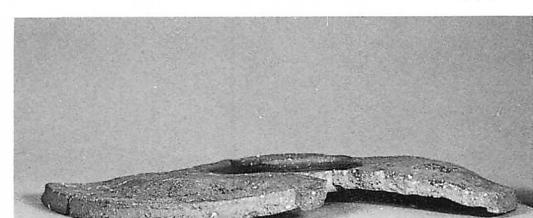
479



378



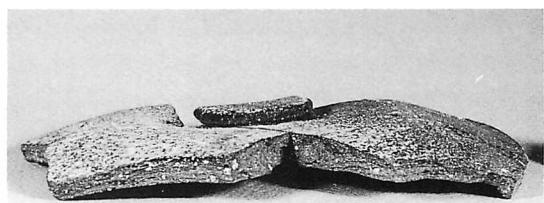
471



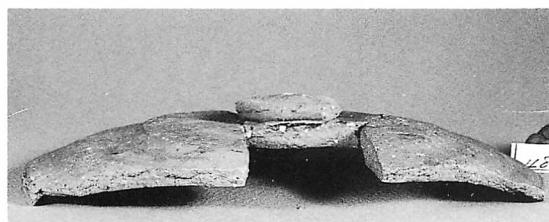
379



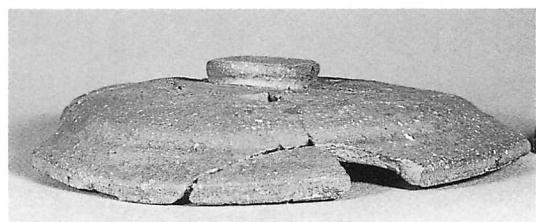
483



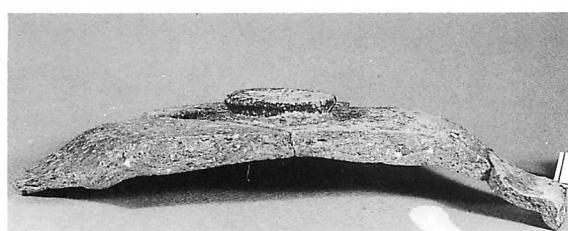
484



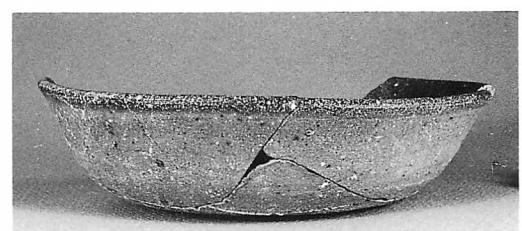
487



490



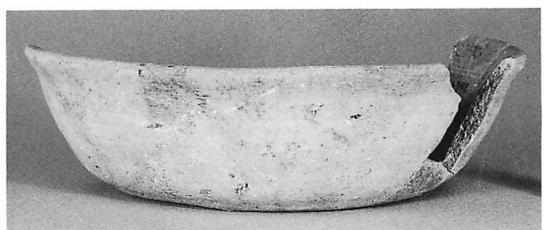
481



408



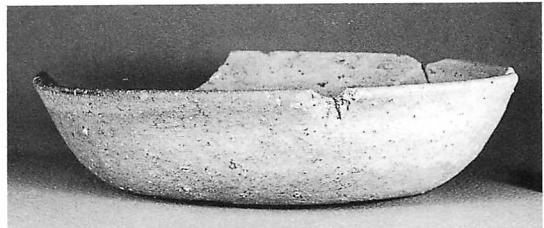
327



329



330



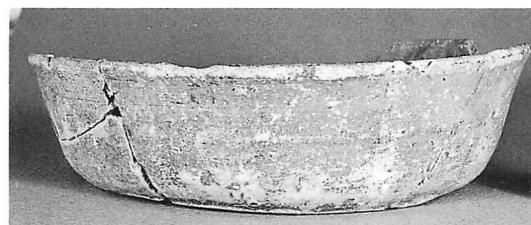
407



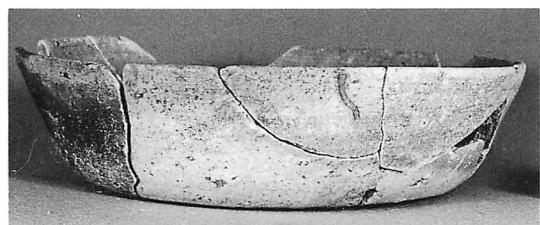
530



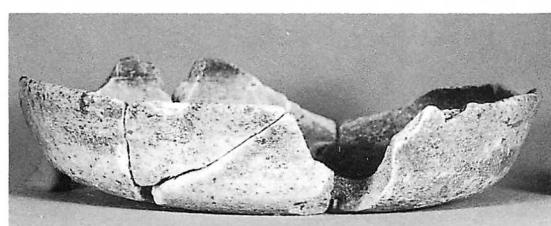
534



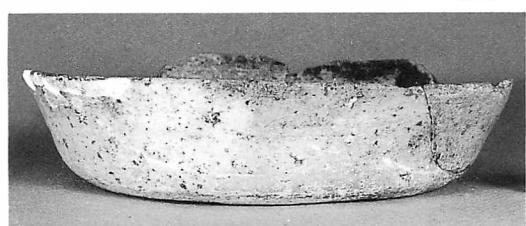
554



585



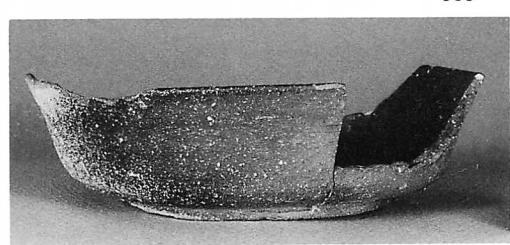
584



583



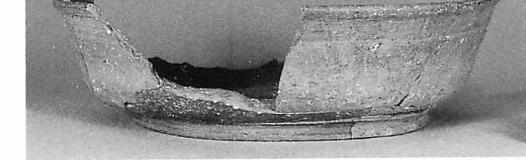
307



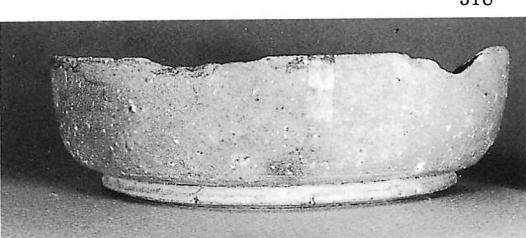
314



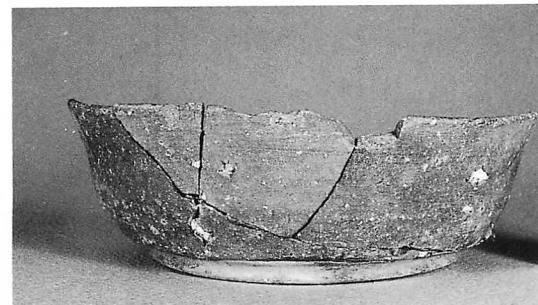
316



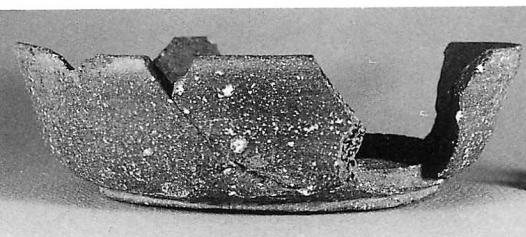
318



516



384



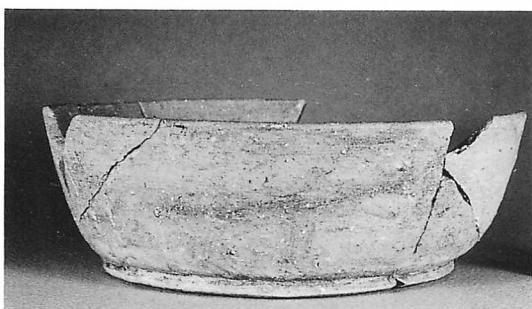
390



391



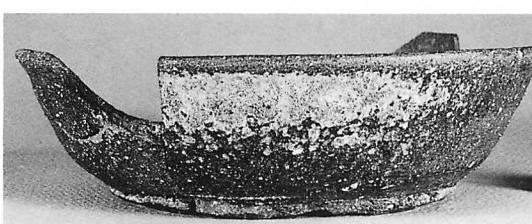
394



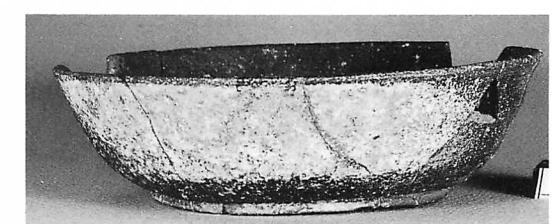
396



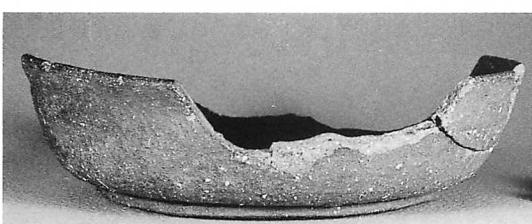
506



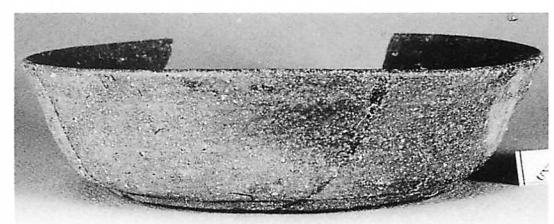
389



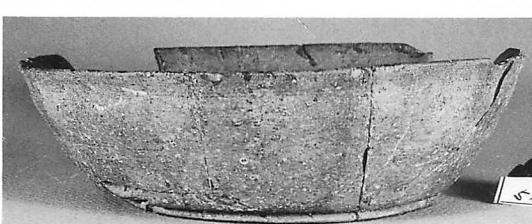
509



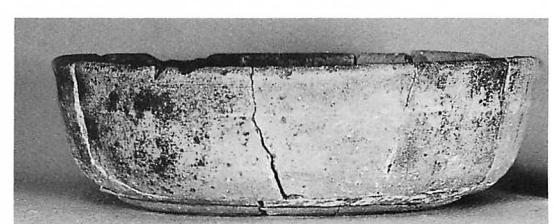
441



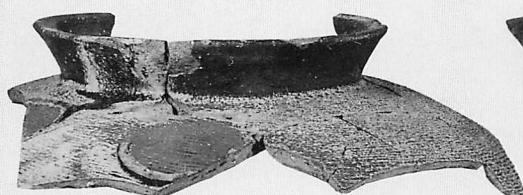
511



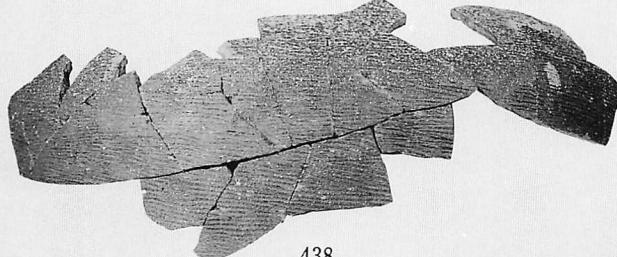
510



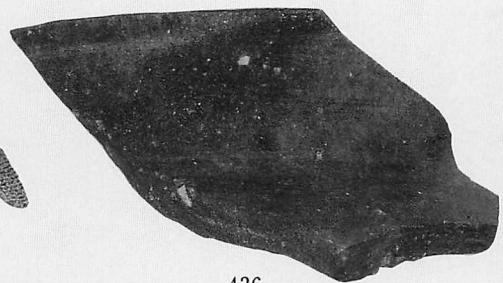
515



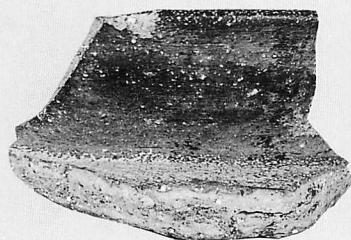
436



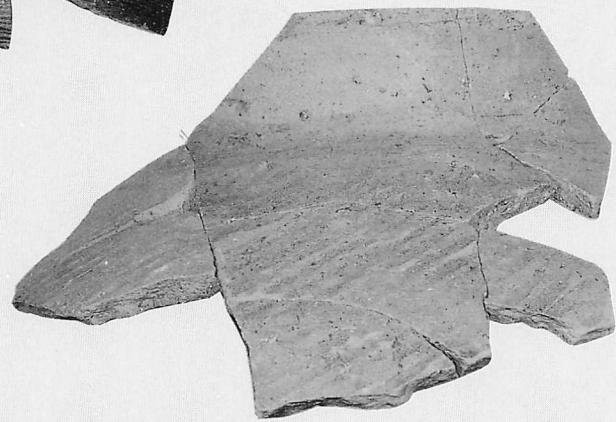
438



563



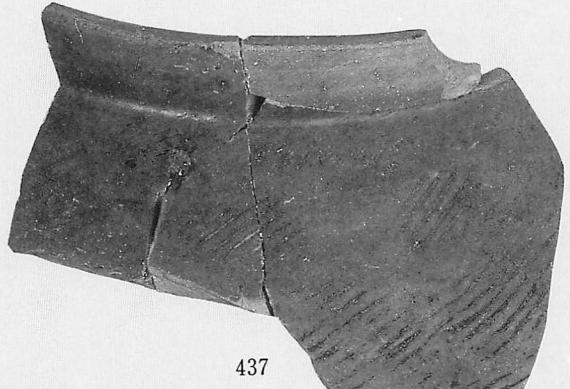
434



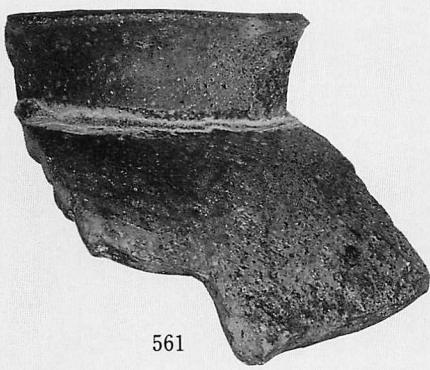
437



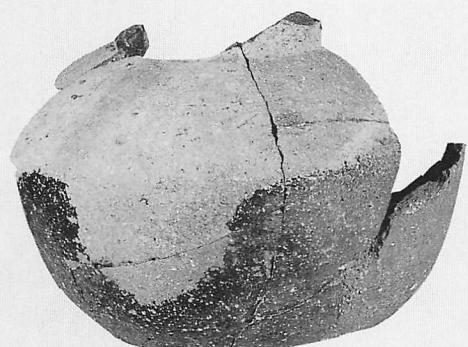
435



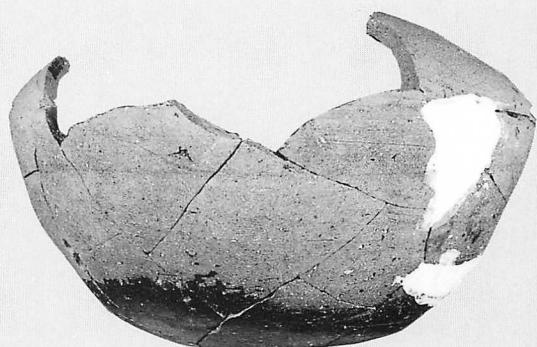
561



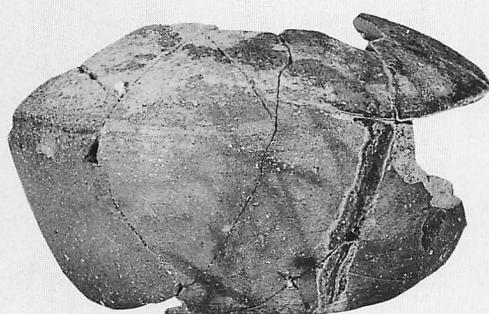
426



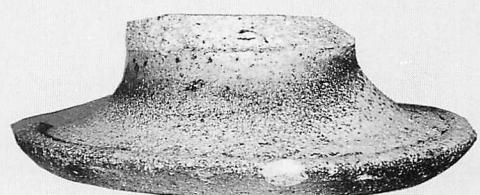
571



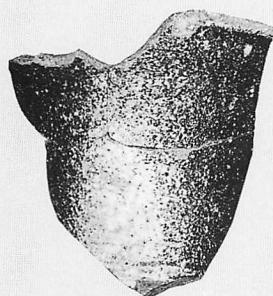
432



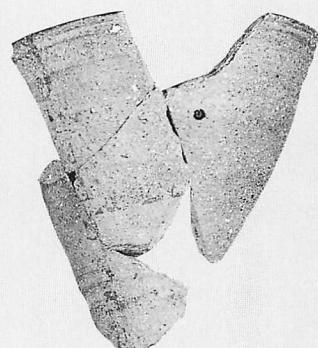
572



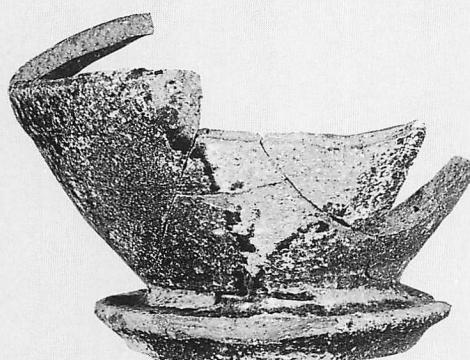
425



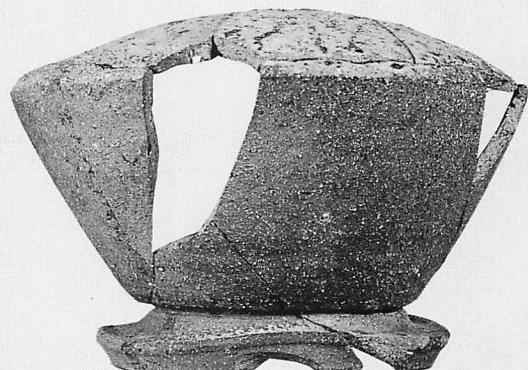
430



428



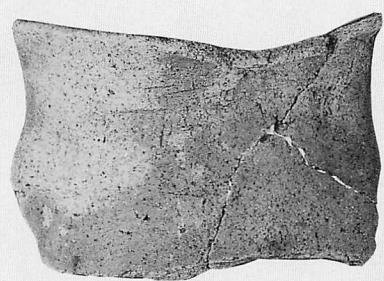
431



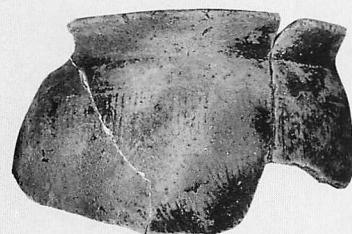
429



350



447



351



455



353



632

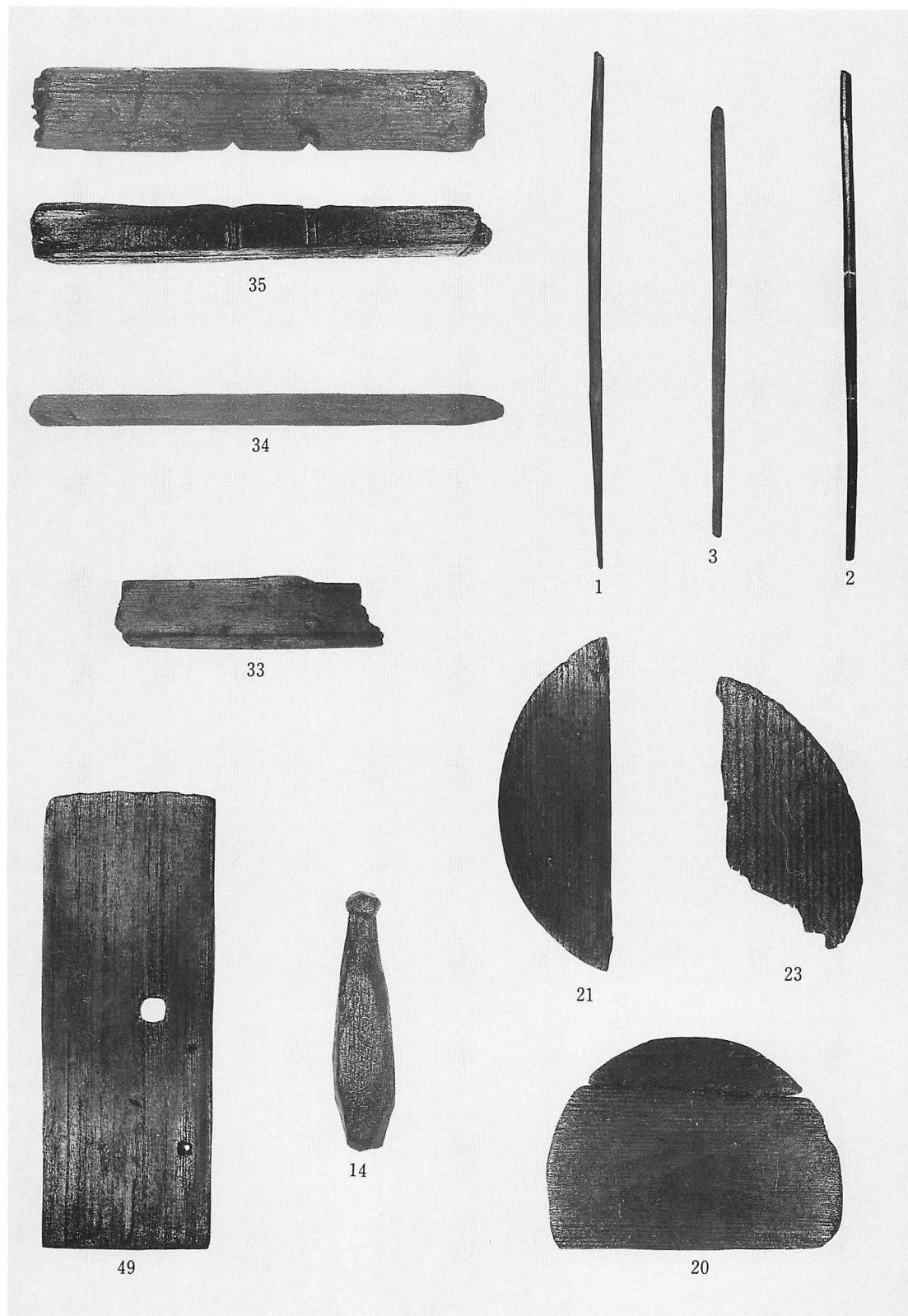


354

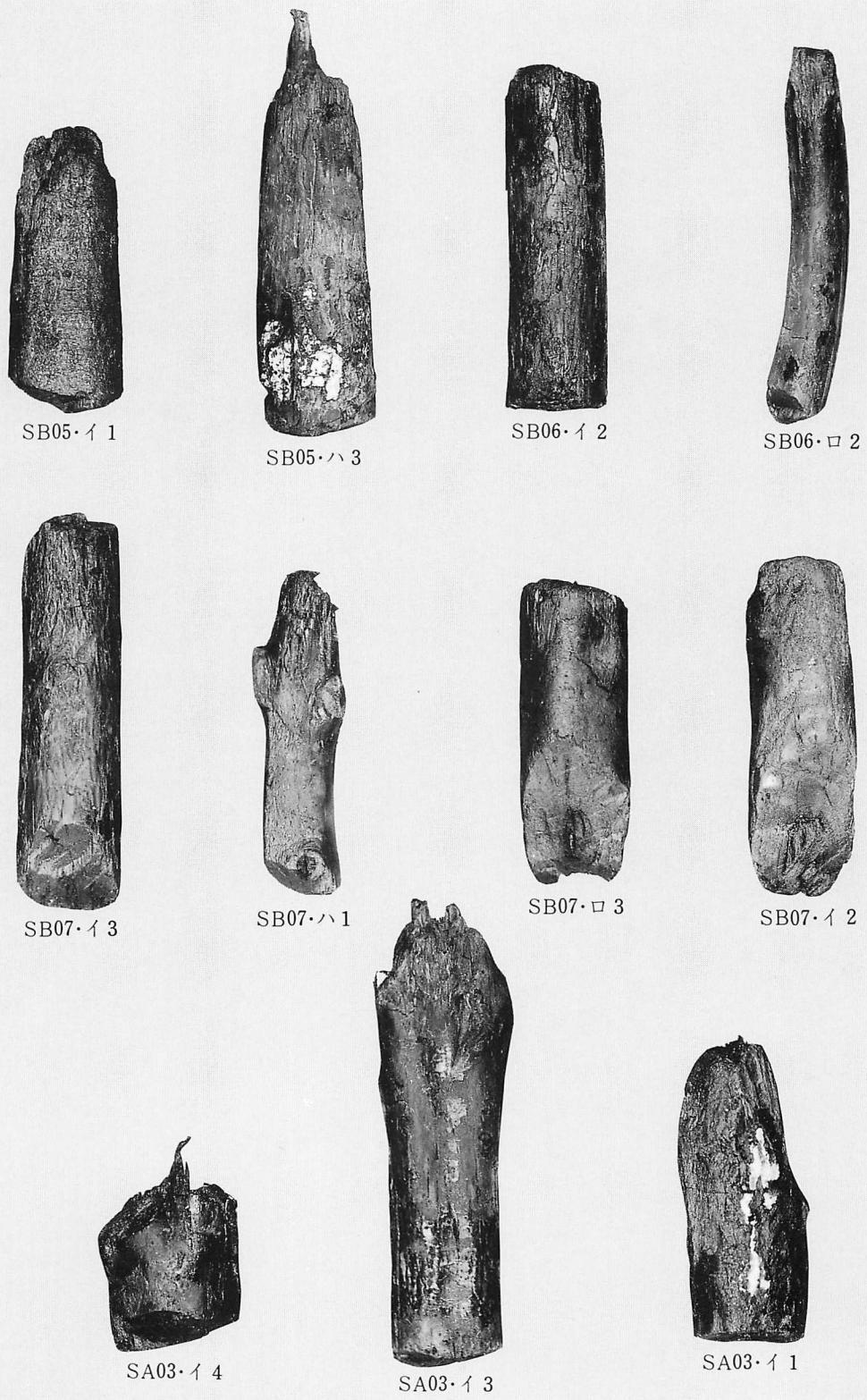


461

土師器　甕・鍋・甑・壺・支脚



木製品(第13・14図)



柱 根(第12図)



580



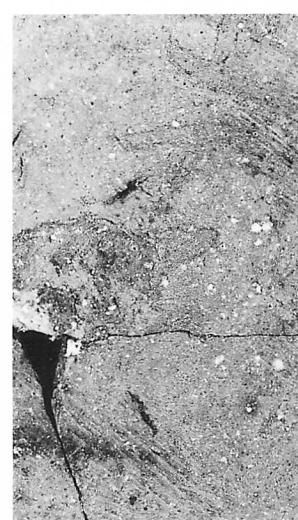
584



582



334



331



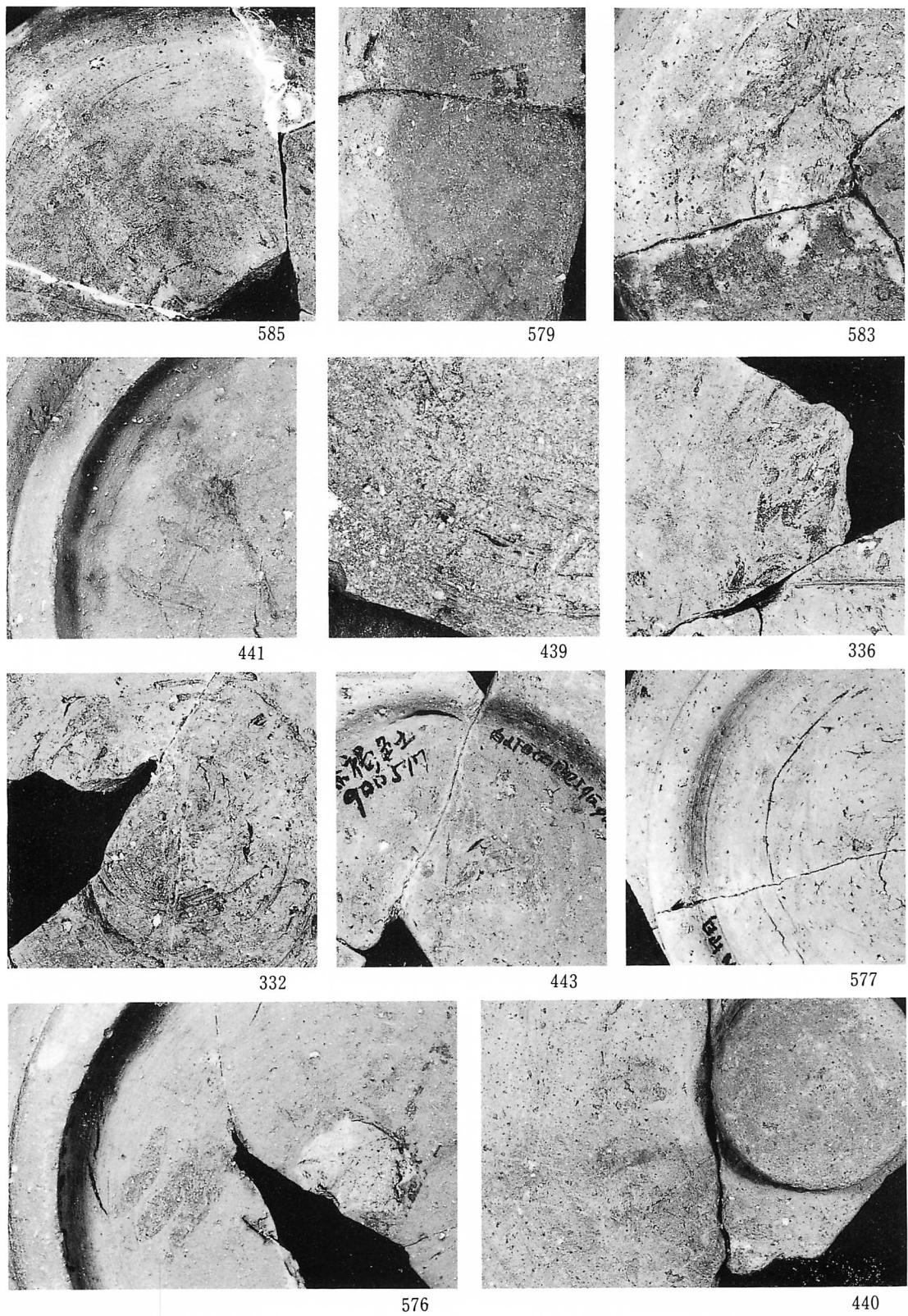
333



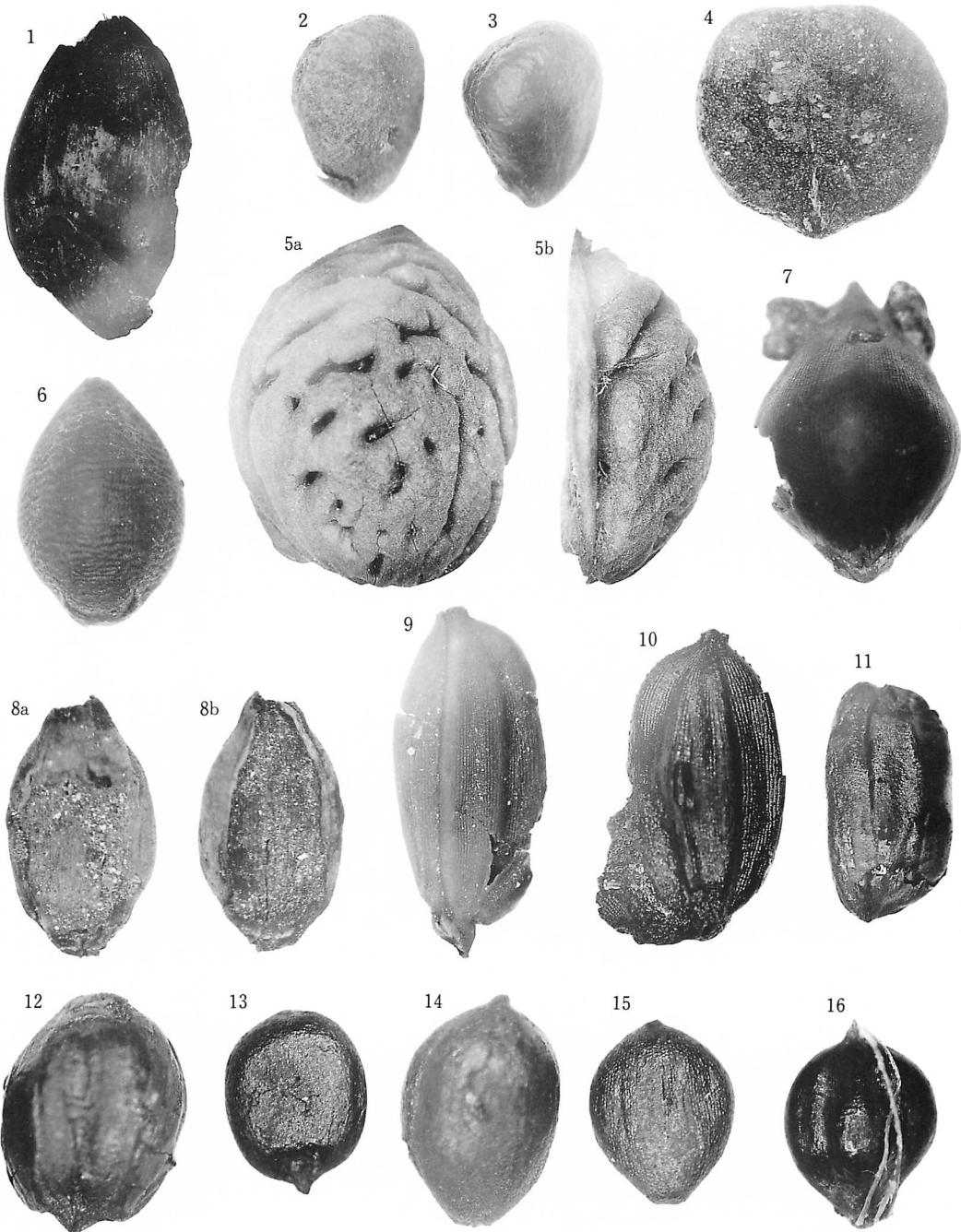
335



578



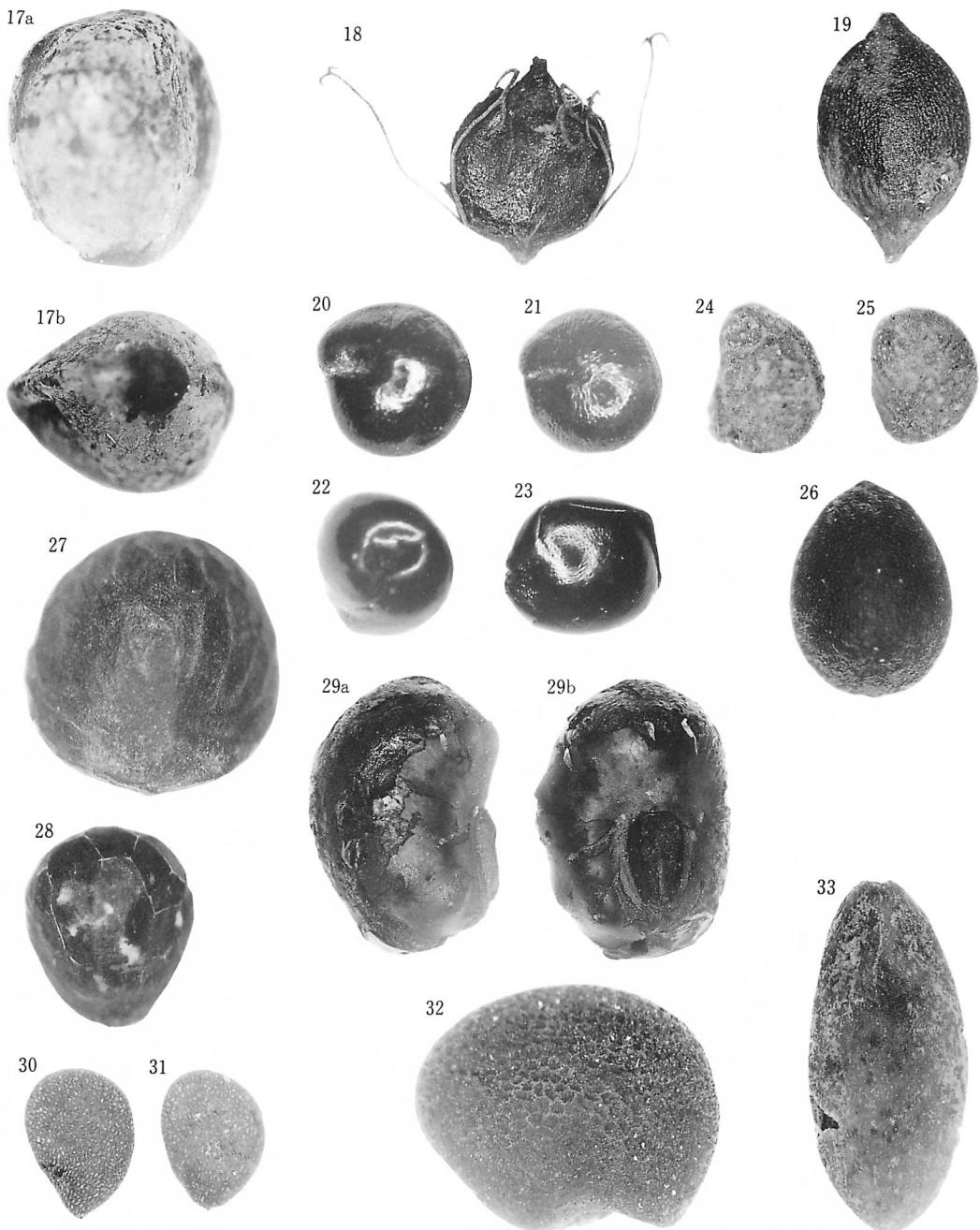
墨書文字 2



四柳白山下遺跡の大型植物化石 (I)

種類、倍率、標本番号の順に示した。標本番号は、群集試料番号と種類番号がハイフンでつないで示されており、MM923はSD04地点の、MM924はSD03地点の試料である。

- 1 : クリ果実, $\times 3$ (MM923-1). 2, 3 : クワ属種子, $\times 12$ (MM923-6). 4 : ガマズミ属ガマズミ節核, $\times 18$ (MM923-5). 5 : モモ核, $\times 2$ (MM923-2). 6 : エノコログサ属未炭化穎, $\times 12$ (MM923-18). 7 : イヌビエ炭化穎, $\times 12$ (MM923-19). 8 : イネ科A穎, $\times 18$ (MM923-20). 9 : イネ未炭化穎, $\times 6$ (MM923-3). 10 : イネ炭化穎, $\times 6$ (MM923-3). 11 : イネ炭化胚乳, $\times 6$ (MM923-3). 12, 13 : イネ科B炭化穎, $\times 18$ (MM923-21). 14, 15 : スゲ属A果実, $\times 18$ (MM923-35). 16 : ホタルイ属A果実, $\times 12$ (MM923-31).



四柳白山下遺跡の大型植物化石(Ⅱ)

種類、倍率、標本番号の順に示した。標本番号は、群集試料番号と種類番号がハイフンでつないで示されており、MM923はSD04地点の、MM924はSD03地点の試料である。

17: アサ種子, $\times 9$ (MM923-4). 18: サナエタデ果実, $\times 12$ (MM923-8). 19: ヤナギタデ果実, $\times 12$ (MM923-25). 20, 21: シロザ近似種種子, $\times 18$ (MM923-10). 22, 23: ヒユ属種子, $\times 18$ (MM923-9). 24, 25: ヘビイチゴ属果実, $\times 18$ (MM923-36). 26: エノキグサ種子, $\times 18$ (MM923-37). 27: シソ属果実, $\times 18$ (MM923-7). 28: イヌコウジュ属またはシソ属果実, $\times 18$ (MM923-7). 29: マメ科A種子, $\times 6$ (MM924-36). 30, 31: ナス属A種子, $\times 12$ (MM924-8). 32: ナス種子, $\times 12$ (MM924-6). 33: メロン仲間種子, $\times 6$ (MM924-4).



【発掘調査参加者】

坂井 俊次	坂井 晶子	上田 正則	宮田 光男	松柳 清枝	宮田ときの
国田吉次郎	(以上、四柳町)				
今井 勇	浜田 誉	大島とみ子	木前 明光	三門 信秀	(以上、大町)
松井 行雄	高沢あきの	(以上、下曾称町)			
横浜 栄藏	砂田外次郎	北井よし子	(以上、酒井町)		
藤井 憨	三宅 秀雄	木谷由太郎	三宅 林三	木谷 沢平	藤井富美子
辻田 善一	溶定 千里	辻 政雄	高沢みよ子	今井 信子	田中喜久進
服部 敏子	三宅とよ子	木谷スミ子	今井チヨノ	田中 咲子	

(以上、金丸出町)

四柳白山下遺跡 II

発行日 平成 3 年 3 月 30 日

発行者 羽咋市教育委員会

羽咋市旭町ア- 200 番地

印刷所 北陸コロタイプ印刷

羽咋郡志雄町子浦甲 60